

せい か ほう まさ
星 火 方 正

ほうまさ
～燎原の火は方正から～

あの歴史に立ち会う一公墓建立前後の回想 趙 喜晨
北京で「嗚呼 満蒙開拓団」上映会開催さる
「嗚呼 満蒙開拓団」松江自主上映会アンケート集



革命烈士記念碑

方正県はまた革命烈士を多く生んだ土地である。この記念碑は、多くは国共内戦や朝鮮戦争で斃れた人たちを悼む慰霊塔である。記念碑の後方に烈士のお墓が立ち並び、「1954年8月、朝鮮水豊里で戦死 高射砲兵50団所属」というような碑銘が刻んである。1975年5月20日、建立された。方正日本人公墓から車で20分ほど離れたところにある。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第10号） ～燎原の火は方正から～

目次

あの歴史に立ち会う―「方正日本人公墓」建立前後の回想	趙喜晨	1
琿春と岐阜県満州開拓団	小島正憲	6
東京の商店街からも開拓団に参加したのだ！ ―「こや定ふれあいスクール」に参加して―	吉川雄作	9
私の方正之路 二つの吊い 他	奥村正雄	11
2009年夏中国・旧満州の旅	名井佳子	18
「前の経験を忘れず、後の教訓とする」 ―日本映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て―	趙喜晨	21
北京での「嗚呼 満蒙開拓団」鑑賞会を終えて	佐渡京子	25
中国での波紋―「嗚呼 満蒙開拓団」 羽田澄子さんへの手紙	石金楮	28
日本に帰還しなかった兵士たち ―映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て自作映画を考える―	松林要樹	29
方正とランプーン、二つの慰霊塔に思うこと ～「嗚呼 満蒙開拓団」と「花と兵隊」～	森一彦	31
深谷シネマで『嗚呼 満蒙開拓団』を観る	芹沢昇雄	33
次世代に伝えたい―「嗚呼 満蒙開拓団」自主上映会に関わって―	渡部通恵	34
涙が止まらなかった	畠山孝	36
追想 一映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て―	松浦周之助	38
関東軍の無策に怒る	吉川健	39

真実かどうか冷静に見つめたい	高嶋 敏展	40
映画「嗚呼 満蒙開拓団」と講演で私が学んだこと	加納 佳子	42
私の六方拝 ー自主上映会に参加してー	高尾 源峰	43
松江は女性パワーで溢れていた	大類 善啓	45
松江「嗚呼 満蒙開拓団」 自主上映会アンケート集	ベルテの贈りものを届ける会	49
「愛国主義はエゴイズムだ」 ートルストイや北澤博史さんのことなど、思いつくまま	大類 善啓	63
資料「愛国心の跋扈は許さじ」	早野透氏執筆・朝日新聞記事	65
語り続け、伝えつづけー北澤博史さんを悼むー	高良 真木	66
身も心も丸裸	北澤 博史	68
《ハルピン便り》 アメリカ女性と養母と	石 金楷	70
収集されていない元満洲開拓団員の遺骨	宮下 春男	71
資料 残留日本女性ドラマ好調 ー中国 対日観変える視聴者もー	大木聖馬執筆・読売新聞記事	80
日本に残留し定住したある中国人 ー在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」 第6回	大類 善啓	81
映画「嗚呼 満蒙開拓団」のロケ地 中国・日本人公墓の旅（2010）	ご案内	88
第3回 近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅	ご案内	89
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの ー 「方正友好交流の会」へのお誘い	編集部	90
書籍案内 報告 編集後記	編集部	91

あの歴史に立ち会う

—「方正地区日本人公墓」 建立前後の回想—

北京 趙 喜晨

■ 前例のない歴史的な仕事

1961年、26歳の時、私は黒竜江省人民政府外事弁公室に異動を命じられ、1985年、仕事の必要から他の部門に異動するまで、ずっとそこで仕事をした。この25年間、私はほとんど居留民関係の仕事に従事した。

当時、黒竜江省「外事弁公室」は、本来の仕事のほかに、ふたつの「名義」を持っていた。すなわち黒竜江省人民政府「外事処」と、ハルピン市人民政府「外事処」であり、これは省と市の渉外事務の処理機構である。黒竜江省は外国居留民が最も多い省の一つである。省の「外事弁公室」はハルピン市以外の各地区、市、県の居留民業務について、すべての方針と原則の指導を行い、具体的業務は地方政府が自主的に処理する、というものだ。

当時、方正県は松花江地区に属していて、慣例によって方正県の渉外事務は、地区および県が自主的に処理することになっていた。しかし、方正県に日本人公墓を建立する一件は、中央政府が指導し、国の外交部が認可したものであり、コトは国内だけではなく国際的な影響に関わることであり、意味するところは極めて大きい。上層部はこの点を重視し、検討した結果、例外的にスタッフを派遣し、具体的な仕事を直接、処理するようにしたのである。幸いにも私はこの任務を任せられ、この忘れるわけにはいかない歴史に自ら関わる機会を持ったのである。

このようにハルピン市以外の居留民の仕事を直接、処理することになったのは、私の数十年の仕事の経歴の中で、この時だけである。それから数十年、この公墓が中日両国人民の相互理解、友好を深め、両国人民の歴史を見つめ、未来に向かって積極的な作用を及ぼした。このことは、当時の中央の指導の高邁なリーダーシップを証明するに足るものである。

■ 石材選びと安置場所

墓碑の建設は、世事に疎く、仕事の経験の足りない私について言えば、疑いようもなく重い仕事だった。まず最初に、外国人の墓地とはどういうものかを調べた。当時ハルピンにあった外国人の墓碑は、どれもみんな豪華で洗練されたものだった。ほとんどのものは輸入された石材でできていた。これから日本人の墓碑を建てようとしたら、どのようなものにしたらいいか…私はあれこれ考えた。当時、中国の政治、経済の状態からいけば、そして当時の中日関係の状況からいけば、セメントで固めたコンクリート製にしてもおかしくはなかった。それまで方正の現地で建っていた日本人公墓の前身は、ただ土を盛ったところへ木の墓碑を1本立てただけのものだった。私たちは討論し、これは長く言い伝えら

れる大仕事であるから、真剣に対処しなければならない。歴史の考察にも耐えうる永久的な墓碑を建てる必要がある。そこで意見が一致したのは、長い時間にも耐えうる石材で作らなければならない、ということだった。

方正県政府は私たちとこのことについて相談したとき、公有地の中から、墓地建設の土地を無料で提供してくれることに同意した。方正県政府にはまた、それまでの土饅頭のお墓があった土地がくぼ地で、いつも水害の心配があり、今回は少し高い土地を選んで、水害のたびに建てなおさなければならないという悩みを解消したい、という考えがあった。それからまもなく、方正側から私に電話があり、周囲の地形を詳しく調査した結果、高台で日当たりがよく、周りが松林で墓碑を建てるには格好の場所がある、今後どれほど大きな水害があっても大丈夫なところだ、一度来て見てもらいたい、と言ってきた。私は上役に相談した上で彼らの選択に同意する旨、返事した。こうして方正県幹部の意見に従って建設場所が決まった。省と県の墓碑の建設場所は、このようにして決まった。これが現在の「方正地区日本人公墓」の所在地である。

■ 墓碑の形

日本人のためにお墓を建てるには日本人の風俗習慣に合っていないといけない。しかし私は日本人のお墓がどのようなものか見たことがない。もしもいい加減なお墓を建てたら現代の人たちだけではなく後世の識者の物笑いにならないか？ 私は自転車に乗って外国人墓地を見て回った。「ギリシャ正教墓地」と「ユダヤ人墓地」はいずれもヨーロッパ人の十字架のついた墓碑である。日本人の墓地も墓碑も見つからなかった。その後、私は黒龍江省図書館へ行って、解放前のグラフ誌を調べた。そこで縦長の日本人の墓碑と、高く先がとがった関東軍の「忠霊塔」の写真を見つけた。私は方正の墓碑の形は、日本人の習俗に合っているし、これなら中国人に関東軍の「忠霊塔」を連想させず、中国人の感情を傷つけないだろう、と思った。そこで私の頭の中では、次第に墓碑の形の輪郭が出来上がっていった。それは四面で直立し、下が大きく上が小さい、頭部の四面が錐形の墓碑である。私が紙に描いたのを見て、上役も同僚も完全に同意してくれた。これが現在「方正中日友好園林」に建っている「方正地区日本人公墓」の青写真だった。

■ 碑文の揮毫

ここに埋葬されているのは日本の開拓団の農民であり、彼らもまた日本の軍国主義の中国侵略の犠牲者である。この墓碑の建立は日本の民衆の死者を尊重するものであり、生き残った開拓民に対する慰労であり、同時にまた後世の人々に対する警告である。

なぜ碑文に「方正県」と書かず「方正地区」と書いたか？ なぜそのまま「松花江地区」と書かなかったのか？

当時、中国の行政区画の規定によって、上から下へ「省→地区（市）→県→郷（鎮）→村」という編制の決まりがあった。当時、黒龍江省には「松花江地区」という行政区域があった（今はもう解消されている）。「地区」の下に10あまりの県が属し、「方正県」は「松花江地区」に属する一つの県であった。もし墓碑に「松花江地区」と書けば墓碑の該当す

る地域を拡大し、適切ではない。また、ただ「方正県」と書いたのでは狭すぎる。亡くなった開拓民はもともと方正県に住んでいた開拓民だけではないからである。その点「地区」という中国語はもともと「比較的範囲が広い場所」という意味である。そこで「県」をやめ、「地区」としたほうが適切だ、ということで「方正地区」となったものであり、行政区画としての「地区」の意味合いはない。

墓碑の文字を議論していた時、「日本の中国侵略で死亡した日本人公墓」という案も出た。これについて私は適切ではないと思った。これでは開拓民も関東軍も含む感じで錯覚を与えてしまい、本来の意味を変えることになるからである。私は「1945年没」と明記すべきだと考えた。すでにご存知のように1945年は日本が戦争に負け、投降した年だからである。史料にはこう記載されている。

＜ソ連赤軍は8月9日、電撃的に東北に進撃、日本の関東軍は対応できず、あわただしく応戦したものの1週間足らずで簡単に壊滅した。8月14日、日本はポツダム宣言受諾を宣言。8月15日、天皇は降伏の証書を放送した。関東軍はたちまち全線で瓦解した。関東軍司令官山田乙三は関東軍に作戦を停止し、ソ連軍に投降するよう命令した＞

8月下旬から関東軍はみんなソ連赤軍の俘虜となり、続々とシベリヤ大森林の伐採に送られた。松花江沿岸ではほとんど激しい戦闘はなかった。そして日本の開拓民は松花江沿岸の樺川、鶴崗、湯原、依蘭などから方正へ逃亡した時、もう8月末から9月上、中旬になっていた。ここではもう、急速に寒い晩秋から初冬の季節になっていた。そこで飢えと寒さと病気で死んだのは、哀れな日本開拓団の人達だけで、関東軍の兵は含まれていない。幸い生き延びた開拓民は、青壮年はみんな兵隊にとられ、誰もいなくなっていたと云っている。

■ 石材を選ぶ

私は何度もハルピンの極楽寺近くにある「ハルピン市石碑彫刻工場」へ出かけ、石材を選んだ。しかしどれもみんな中国人のために作る碑の石材ばかりで、選ぶのが難しい。形や寸法が合わないのではなく、材質が意に満たないのである。私は何度も彫刻工場と役所の間を往復しながら決定しかねていた。その後、私は突然、「文化公園」で外国人墓地をはかの場所に移していることを思い出した。そうだ、あそこへ行ってぴったりの石材を選び、再加工して利用したらいいではないか？ 私はもう倒されて乱雑に置かれた一群の墓石の中から、一つ大きな花崗岩の石碑を見つけた。うまいことに私が考えていた形と大きさにぴったりである。碑の隅にロシア語で「イタリー製」と彫ってある。何の傷もひびもない。そこでこの石碑に決め、石碑彫刻工場へ運ばせて加工することにしたのだった。

■ 碑文の書と彫刻

どんな書体で碑文を書いたらいいだろうか？ あれこれ考えたが、どうにも行き詰まった時、突然、気がついたのが私たちの職場に架けられている扁額の、非常に美しく整った書のことだった。この先生にお願いして書いていただいたらいいのではないかと？ そう思ってこの先生を探した。その結果、省の赤十字会に協力していただき、ついに「黒竜江省

文史館」におられた秦先生という老先生を捜し当てた。秦先生はお金は要らないと言う。先生の望みに従って、私たちは酒をお礼に差し上げることにした。当時、ハルピンの市場には、もう何年も白酒（バイチュウ、アルコール度の強い蒸留酒）を見かけなくなっていた。この酒好きな人にとって、これはどれほど身にこたえることだったか…。私たちはハルピン市商業局に頼んで特別に白酒を都合してもらい、秦先生に差し上げた。秦先生の表情が生き生きとし、気が乗って、雄大で力強く、端正で盛んな碑文が、紙の上で躍動した。これはまさに後世に残る傑作と言うべき書となった。私たちはこれを「彫刻工場」へ届け、ミスがないよう、くれぐれも気を入れて彫るように頼んだ。それから約半月後、精緻に彫り上げた墓碑が出来上がった。

■ 墓碑の輸送

彫刻工場がこの仕事を引き受ける時、工場の人達は、どうして日本人のためにこの碑を建てるのか、全く理解ができないと私に説明を求めた。根気よく説明して彼らも理解してくれ、品質を保証すること、期日までに彫り終えることを約束してくれた。日本を恨みに思う人達がこの石碑を見て破壊しようとすることを恐れた私たちは彫刻工場側に頼んで、石碑をカマスで何重にも包み、運び出すまで専門の監視人をつけて、しっかり倉庫に鍵をかけるよう頼んだ。当時、ハルピンと方正間は交通が不便で、墓碑が彫り終わった後もなかなか運ぶことができなかった。調査の結果、唯一、水路で運ぶのが安全で早いことがわかったので、水路で、と決めた。しかしこの時はちょうど渇水期で、トン数の大きな船は航行できない。私たちは毎日、降雨を祈って、早く豊水期が来るのを待った。毎週、黒竜江省航運局へ何回も電話して、水位と運行予定を問い合わせた。そして8月、ついに航行してよいという通知を受けた。「東方紅」という松花江では最も大きい貨客船の底部に墓碑は据えられ、10余時間かかってようやく伊漢通の波止場に着いた。雨が降れば船の航行には都合がいい。しかし波止場から墓碑の設置場所までは10キロあまりの陸路を車で運ばなければならない。この時、道路はひどくぬかるみ、車の運行はきわめて大変だった。方正県政府は多くの困難を克服して墓碑を目的地まで運んだ。方正県政府は赤レンガとコンクリートで墓碑のベースを作っておいてくれ、石碑は上の背面で高さ3メートルあり、大変、尊厳な感じでなおかつ慎み深いムードを持っている。

■ 墓碑の保護

ご存知のように、1966年に始まった文化大革命は中国全土を災害に巻き込み、多くの文化遺産が破壊され、多くの歴史上有名な人達のお墓が壊された。当然、「紅衛兵」は、かつての敵国日本人の公墓を放っておくはずがない。彼らはあくまで墓碑を壊そうとした。緊急事態にのぞみ、方正県政府は直ちに省政府にどう対処したらいいか、指示を仰いだ。電話を私が受けた。すぐ上司に指示を仰ぐと、省政府の名で次の命令を出した。

「この公墓は中央政府が許可して建設したものだ。埋葬されているのは日本の庶民であり、日本の軍人ではない。誰であれ、どの団体であれ、それを壊してはならない」

それと同時に公安部門に公墓を保護する措置を講ずるよう要請した。同時に私を方正に

派遣し、現地での状況を見させ、重ねてお金を出し、お墓のまわりに柵をめぐらせて保護を厳重にした。紅衛兵はこの状況を見てあきらめ、引き下がった。こうして災難は免れた。その後、方正政府は数十年、日常の維持、管理に力を注ぎ、現在見るように、この墓碑を完全に維持管理して今日に至っている。墓碑の保護は、とりもなおさず中日両国人民の友好を守ることである。

■ 遺憾と期待

最近、大使館の友人が方正県を訪問するにあたって、私に何か用はないかと尋ねた。私は彼女に墓碑の裏側に詳しい碑文が加わっているかどうか、見てきてくれるよう頼んだ。帰ってきて彼女は何もなかった、と答えた。墓碑の背面に碑文がないのが、この数十年、残念に思ってきたことである。私はいつも碑の背面に碑文があったほうが、表の石面だけにあるより良い、といつも感じている。私たちのこの世代は、この時代をこの身で生きてきたのだ。自ら次の世代に伝えることができる。では次の世代は？ こうした文字は前人が歩いた道を、体験した歴史を、簡潔に彼らに伝え、彼らに深く考えてもらい、知恵を出してもらうことが、さらに良いことではないだろうか？ もしもだれか志ある者が現れてやってくれるなら、私と同じようにこの公墓に関心がある人達を感動させるに違いない。

小生、文才はなほだ浅薄であることを省みず、厚顔にも以下のような文字を並べてみた。それはほかでもない、優れた書き手の登場を待望すればこそである。

*

《1931年9月 日本は東北三省を占領するや植民地政策を実施 日本の農民を広大な農地に送り込む 開拓団として農耕に励むも 時の流れ速く 1945年8月 日本軍降伏 あまた開拓民 惶惶として逃げ惑う 九死に一生を得て方正に辿り着くも 飢餓 酷寒 病疫に耐え切れず 罪なき亡霊五千 1963年春 荒地開墾の残留婦人 白骨を発見して惶懼 これを集めて埋める 申請を受けてこの年5月 中国政府 仁慈の心をもって碑を建て 亡魂を悼み 故国を想いながら他郷に没した魂魄を慰む 後世の者 前の経験を忘れず後の教訓とせんことを 中日の戦 永遠にやみ 善隣友好を 永遠に忘れぬために 2010年3月 追記》

(奥村正雄訳)

(ちょう・きしん：75歳。1961年から1985年まで黒竜江省政府外事弁公室領事僑務処に勤務。方正地区日本人公墓建設時にこれを担当。石材選びから墓碑銘の書家探し、方正までの搬送を陣頭指揮。日本処科長、処長を歴任。現在、北京市在住。方正友好交流の会の「方正墓参の旅」で世話していただいているハルピン中国康輝国際旅行社の趙航社長は筆者の次男)

琿春と岐阜県満州開拓団

小島 正憲

2005年4月、私は工場の立地調査のため琿春市を訪れた。まず琿春市長と面談し、市の概況を尋ねた。そのとき琿春市長がわが社のパンフレットを見て、本社が岐阜県だということに気づき、私に琿春市と岐阜県とは縁が深いと話してくれた。戦前、琿春市に岐阜県の朝日・和良・高鷲の3村が開拓団として入植していたというのだ。それを聞いて私は、その奇縁にびっくりした。なぜなら小島衣料本社には、30年ほど前、その和良や高鷲村から従業員さんが働きに来てくれていたからである。ひょっとすると、この琿春から引き上げた人の関係者がいたかもしれない。私は琿春市に運命的なものを感じ、どうしてもこの工場を成功させねばと心に誓いながら、同年11月、琿春市経済合作区で独資工場の稼働を開始した。

琿春の冬は寒かった。ことに残業で夜遅くなって、工場から宿舎まで寒風に吹きさらされながら帰るときは、その寒さで身が切られる思いだった。そんなとき私は「戦前の岐阜県人はよくこの寒さに耐えて開拓に携わったものだ。俺も負けてはいられない」と思いながら、背を丸め歯をくいしばり足早に歩いた。やがて春も過ぎ、短い夏を迎えた。琿春の夏はけっこう蒸し暑かったので、汗をかきながら真っ暗な夜道を歩いた。

1年ほどたったとき、満鉄研究家の安部先生から琿春の岐阜県満州開拓団の古地図を見せてもらった。それを見て驚いた。私の工場は高鷲村開拓団の真ん中に立っていたのである。現在、このあたり一帯は工場用地として大規模に開発されており、開拓団の痕跡はまったく残っていない。しかし地図をみるかぎり、間違いなく私のこの工場の下には、多くの岐阜県人の方々が眠っておられるのである。60年の歳月を経て、偶然、私はここにきて、なにも知らずに、毎晩、その上を歩いていたのである。その晩、私は静かに大地に手をつけ、彼らの霊に向って、同じ岐阜県人としてこの地でふたたびがんばることを誓った。

その後しばらくして、琿春市の関係者から、岐阜県満州開拓団の様子を聞くことができた。話によれば、高鷲や和良村はその痕跡がまったくなくなったが、朝日村だけは残っているという。私はさっそく行ってみた。古地図と現在の地図を重ね合わせてみたところ、地名が同じ場所が多く、意外に簡単にたどりつくことができた。工場からわずかに車で10分ほどのところであった。その鎮長さんが日本に留学していたという若い人で、いろいろと説明してくれた。そこには戦前の日本人住居が3棟残っていたし、灌漑のために日本人が琿春川から水を引くために作った用水路などが残されていた。古地図上には、飛行場や砲台跡などが記されていたので、そこにも案内してもらった。そして彼から、数年前に朝日村から代表団が来たとか、この地に住んでいたという朝日村の老人が身寄りをさがしにきたこともあったなどという話を聞いた。

日本に帰って、私は満鉄の資料や満蒙開拓団の書物、岐阜県開拓団史、朝日村開拓団史などを読んでみた。それらの資料の中には、満州開拓団のことが詳しく書いてあった。それらを読んでわかったことは、多くの日本の開拓団が満州の地に勝手にきて、中国人を追い払い、そこを自分のものにしたという事実である。日本人自身の口からそれが語られているし、中国人側からの詳細な記述もある。それらを読めば、開拓というのは名ばかりで、実態はまさに侵略であったことがよくわかる。そこに地元の中国人を虐殺したという記録がないことだけが幸いだった。もちろんこれらの開拓団が満州に進出したのは国策に沿ったもので、彼らもまた被害者だったことも事実である。

その結果、岐阜県開拓団は入植後わずか5年で、この地から逃げ出すことになった。ソ連の参戦によって、国境沿いの琿春に入植していた岐阜県開拓団は真っ先にソ連兵に攻撃され、多くの岐阜県人が琿春の地で死んでいった。生き残った岐阜県人も必死に逃げまどった。その悲劇の様も書物に、はっきりと記述されている。私は同じ岐阜県人として、これを涙なしには読むことができなかった。

しかしながら、これらの書物を読み進めるうちに、意外にも、逃亡の最中に中国人に助けられた日本人の話が多いことに驚いた。ソ連兵に追われていた日本人女性が中国人の家にかくまわれた話、行き倒れ寸前になっていた男性が中国人からおかゆをたべさせてもらい、体力が回復するまでその家に寝泊りさせてもらった話、日本人が中国人の家に物乞いに行ったらなんどもめぐんでくれたので、それで多くの日本人が食いつなぎ生き延びた話、死にそうになった日本人の子供を中国人が喜んで引き取ってくれ、わが子同然に育ててくれた話などなど。普通に考えれば、日本人が勝手に中国にきて、土着していた中国人からむりやり土地を取り上げ放り出したわけだから、日本人は全員、彼らからたたき出されても文句の言えるすじあいではなかった。だから殴られた人や財産を盗られた人もいたが、それで中国人を責めるわけにはいかない。むしろそのような中で、多くの中国人が日本人を助けたという事実、その寛大さにこそ注目すべきであると思う。

中国人のこの暖かい行為に、日本人は感謝すべきなのではないか。私は心の底からそう考えていたので、昨年、琿春工場に取材にきた日本の新聞記者に、朝日村の話を率直に話した。すると後日、その記事を読んだ人たちから手紙が私のもとに寄せられてきた。その中の一通には、「私は大連からの引き上げ船の中で生まれました。母親がハルビンから逃げ帰るとき、中国人にたいへん助けられました。それがなかったら、現在の私はなかった。私は中国人に感謝しています」と書かれていた。私はそれを読みながら涙を流した。

私はできれば朝日村のあの日本人の旧居を買い取って、記念館にして保存したいと思っている。中国人の寛大さに対して、日本人の感謝の念を表明する記念館としたいのである。中国にあまたある日本人の蛮行を陳列した記念館ではなく、歴史的に中国人は寛大な民族であったということを、日本人が歌い上げた記念館を作ってみたいのである。このような記念館があれば、中国が経済大国になろうとしている現在、中国人自身に、かつて自分たちは懐が深く寛大であったということを自覚させ、中国人に大人の振る舞いをさせること

ができるのではないかと思うのである。

このような私の主張は、日本では売国奴扱いされるかもしれない。またいたずらに中国を持ち上げ、夜郎自大化させるべきではないとの批判が寄せられるだろう。勇ましい反中愛国者からは、中国に対しては力で対抗すべきであって、下手に出るべきではないとの非難も浴びせられるであろう。

しかしとかく日本人は国論を一枚岩にすることが好きで、異論異説を排除しがちである。高度に発達した民主主義社会である日本は、少数意見や異論を排除すべきではなく、それに耳を傾ける余裕がなくてはならないと思う。また日本外交には硬軟両様の戦略戦術が必要であるし、相手国とは表裏両面での接触を駆使しなければ勝てないを考える。だから私のこのような行為は一見して日本世論に逆行するようではあるが、今後の日中関係を考えた場合、か細いバイパスではあるが、必要ではないかと思う次第である。

岐阜県人の私が奇しくも、60年の歳月を経て、同じ場所に仕事をしにきている。私は中国人を追い散らして工場を建てたわけではない。むしろ中国人に職場を与え、琿春市にも多大な貢献をしている。しかし見方を変えれば、中国人の安い労働力を利用して利益をあげているわけであり、それは収奪とも言える。それは戦前の日本人と同じ類の行為だともいえる。だから私は、いつなんどき私の周囲に戦前の再現が起こるかもしれないと腹をくくっている。そしてもしそのようなことが起きたときは、中国人の寛大な態度に、再び救われることを確信している。

(こじま・まさのり：1947年生まれ。元・小島衣料(株)代表取締役。日本における縫製業の環境悪化のため日本脱出。91年から19年間にわたり中国で縫製工場を経営。著書に『10年中国に挑む』『多国籍中小企業奮戦記』『中国ありのまま仕事事情』などがある)

東京の商店街からも開拓団に参加したのだ！

—「こや定ふれあいスクール」に参加して—

吉川雄作

去る3月17日、「こや定ふれあいスクール」なる催しに、当会参与の奥村氏らとともに参加した。「こや定」が「都立小山台高校定時制」の略称と知るまで少し時間がかかった。

その「こや定」では、「——生徒の生きる力を高め、人権の尊重、多文化の理解、市民の育成、国際平和をテーマに特色ある教育活動を実施——」（案内文より）を謳っている。

今回のテーマは「東京の満蒙開拓団を知ろう ～武蔵小山商店街と戦争～」で、教育活動＝授業の一環としながら一般市民にも見学を呼びかけて実施されたものだ。講師の一人に、奥村氏と私も加わる「ちば中国帰国者支援交流会」の会長であり、日本中国友好協会理事でもある飯白栄助氏が、開拓団体験者として招かれている。

初めに視聴覚教室で、NHKが2009年8月9日に放送した番組「証言記録 市民たちの戦争 強いられた転業 東京開拓団 ～東京・武蔵小山～」のビデオを見た。これには戦前この地で成育した飯白氏自身が、七歳上の実姉飯白タツ子さんとともにインタビューに応える形で出演している。私はこの番組を見ていなかったの、初めて飯白氏と小山商店街との関係を知ることとなった。

ついで、会場を近くの小山台会館に移し、まず、「東京の満蒙開拓団を知る会」の藤村妙子さんによる「東京の満蒙開拓団」の歴史・実態について、各種資料を投影しながら詳細な説明がなされた。その内容は、私にとって「目からウロコ」というより、その全てが初めて知る事柄で、まさに驚きの連続であった。続いて、飯白氏と同じく開拓団体験者であった森沢義雄氏の体験談が語られた。

「満蒙開拓団」＝「長野県泰阜村」・「大地の子」程度の固定観念しかなく、他の地からあっても、農村からの入植とばかり思っていたが、東京の商店街からの入植もあったこと、しかも半強制的に閉店に追い込まれ、入植させられたという事実、農業未経験入植者のための訓練機関が設置されていたこと、いくつかの教育機関や宗教団体が積極的な役割を果たしていたという事実なども、初めて知り得たことであった。いずれも「国策」の名の下に推し進められたのであった。

小山台商店街は、都内でも有数の歴史を持ち、いわゆる「シャッター商店街」化が多い昨今、変わらぬ賑わいを保っている商店街の一つとして知られているが、ここにも空襲などとは別に、「戦争」と深く関わる歴史があったことを知り、満蒙開拓団といえば、とかくソ連参戦後の逃避行の悲惨にばかり目を向けがちだが、入植に至る経緯を知ること重要なこと、との思いを深くした。

また、付加的なことだが、こうした内容の「授業」が「都立高校で」行われているとい

う事実を目の当たりにすることができたことも、かつて教員であった私には爽やかな驚きであった。「こや定」の先生方（校長を含む）と「知る会」の方々の信念・熱意と苦心に、心から敬服申し上げる（生徒用の「満蒙開拓団資料」には、全ての漢字にふりがなが付けられていた）。

こうした地道な活動を広げていくことにより、一般庶民にとっての「戦争の実相」をしっかりと伝えて行くことが、声高に「道徳論」を叫ぶよりもはるかに今日的価値があることと考える。

そうした意味で、この催しは、私にとっても極めて有意義な「授業」であった。

（よしかわ・ゆうさく：1937年 札幌市生まれ。都内私立高校で国語科教員として勤務。定年後、中国語学習を開始。2006年の方正訪問（会報第3号参照）を含め、中国旅行6回。ちば中国帰国者支援交流の会事務局員。「千葉の干潟を守る会」等自然保護活動にも関る）

奥村 正雄

二つの弔い

その一

■ 山懐の通夜

福地正博さん（享年72歳）の訃報を聞いたのは、昨年暮れも押しつまった12月30日である。電話で知らせてくれた劉玉琴夫人（71歳）の声は驚くほど冷静だった。逝去は28日。肺がんで入退院を繰り返していたので、夫の死はすでに彼女の胸の中で、数え切れないほど覚悟を迫られていたせいかとも思ったほどである。

「通夜を1月4日6時から、告別式を5日10時から、市川市の霊園で行いますので…」夫とともに来日して10年、中国語と日本語が相なかばする訃報だった。新年になって帰国者のZさんから連絡があった。通夜の会場がわからないから一緒に行きたいという申し入れだった。彼は今、千葉市に住んでいるが、以前、故人と同じ市川市国府台の県営住宅に住んでいて福地さんと親しかったのである。

4日、JR本八幡駅で待つとZさん夫妻とZ夫人の弟夫妻の4人が見えた。駅前からバスで終点の県立北高校前で降りた。そこはすでに町外れでまわりに家はない。そこからさらに霊園まで、暗い夜道の徒歩15分で心が凍えた。公道は工事中で迷路のような狭い道がどこまでも続く。夜目にも霊園とおぼしき林の丘にぶつかった。そこから山裾を迂回しながら漆黒の路をさらに6、7分。会堂の灯りが見えたときはほっとした。

集まった弔問者が40人ばかり。

「ハルピンの娘は、瀋陽の領事館が正月休みにはいってビザがとれなかったのです」と夫人。夫妻には長男と双子の姉妹がいる。姉妹の妹がハルピンの黒龍江大学教授夫人として、ひとり胸が張り裂ける思いで領事館の業務再開を待っているのだろう。

通夜は質素に、会場の女性が進める型通りの進行を、長男が勤めるI社の通訳が中国語に訳して進められた。一輪の花を霊前に捧げ、棺の窓から遺体に合掌する。眠っているような安らかな死に顔は、血色さえ元気な頃を髣髴させる生気が漂う。

■ 雪の日の病床で

私は思わず1年前の、雪の日の情景を思い出していた。春先なのに雪になって、JR西船橋駅から病院へ向かって歩いた私は、病院の玄関でしばらく雨靴の中に入った雪と、濡れた衣服を始末してから5階の病室へ向かった。4人部屋に患者2人、福地さんは眠っていた。私は彼の枕もとのスツールに腰をかけ、彼が眼を覚ますのを待った。5分ほどして

眼を開いた。が、私を認めても表情を動かさない。それだけで体調がよくないことがわかった。

「中国から送ってもらった肺がんの新薬が、どうも効果が出てきているみたいだよ」ある知人からそう聞いたことがあった。しかし病状はやはり一進一退に見えた。福地さんが肺がんと診断された頃、私には千葉にもう一人、肺がんで苦しんでいる知人がいた。私には彼もまた病状が一進一退に見え、ある時期、2人の様子から肺がんは死ななくてもいい病気になってきたのか、と思ったこともあった。が、私のもう一人の友人は、半年ほど前に亡くなっていた。その後に訪ねた雪の日の福地さんの様子を見て、よくなさそうだと思った。半身を起しし枕元の引き出しから印鑑を出す動作も歯を食いしばるようにしてとった。私は厚労省に出す書類に判を押してもらおうと、「どうぞ大事にしてネ」とだけ言って早々に引き揚げた。

その後の福地さんの様子は、Zさんが電話で福地夫人から聞く「あまりよくないようだ」という知らせで聞いていたが、いよいよ死が近づいていたことは知らなかった。

■ 胃癌の手術跡を見せ合う

私が千葉県中国帰国者自立指導員として福地さんを担当、夫妻と初めて会ったのは2000年10月2日、市川市役所である。この日、福地さん夫妻は埼玉県所沢の中国帰国者定着促進センターから、千葉県の担当者に同道され、まず市役所で各種の手続きを済ませた上、国府台の県営住宅に入居したのだった。青森県から両親、弟妹たちと満州に渡り、父が入隊した後、敗戦の逃亡途中、母と弟妹をあいついで失う。運良く善良な養父母に育てられてハルピンの理工大学（現在の科学技術大学）を卒業、やがて学長、党書記まで登りつめた前半生のことは、本誌9号「忘れ難き歲月」に詳しい。

週に1、2回、3年間、彼の家や病院（国府台国立病院には夫人も心臓病のために診療を受けていた）で接した思いでは尽きない。忘れられない一つは私より7つ年下の彼もほぼ同じころ（12年前）ともに胃癌の手術を受け、お互いの手術跡を見せ合ったら、思わず2人で笑いあったほど、手術後に縫合した傷跡の場所も形も実によく似ていたことだった。そんな時に見せる、人懐っこい笑い顔が、今も鮮やかに目の前に現れる。

■ 蓋を覆わせず

通夜の夜、同行した帰国者4人は、最寄の駅まで車で送ってもらった。しかし私は、来た時の荒涼とした夜の復路を、さまざまなことを考えながら歩いて帰った。翌日の告別式にも私は選んでこの道を歩いて行った。寒くて寂しい夜道とは違い藍天が心地よかった。だが告別の儀が進み、最後に棺の蓋を覆う時である。昨晚から先ほどまで、あれほど冷静に見えた夫人が、多くの花や遺品で覆われた夫の遺体にとりすがり、泣き喚いて蓋を覆わせなかったのだ。こんな光景を、私は78年の人生ではじめて見た。中国での社会的立場がどうであったにしろ、夫人としては異国へ来て生活保護を受けながら、言葉も通じない老後を耐えてきた。その夫に先立たれたのである。私は目の前に繰り広げられている情景

を、自分の気持ちの中で、自分でも驚くほど自然に受け入れていた。

私と同じ胃癌の手術跡を持つ7つ年下の福地さんは、私にはまだ訪れない次の癌のために先に逝ってしまった。私はまた冬晴れの田舎道をゆっくり、ひとり歩いてバス停に向かった。

その二

■ 映画「嗚呼…」で再会

「えッ、元気なんだ！」

思わずそう叫びそうになったのが映画『嗚呼 満蒙開拓団』の冒頭シーンにアップで出てきた中国帰国者・鈴木和子さんである。厚労省前、「団結」の鉢巻を締め、帰国者の仲間と両肩を組んでシュプレヒコールをあげている。このシーンは私が撮影にタッチする前、羽田監督がまだ中国ロケを決心する前に撮っておいた映像だから、私は映画が完成した後、初めて見たこの場面で、今はもうこの世にいない彼女と再会して、一瞬わが眼を疑ったのである。彼女は千葉市に住み、帰国者の役員として、私たち千葉で中国帰国者を支援する会にも時々顔を見せていたが、より多くは東京で開かれる帰国者・弁護団の会議に出ることが多かった。ただ、千葉で開く春節（旧正月）を祝う会などでは、よく蒙古族の扮装でリズムカルな踊りを見せたりする芸達者な女性だった。

しばらく姿を見せない理由を、私たちは東京の会議が忙しいからだろうと、勝手に想像していたある日、突然、訃報が舞い込んだ。それもこんなショッキングな詳報とともに。

「体調を崩して入院したら、もう肺癌が末期だった。彼女はどうしても中国へ帰りたいと主治医に懇願したが、彼女の病状は、もうその願いを許せる限界をはるかに越えていた。意を決した彼女は無断で病院を抜け出し、タクシーを拾って成田空港へ急いだ。しかし成田では当然ながら搭乗させてもらえず、病院へUターンして息を引き取ったそうだ」

■ 命がけの搭乗へ

「日本では自分の必死の訴えが言葉の壁で通じない。中国の病院へ行けば、なんとか活路が見出せると思ったのか？」「すでに死を覚悟した上で、夫が眠る撫順へ行って死にたいと思ったのか？」など、さまざまな憶測が飛んだ。私たちの心を凍らせたのはその後である。「遺体を納めた柩は墓苑の遺体安置所に置かれたまま、2日後に荼毘に付されるそうだ」これを聞いて私たちは遺体が安置されている、墓苑の遺体安置書へ行った。そこは古い墓苑の一角にある葬儀社の一隅で、冷たいコンクリートに囲まれた安置所だった。国内に唯一の肉親である長男がいるはずだが、連絡が遅れていたのか、棺の中で彼女の、眼をつぶった大柄な顔だけが、そこにあった。

「生活保護の受給者が対象の弔い方がこれだそうだ」

と仲間が言う。台の上に載せられた棺の枕元に、1本の線香も蠟燭もない。それとわかれば用意してこれたのだが、すでに暗くなった墓地の一角のコンクリートの中で、私たちは黙って手を合わせるほかなかった。遺体はこの状態のまま翌々日の火葬まで安置された。

■ 寧波の香がゆらぐ

火葬の日は、たまたま私たち千葉県帰国者の会と支援者が合同で催す「春節を祝う会」の日だった。火葬場からその準備を担当するスタッフが消えた後、残った4人で彼女の骨を拾った。その1人が故人の長男だった。白木の箱に入った鈴木さんは、「春節を祝う会」の会場に運ばれた。かつて蒙古族の扮装でタンバリンを鳴らし、軽快なステップを踏んだ鈴木さんを偲び、楽しい春節の会が演出された。

偲ぶ会を催したのは、それから1ヶ月ほど後だっただろうか。中国の撫順で眠る亡夫のもとへ帰ろうとして帰れず、無念の思いを抱きながら、あの地下壕のような冷たいコンクリートの箱の中で48時間も閉じ込められていた彼女の霊を慰めるために、私たちは「偲ぶ会」を行なった。彼女が元気な頃の遺影が飾られ、その前に焼香台を置いた。あれほど中国へ帰りたかった彼女のために、その昔、道元が修行したという中国・寧波の禅寺で買い求めた香を炊いた。

中国と日本で生き、同じ肺がんで、志なかばで旅立った2人の帰国者…私たちに託したものは何だったか、それをいつも自分の胸に問いかけるのでなければ、私たちの「支援」も「交流」も空虚になってしまう。

その三

温家宝総理も出演（寸劇）

ー千葉の『春節を祝う会』レポートー

毎年恒例の「帰国者と春節（旧正月）を祝う会」（千葉・中国帰国者支援交流の会主催）が今年は2月7日、千葉市美浜区の高洲コミュニティセンターで開かれた。開会前1時間、今年初めての企画で、千葉健生病院健康友の会の協力による「健康チェック・コーナー」が開設された。血圧、体脂肪検査… 続々つめかける帰国者たち。

「今年は何人集まるだろうか」、「帰国者は50人くらいは来て欲しい」、「もっと厳しく見たほうがいい。20人そこそこじゃないか」事前の読みが定まらず、最も悩みぬいたのは、弁当と飲み物を準備する担当チームだった。蓋を開けてみると大方の予想をすべて覆し、帰国者60名、支援者48名。弁当が足りなそうだと飛び出してゆく担当スタッフ。最後の補充買物から帰ると会場隅にへたり込んだほど。

「いつも歌と踊りではマンネリすぎる、新しい発想を！」と、昨年は有志による珍妙な京劇『霸王別姫』、今年と同じグループによる寸劇『よく帰ってきたね』（你们回家了！）。さきごろ帰国者の代表たちが訪中、温家宝総理を訪ねた場面の中国語劇だ。帰国者たちもテレビで見ているから、中国語のセリフもすんなり耳に入る。温総理や帰国者を演ずる支援者の熱演に爆笑が広がった。市原市から特別出演してくれた2人の高齢ゲストの手品と南京玉すだれにも大きな拍手が沸いた。新しい趣向の最後は福引。入場時に渡された番号

札で最後に発表された番号の寄贈品に帰国者の熱い視線がそそがれた。番号の発表役を、ゲストで参加してくれた当「方正友好交流の会」大類事務局長が演じてくれた。

その四

広がる波紋と「つらすぎる」と

—東京練馬で『嗚呼 満蒙開拓団』上映会—

■ 予期せぬ客

「中国帰国者家族とともに歩む練馬の会」の佐藤千代子さんから『嗚呼 満蒙開拓団』を上映するから話をするように、という連絡を受けたのは今年の夏だ。彼女とは中国における日本軍の性暴力を追及した班忠義さんの映画と著書『シーサンシーとその姉妹たち』などを通じて知り合った旧知の仲。この練馬の会が中国帰国者とともに、さまざまな活動に取り組んできた実績は、私が住む千葉でもよく知られている。この時も映画の上映のために、早くから必要な準備を、早くから周到に進めていることにあらためて驚いた。

さて当日（1月29日）、会場の（練馬区立）大泉学園ゆめりあホールへ行くと、受付、チラシを手渡す人、階段状ホールに案内する人、照明・音響の部屋につく人など、動いているスタッフが豊富で、しかも彼らの世代もキャリアも多様であることに驚いた。この日に先立って佐藤さんから、会いたいという人がいるから映画会が始まる30分ほど前に来るように、という連絡を受けていた。会場で紹介されたのは都立小山台高校の2人の先生だった。あの戦争末期、東京の商店街からも満蒙開拓団として満州に渡り、敗戦時、ソ連軍の攻撃に遭って集団自決に追い込まれた、その地元の高校の先生だった。定時制に通う生徒たちに、70年近くも前に地元の先輩たちが戦争とどう関わったのかを、さまざまな資料や証言で、ともに学ぼうというのである。『嗚呼 満蒙開拓団』はその開拓団（第13次興安東京荏原郷開拓団）が遭遇した悲劇の場所とは異なる地域の話だが、先生たちが準備している過程でこの映画会のことを知り、会場に来てくれたのだった。

それを知って私はすぐお2人に、ぜひ会っていただいたほうがいい方がいることを伝えた。この映画にも登場し、たまたま私が住む千葉市に住み、同じ地元の帰国者の支援活動にも関わっておられる、その開拓団の生存者・飯白栄助さんである。この話はその後間もなく実現し、生徒の前で生々しい証言をしてもらうことになった。

■ 帰国者の目には…

さて当日のゆめりあホールだが、私の役割は、映画が放映される前の30分ほどの時間に、司会の久慈美奈子さんの質問に答える、というスタイルのものだった。

- ① どういう経緯でこの映画に関わることになったのか。
- ② そもそもなぜ方正に関心を持つようになったのか。
- ③ いま、住んでいる千葉では、どういう活動をしているのか。

④ 戦争中は、どこで戦争とどう関わったのか。

などの話を中心になった。ほとんどは「方正友好交流の会」の会報9号で書いた『歴史証言の鮮度と賞味期限―「嗚呼 満蒙開拓団」―』の内容である。

この日、上映会は2回、行なわれ、1回目の入場人員が157名、2回目が61名（座席数176）。すでに予約をし、チケットを購入しておいたが、当日、都合ができて参加できなかった人たちのために、その後2月27日に再度、上映会を開催したほか、同じホールの別室で開いている日本語教室で25名の受講者に観てもらったそうである。日本語の理解が十分ではないこの時の参加者（帰国者）には、字幕のない日本語が難しかったようだ。また「見ている辛い」という感想や、「あんなもんじゃ語れない」という声もあったそうだし、最初から映画を見ようとしめない人もいたそうだ。ともに聞いて、あらためて襟を正すほかなかった。

その五

高校生と学ぶ満蒙開拓団

―ビデオを見、地元の体験者と語る―

3月17日夜、東京都立小山台高校（定時制過程）で満蒙開拓団の映像を見、関係者の話を聞こう、という授業があった。テーマは「東京の満蒙開拓団を知ろう―武蔵小山商店街と戦争」、前半は視聴覚教室が会場。生徒による司会進行で、まずNHKビデオ（昨年8月9日放送）「証言記録 市民たちの戦争 強いられた転業 東京開拓団―東京・武蔵小山―」（ナビゲーター：中居正広）を観賞。

■ 姉と生き残る

このあと全員、近くの小山台会館へ移動。まず「東京の満蒙開拓団を知る会」によるスライド上映と解説が行われ、続いて開拓団関係者による講演が行われた。講演はこの町の商店街で父親が乾物屋を営んでいた飯白栄助さんほか、戦争末期の昭和19年、商店街の決定に従って家族全員、旧満州興安南省（現在の吉林省）洮安県に入植した模様を話し始めた。敗戦によるソ連軍の侵攻で追い詰められ逃走中の開拓団が集団自決に追い込まれる。一部、死を免れた人たちの中に、飯白さんと姉さんもいた。それからの苦難の中で日本語さえ忘れてしまうほどの生き方。八路軍に入って朝鮮戦争にまで従った特異な体験は、郷土の後輩たちにどんな感興をもたらしたか、が大変興味深かった。

私にとって最も知りたかったのは、この若い高校生たちが、この65年前の先輩たちが生きて歴史の証言をどう受けとったのだろうか、ということだった。自分たちの現在の生活とは直接結びつかない「昭和史」としては、ほかの日本の高校生もまた、平均としてはそれほど関心を抱かないかもしれないが、地元の先輩たちがなめた「生と死」を、そして日本が犯した戦争を、どう受け取ったのだろうか、ということだった。

後日、この企画を担当された武藤正人先生から、生徒の感想をまとめたプリントを送っていただいた。ある生徒はこう書いている。

「満州開拓で満州に人が行ったのは授業でやったから知ってたけど、自分が通ってる高校の目の前にある武蔵小山商店街から沢山の人が満州に行ってることを知って驚いた。満州から逃げる時の話を聞いて、私は想像することもできませんでした。集団自決で親が自分の子を殺して、妻を、自分を。つかまれば男は違う場所に連れて行かれ殺される。私には考えられないし、ちゃんと逃げられた人たちは、そんな所から逃げのびた人達はすごいなと思った」

■ 「居眠り」と書く

いっぽう、「内容が難しくて、よくわからなかった」という感想もあり、これもまた率直な表現だと受け止めたし、「眠ってしまった」という答えにも、私は少しも失望などしなかった。会場にはその2時間前まで、工事現場で肉体労働をしていた様子に見える服装の生徒がいたし。昼の仕事の疲労で眠ってしまったとしても、それをそのまま事実としてアンケートに書くことをためらわないムードを、武藤先生や角田仁先生たちが日頃作っておられることを感じた。日中韓3国の若者たちが為政者の思惑で歴史から目を背ける授業を受けるとしたら、これほど周恩来総理の至言「前事を忘れず 後事の鏡と為す」に背くものはないからである。

(おくむら・まさお：方正友好交流の会 参与)

2009年夏中国・旧満州の旅

名井 佳子

2009年の夏、たまたま4大学5人の先生方の企画「中国・旧満州調査の旅」に誘われました。日程表を見ると初日に731部隊遺跡となっていたので、ハルピンまで行くのなら是非方正地区日本人公墓へも行って欲しいと頼みました。4泊5日という短期の旅の中に、ハルピンから相当距離のある方正までの無理な願いでしたが幸い快く受け入れて頂きました。

爽やかな風が

当日朝7時30分ハルピンを出発、きれいに整備された高速道路で方正へ向いました。道路の両側はトウモロコシ畑が延々続きます。3時間余りで目的地の中日友好園林に到着すると、方正県人民政府外事僑務弁公室副主任の李さんら3人が待っていてくれて入口を開けてくれました。(その都度、お役所に届けなければ自由に墓参は出来ないようです。)

まず案内されたのはこれまで何度も写真で見たことのある方正地区日本人公墓でした。夏なのに背の高い赤松に囲まれ爽やかな風が吹き抜ける墓地でした。隣に並んでいる麻山地区日本人公墓とともに花束をお供えし、墓前に立ちました。手を合わせると心中にいろいろな想いがめぐりました。(今立っているこの場所に、敗戦直後奥地から自力で逃げても逃げても逃げ切れず命を落とした5000人もの人々が、また隣の麻山地区日本人公墓には鶏西市麻山地区から運ばれてきた集団自決を余儀なくされた500余名の遺骨がねむっているのだ。どの方々もどれほど祖国へ帰りたいかしたことでしょう。どうか気持ちを静め安らかにお眠りくださいますように。)

墓前を次の人に譲って墓地の端に立ち、並んでいる二つの公墓を見つめているとまた想いがめぐって来た。(本当によくぞ当時の残虐な敵国であった日本人の遺骨をまとめて公墓を作って下さった事だ。地元の人々には反対意見の人も少なくなかったと思うが、この申請が最高指導者のもとまで無事に届いた事も不思議であり、周恩来総理の冷静で両国或いは人としてのあり方を示された寛大な決断にも大きく感じ入り頭が下がる。21世紀を迎えた今の世界でもまだまだ戦争の続いている国がある。どこの国に周恩来総理ほどの相手国への勇気ある決断で自国の人々を納得させる指導者がいるだろうか。戦後どれだけの時が流れてもこの方正県の日本人公墓を訪れることが出来た日本人は全て、心からの驚きと感謝の気持ちで一杯になるはずだ。)

次に少し歩いて中国養父母公墓に案内された。こちらは日本人公墓に比べ背の高い木が少ないせいかわかった。同じく花束を供えて心から養父母への感謝の気持ちでお参りさせていただいた。(この公墓は残留孤児でも早めに帰国し、日本で仕事に成功

した人が中国の養父母への感謝の気持ちで作ったのだとか。感謝の気持ちを実行に移され良い事をして下さった。中国での育ちの環境はそれぞれだが、放り出された敵国の子ども達を引き取り育ててくれた養父母の尊い心根に深く感謝。）

その次に東北地方の農業に偉大な貢献を果たした藤原長作さんの記念碑の所へ移動。（この話は日本でもよく知られていると思う。水稻栽培の優れた技術を中国東北地方の人々に伝え大きく貢献された事は日本人としてとても嬉しい。）

ところで、こうして公墓や記念碑を巡っている間、傍に居ながら何故かニコリともしないお役人とは対照的に優しそうな顔をした人が居たので、よく見ると管理員の張林さんと分った。思わず声を掛け、行き届いた管理をしてきている事に感謝の言葉と、もしお会いできたらと用意してきたお土産をそっと手渡した。

このあときれいな花畑にはさまれた記念陳列館に入る。壁には色々な事柄の説明が中国語と日本語で貼られていたが、思ったより展示物は少なかった。しかし、この陳列館は近いうちに改装されるとのこと、今後はどの様になるのだろうか。

この陳列館を出ると大体一巡できたので、我らの代表者が李さんにお礼としてお土産を手渡すと初めてお役人から笑顔が見えた。それから又ほかの記念碑や桜の木など次々植えられている樹木を見て回り、十分に時を過ごした後、中日友好園林の門を出る。

今回の旅は、時間の余裕があまり無いので方正の町でゆっくり過ごす事は出来ず、そのまま次の目的地731部隊遺跡へと出発した。

人間の崇高と狂気

ハルピンに行く機会があれば近郊の平房にある731部隊遺跡には必ず行くといい。

中国侵略日本軍第731部隊罪証陳列館に入ると、戦争がどれほど人の考えを狂わせるか。当時軍部大本營の命令とはいえ、本当に同じ日本人のやった事なのか俄かには信じられない事実がしっかり展示されている。細菌学に優れた能力があった医師。戦争でなければ日本医学の進歩に大きく力を発揮出来ただろうに、現実には軍部への貢献のため細菌兵器の開発と細菌戦を進めた。多くの生きている同じ人間に、恐ろしい生体実験を繰り返すなど、平和な時代の人間では考えられない行動を敗戦までやり続けた。（この部隊の人々はもうすっかり狂った人間になってしまっている。）

この一日で人間の両極端な行為事実を目にし、夜は疲れていたのに心が落ち着かずなかなか眠りにつけなかった。次の日から偽満皇宮博物院、偽満州国務院、平頂山惨案遺址記念館、撫順戦犯管理所、九・一八歴史博物館、張氏帥府博物館など広い東北地区を駆け足で巡った。この旅は短期ではあったが非常に重く辛い時間だった。しかし、今回得た知識は学生時代ざっと終えた近代史の時間や、本を読んで分ったつもりでいた日中戦争の知識とは雲泥の差。戦争の恐ろしさが実感できた。

旧満州の各遺跡や記念館めぐりは決して楽しい観光旅行とはいえないが、負の現実確認が出来る貴重な旅先。日本人として一度は出掛けた方がいいと思う。

*

「健康増進教室」について

千葉県は地理的環境に恵まれているせいか、当時満蒙開拓団として中国・東北地方に渡った人は少なかったようだ。敗戦後、時が流れようやく日本での残留孤児肉親探しが始まると、時を追うごとに千葉にやってくる帰国者の数が増加してきた。彼らはやっとの思いで帰国したのに、言葉や生活習慣の壁が厚く、なかなか祖国の生活に馴染めないでいる。そんな人々が身近に増えてきた 1990 年に、「中国帰国家族を支援する会」の活動が始まった。活動を続けて今年はまだ 20 年目になる。支える仲間は各分野で今も努力を続けている。2005 年夏から始めた「健康増進教室」もその 1 つ。残留孤児の人々は振り返れば、それぞれに厳しかった体験を思い出すだろうがそれはそれとして、現に生きている今の貴重な時間をどう過ごしていくかが大きな問題。高齢化が進む今では何より心身ともに健康である日が一日も長く続くことが大切と活動を始めた。

毎週土曜日朝から昼までの 3 時間。病院で使う日語学習、楽しく知識を広める日語学習、健康維持のための太極拳、近所の盆踊りに参加できるよう盆踊り、自分達の好きな中国の歌、季節ごとの日本の唱歌や童謡の練習。また、バスで県内の様々な施設見学や各シーズンに合わせた行事を実施している。スタートの頃に比べ倍以上に参加者が増えそれぞれの表情が明るくなった事が何よりやりがいを感じ嬉しい事だ。

(ない・よしこ：90 年、千葉に帰国した残留孤児の 2 世たち(小、中学生)への補習とストレス解消を支援する「土曜学級」を開設。05 年、高齢化の進んだ帰国者のために開設された「健康増進教室」活動に参加。「中国帰国家族を支援する会」理事)

「前の経験を忘れず、後の教訓とする」

—日本映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て—

北京 趙 喜晨

最初に日本大使館がこのたび「嗚呼 満蒙開拓団」の観賞会に招いていただいたことにお礼を申し上げます。同時に羽田澄子さんほかこの映画を作られた関係者のご努力によって、このような血と涙の歴史的シーンを見せていただいたことに対して感謝しなければなりません。「嗚呼 満蒙開拓団」は、20世紀の1930、40年代にさかのぼって日本の開拓団の人達が中国東北地方でなめた悲惨な経歴を、間際で追求し記録したものであり、見た後、悲痛な思いをさせられます。

「前の経験を忘れることなく、今後の戒めとする」後に続く世代に歴史を理解させることは私たちの責任です。この映画は大変貴重な歴史の教科書だと思います。私たちは何千万という中国と日本の人民の命と鮮血であがなった歴史の教訓を心に刻まなければなりません。中日両国は2度と戦争してはならず、お互いに友好平和が必須です。

■ 2度と口にするな！

映画の画面に導かれて、私の記憶はタイムトンネルを潜り抜け、もう一度60数年前に戻りました。私は1935年、中国黒竜江省湯原県に生まれました。子供の頃の記憶と「満州国」、「日本」はぴったり結びついている、と言ってもいいと思います。幼い頃、私の気持ちの中には「中国」という概念はなく、自分が中国人であるとさえ知らず、ただ自分は満州人であるということだけは知っていました。あるとき、どこから手に入れたのかわかりませんが「中国」という字の入った地図を見て父に聞いたことがあります。

「中国というのはどうしてこんなに大きいのか？ 中国人ってどんな感じ？」父は言いました。「お前は中国人だ。中国は大きく、“満州国”は、もともと中国の一部なのだ」父は続けて、厳しい表情で言いました。「これからは2度とそんなことを口にするのじゃないぞ。もしも日本人に聞こえたら面倒なことになるからな」この時私はなんだかよくわからず、父の話がよく飲み込めませんでした。

私の故郷・湯原県は松花江沿いの、米も魚もとれる美しいところで、そこでとれる米は有名でした。しかし私の子供の頃の記憶では「満州人」は米のご飯を食べることを禁じられていて家の中に米をとっておくこともできませんでした。食用でも保存用でも、見つけられたら『経済犯』として重刑に処せられます。当時お米は『軍需品』とされ、日本人だけが食べていました。父たちは毎日、田んぼで辛い労働をしながら収穫した米は計算どおり日本人に渡しました。当時はそれを「出荷米」と言っていました。それで

も我が家で1, 2度は米のご飯を食べた記憶があります。その時、家族の茶碗にはホカホカの白米が盛られていた一方、テーブルの下にはそれぞれ橙色のとうもろこし飯を盛った茶碗を準備しておかなければなりませんでした。大人たちは私たちに早く食べるよう促しながら、万一日本人が入ってきたときは、急いで米のご飯を隠し、とうもろこし飯を取り出すよう言いつけました。家族みんなで自分たちが作った米をびくびくしながら食べました。あのせっぱ詰まった気持ちと場面を、昨日のこのように、はっきり覚えていています。

■ かぼちゃ売りの老婆

私の記憶の中では『日本開拓団』はかぼちゃと結びついています。その頃、私たちの家の近くの大通りで開拓団の日本人が野菜や果物を売っていました。あるとき母親が私を連れて日本の屋台で野菜を買ったことがありました。ひとりの優しいおばあさんが私たちのためにかぼちゃをひとつ選んでくれました。このかぼちゃはあまり大きくはなく、丸くて赤黄色で、外形から見ると土地のかぼちゃとは違いました。日本の老婆は、このかぼちゃの種は開拓団が日本から持ってきたもので、とてもうまいから買って帰って味を見てくれと熱心に勧めました。母はそのかぼちゃを買って帰りました。たしかに味は甘くて柔らかい。これが私が初めて食べた日本のかぼちゃでした。その後、私にせがまれて母は、何回か日本の老婆のところへかぼちゃを買いに行きました。現在も北京の市場でこの種の小さくて丸い日本のかぼちゃを見かけます。それを見るたび私は、あのかぼちゃ売りの日本の老婆のことを思い出します。60何年前、あのこぼれるような笑顔の日本の老婆と何千万の日本の農民が故郷を離れて、寒い東北の松花江流域で田畑を耕しましたが、彼らを恐ろしい悪夢が待っていようなどと、誰が知っていたでしょう？

■ 大通りで誰かが…

1945年8月、日本軍国主義が敗戦降伏した時、私は10歳でした。ある日、私は突然、大通りで誰かが「日本人が降参したぞ！ 日本人がみんな逃げ出したぞ」と叫ぶのを聞いたことを覚えています。私は急いでみんなについて一番近くの開拓団の村へ行きました。そこでは荒されて何も残されていず、日本人は一人もいませんでした。あとで聞いたところによると、開拓団の難民は敗戦の知らせを聞くとハルピンの方角へ逃げ始め、そこから帰国しようとしたが、逃げる途中、方正県で餓死したり凍死したりしたと言います。その時私と母は、あのかぼちゃ売りの老婆のことを考えました。彼女は平凡な日本の農民なのに、何の罪があつてあの戦争の犠牲者にならなければならなかったのか。彼女は日夜思い続けた日本の郷里へ帰れたのだろうか。それとも白骨を満州の原野に撒き散らすことになったのだろうか。母が言いました。「彼女は日本の農民だよ、運が悪かったんだ！」日本の侵略者は中国の人民に甚大な災難と痛みを与え、最後には自分も最後の日を迎えました。そして30余万人の日本の農民は日本の侵略政策の犠牲になり、満蒙開拓団も永遠にその歴史を閉じたのです。

■ 公墓の担当者になる

1959年、私は大学卒業後、最初は北京で仕事をし、その後、黒竜江省政府外事弁公室領事僑務処日本処に転勤になりました。60年代の初め、方正県の日本人生存者が犠牲者の遺骨を発見、方正県政府はすぐこれを黒竜江省政府に報告。省政府外事弁公室の上層部は私を派遣してこの処理に当たらせました。天が定めた運ということかもしれません。この任務を与えられた時、私の頭の中にはまた、あのかぼちゃ売りの老婆の声と笑顔が浮かびました。私たちは検討し、処理方法を中央政府に提出しました。そして1ヶ月もしないうちに、中央政府のOKを得たのでした。私はこの目で陳毅副総理が私たちの申請を許可したのを見たとき、非常に感動しました。中国政府は開拓団の多くが日本の貧しい農民であり、日本の移民侵略戦争の道具にされたものだ。死者は日本の平民、百姓であり、人道主義で対応すべきだと考えたのです。同時に中日両国関係の長い将来と死者の家族の気持ちを考慮し中国政府は永久的な墓碑を建てることに決めたのです。

中央政府のOKは出たものの日本人公墓の建設には、さまざまな困難がともないました。まず中国人民の理解が得られるかどうかです。当時、中日両国はまだ外交関係を回復していませんでした。一部中国人の反日感情はまだ消えてはいませんでした。国際的には中国に対する経済封鎖が続き、建設の支援はストップ、専門技術者の引き上げという状況がありました。また中国は毎年、厳しい自然災害に見舞われ、国民経済と人民の生活は極度に困難な状況にありました。このような状況の中で、かつて戦争の敵国だった国の人の墓碑を建てるというのは、中国人民が受け入れるだろうか。次に日本人公墓の碑文はどう書いたらいいか。当時の中国の政治ムードに背かず、また日本人と中国人、そしてまたその子孫に受け入れられるにはどのようにしたらいいか。三つ目は運搬の難しさだった。石碑はすでに碑銘もできていたが、なかなか現場に運べない。理由は当時、松花江という水路が一本あるだけだが、ちょうど渇水期で、墓碑を載せる大型船が運航できない。何ヶ月も私たちは毎日、雨が降って松花江が増水する時を待ちました。

墓碑の建設を早め、質を保証するために幹部は私に石碑を選ぶことから、碑文の書、彫刻、輸送などの仕事をすべて私に関わるようにさせました。この日本人公墓をを建設する意義は、ただ日本の罪もない平民の記念碑であると同時に、また中日両国の平和に対する永久の願いであり、後世の人達が永遠に戦争をしてはならないことをあらわしていると思うのです。

■ 紅衛兵から公墓を守る

「方正地区日本人公墓」ができて2年あまり後、中国では「文化大革命」が始まりました。当然のことながら、公墓も江衛兵の襲撃を受けました。黒龍江省政府はこの公墓を守ることを決め、私に黒龍江省政府の指示を方正県政府に伝えさせました。指示の内容はおおよそ次のようなものです。「この公墓は中央政府が承認して建てたものである。埋葬されているのは日本の平民である。誰であれ、何派であれ、これを破壊してはならな

い」これと同時に、公安部門が実際に監督し、省政府は私を方正に派遣して実際の状況を視察させました。そしてさらにあらためてお金を支出し、お墓の周りを柵で囲みました。これを見て紅衛兵たちはさらに手を出すわけには行かないことを知り、引き揚げざるを得ませんでした。黒竜江省政府と方正県政府がとった措置がタイムリーだったことと、現地方正の大多数の中国人の理解があったことによって、日本人公墓は「文化大革命」という凶暴な嵐の中でも無傷で保存されました。これはあの時代では稀有のことでした。

■ 歴史の過去から未来へ

「方正地区日本人公墓」はひとつの歴史記念碑であると同時に、また永久的な警告の碑でもあります。その後、この近くには次々と「麻山地区日本人公墓」、「中国養父母公墓」そして日本の水稲専門家「藤原長作先生の墓」そして「中日友好園林」もできて、中日両国人民が幾世代の後世までも友好を続けることを祈念しています。47年間、このお墓は国内外の広汎な人々の注目するところとなりました。千を数える日本の友人が訪ねてきて参拝し、同胞を偲び、中国に対する感謝の気持ちを表してきました。私はここを訪ねる中国人、日本人がこの墓碑に向かったとき、誰もが胸が熱くなり、黙禱をささげ、絶対もう2度と戦争の歴史を繰り返さないと誓うと信じています。

嬉しいことに、大類善啓、奥村正雄、金丸千尋といった日本の有識者の長期にわたる、たゆまぬ努力によって、いま、「残留孤児問題」と「方正地区日本人公墓」はついに日本政府の配慮にまでこぎつけました。日本の駐中国外交官が次から次と公墓を参拝し中国に対する謝意を述べています。また日本政府は墓地の管理費用の一部を負担することを決めました。こうした日本の行動は中日両国の長い将来にわたる友好の促進に必ずや積極的な作用を及ぼすものと私は信じますし、嬉しさを禁じえません。

(奥村正雄訳)

(ちょう・きしん：プロフィールは、巻頭の趙さんの原稿、「あの歴史に立ち会う」のところに詳しく紹介してあります。ご参照ください)

北京での「嗚呼 満蒙開拓団」鑑賞会を終えて

佐渡 京子

2010年1月23日、「嗚呼 満蒙開拓団」鑑賞会実行委員会主催、自由工房と北京日本人会協力のもと、北京の国際交流基金の多目的ホールで、映画「嗚呼 満蒙開拓団」の鑑賞会が行われた。中国での初の上映会である。

この映画が開催されるきっかけになったのは、2009年9月、大類善啓さんが、北京の日本大使館を表敬訪問されたことである。その際に、大使館の梅田邦夫首席公使にこの映画について話され、それに興味を持った梅田公使に、自由工房から映画のDVDが贈られ、映画に感銘した公使の発案で、その後大使館内での上映会につながった。

館内での反響と、この映画に描かれているテーマに問題意識を持った日本大使館広報文化センターの専門調査員西本志乃さんが積極的に動いてくださり、また日本人会文化委員会の鈴木稔さんの協力によって今回の鑑賞会が実現した。

歴史の証人、趙喜晨さんを招く

鑑賞会の実現に当たっては、いくつかクリアしなければならない問題があった。

まずは、外国映画の上映が制限されている中国国内でどのように上映するかということで、これは国際協力基金の会場なら制限を受けないということで解決した。しかし、ここで問題となるのが、「上映会は必ず有料で」という自由工房の原則である。私は9年前に自由工房で羽田澄子さんの助手をしていたが、「日本では、社会的な作品（記録映画）はプロパガンダ的な意味があると捉えられ、観るのは無料でいいという意識があるが、鑑賞者が参加意識を持つという意味でも、少しでもお金を払ってもらわなければならない」という自由工房の方針をなるほどと思って聞いていた。

私が自由工房に在籍していた際、この原則が破られるのはほとんどなかったもので、無理を承知で、プロデューサーの工藤充さんに打診したところ、「中国での上映が難しいという事情はよくわかっている。中国に直接関わっている日本人が、この映画にどんな反応をみせるのか知りたい。最終的には自主上映会開催につながって、もっと多くの人に観てもらえるようになるのであればいい」と、快諾を頂いた。

そして西本さんのアイデアで、せっかく北京ですのだから、と北京在住の方正関係者をお呼びして、上映後に交流会をすることも決まった。

北京在住の方正関係者について大類さん、奥村正雄さんに相談したところ、趙喜晨さんをご紹介いただいた。

趙さんは1935年生まれ、黒龍江大学でロシア語を学び、卒業後、ラジオ局勤務を経て黒龍江省人民政府外事弁公室に入り涉外案件を担当、1964年、方正に日本人公墓を建立する話が持ち上がった際、外事弁公室の担当者として、中央政府との連絡、石碑の選定、墓碑銘の揮毫依頼、墓碑の運搬、墓地の決定など、あらゆる場面で陣頭指揮にあたった人である。

来場者は予想以上に多かった

こうして鑑賞会の形が整い、広報は、北京の情報誌と、北京日本人会のメーリングリストですることになった。このテーマに対する北京在住の邦人の反応がわからないのと、国際交流基金の会場の定員は50人なので、あまり広くPRしすぎても、会場では収容できないとの懸念もあった。

蓋を開けてみなければわからないという心境のまま迎えた当日、満席を憂慮した人々が開場の30分前から集まり、最終的には定員50人を超える60人以上が集まった。

映画は中国語字幕なし、進行、来賓挨拶も日本語のみという条件にも関わらず、1/3は中国人だったように思う。

北京日本人会横田恵三郎会長と、中日関係学会の名誉会長丁民さんにご挨拶頂き、映画は上映された。

その後、趙喜晨さんとの交流会があり、西本さんの司会のもと、皆で趙さんのお話を伺い、簡単な質疑応答があった。(趙喜晨さんのお話された内容については、本号の趙さんの寄稿をご参考下さい)



質問に答える趙喜晨さん

中国網の中国人記者、残留孤児を研究した中国人研究者から質問があった。

鑑賞会終了後、映画についての問い合わせがいくつかあったこと、展示していたパンフレットや方正友好交流会の会報が盗まれたこと(!)、

会場に設置していた募金箱に合計で1225元(日本円で2万円弱)の募金があったこと、また様々なメディアから取材の申し込みがあったこと、実際にいくつかのメディアでも取り上げられたことなどからも反響の大きさはうかがえ、まずは鑑賞会は成功したと言える。

そして中国にいる日本人、最終的には中国人に、この映画を観ていただくにはどのようにすればよいのかという課題が残った。

以上、簡単な鑑賞会の報告である。そして以下、私の感想を述べたいと思う。

私は2007年8月のハルビンロケに中国語通訳として参加した。ハルビン市内の風景撮影や方正でのインタビュー撮影に立ち会った。

2008年に映画が完成したとき、たまたま日本に帰国していたこともあって、できたての「嗚呼 満蒙開拓団」をDVDで見せていただいた。見終わったときの率直な感想は、何か大きな宿題をもらったような気持ちだった。とにかく重いものが心に残った。

ロケに参加して方正の公墓の存在を知ってから、私は中国にいる、中国語が出来る、何かできることがあるはずだ、しなければいけないのではないかと、という気持ちが常にあった。しかし何を、どこからすればよいのだろう、と戸惑うまま3年が過ぎ、結局何も出来なかった私が、今回の鑑賞会でどこまで出来るのか不安だった。

私の原動力はひとつだけ。羽田さんが上映会の挨拶でいつも言っていた——「映画はつくっても、人に観てもらわなければ意味がありません」——スポンサーに依らない自主製作で30年以上作品を作り、社会にメッセージを発信し続ける羽田さんの言葉だった。

数多くの作品を撮ってこられた羽田さんだが、ご自身も旧満州から引き揚げてきただけあって、この映画には特別な思い入れがあるという。羽田さんとの仕事を通して中国に興味を持ち、大陸に渡った私にとっても、思いがけなく一緒に仕事ができるチャンスとなったこの映画には特別な思い入れがある。難しいことは考えずに鑑賞会を成功させよう、これが私の正直な気持ちだった。

鑑賞会当日、私は観客がどんな反応をするのか、とても興味があった。

北京の知人にも声をかけたが、このように重いテーマを抱えた映画をぜひ観てくださ

い！ と言うには少し抵抗があった。

いつもなら自分の関わった映画は、後ろの席に座り、観客の反応を観察するが、会の進行上、前席での鑑賞となった。だから残念なことに皆がどのような反応をするのかよくわからなかった。しかし自宅で、ひとりで小さな画面を見つめるのと、大画面で大勢と観るのは受け取り方が全然違ふと改めて思った。

映画は刺激的な残留孤児補償の訴訟から始まり、広大なハルビンの大地の映像へと移る。羽田映画の定番であるサティの音楽がまるで詠えたように映像ととけあっている。

満蒙開拓団の歴史を解説しながら、当時の開拓団に参加した人々、日本人公墓の設立のきっかけとなった松田ちよさんなどの証言が綴られていく。

後半部分は、かつて残留孤児で、現在は日本に暮らす丸沢さんが方正を訪ねるところ、そして満州に渡る前まで家族で住んでいた長野県に里帰りしたところで映画は終わる。

おそらくこの映画は戦争や、満蒙開拓団や残留孤児のある一面を描いたものに過ぎず、歴史的や政治的な観点からみれば、欠けている部分もあるかもしれない。客観的に史実や状況を分析することも、歴史を検証することも、未来につなげるためには必要不可欠なことだと思う。

しかしその不足を補ってあまりある魅力がこの映画にはあると私は思う。

この映画の魅力は、やや冗長とも受け取られるかもしれないが、当時を生き抜いてきて来た人たちの証言が集められているところである。



趙さんを中心に、後列左端が佐渡さん

私は映画のなかのいろいろな人々の証言や、その人々の現在の生活を垣間見ながら、この画面にいっぱい映っている人々のこれまでの人生や、感情に知らず知らずのうちに想像をめぐらしていた。

顔をゆがめて当時の様子を話せば、当時の悲惨な様子が浮かび、涙すれば一緒に涙を流し、穏やかな笑顔を見せれば、そんな表情ができるまでにどのように生きてきたのだろうか、胸が熱くなる…大きな画面で向き合っていると、否応なしに彼らの言葉や、表情、息遣いが迫ってくる。頭に届くより先に、まず心にダイレクトに響いてくる…これが映像の力なのだと改めて思った。

一緒に映画を観ていた人々が何を感じ、何を思ったかはわからない。

しかし映像を通して心が動く、心が動けば何か行動をしたくなる、行動をすれば何かが変わる、そんな風に思う人が少しでも多くいれればと願っている。

そして私が今できること、それは少しでも多くの人にこの映画を観てもらうために動くことだと思っている。

くさわり・きょうこ：1977年生まれ。1999年～2001年まで(株)自由工房で羽田澄子監督の助監督として勤務。2001年中国留学。2003年～2005年河北省燕山大学に勤務。2006年～現在、在中国日本国大使館に委嘱員として勤務

中国での波紋―「嗚呼 満蒙開拓団」―

日本国内だけではなく、その反響が中国でも
広がり始めていることを示す1通の手紙

尊敬する羽田澄子さま

「爆竹鳴って古い年が去り、正月の飾りで新春を迎える」中国の伝統的な祝日の春節を迎えるにあたり、あなたとご家族が、寅年に楽しく健康で望むようにおめでたいことがありますよう、お祈りいたします。

私たちの会に対して気にかけていただき、支えていただきましたことに感謝し、新しい年もまた私たちの仕事に対して、どうぞ変わらぬご指導とご助力をお願い申し上げます。

昨年、私は日本の友人たちからいただいた資料で、あなたが撮られた「嗚呼 満蒙開拓団」が、日本で公開されるやすごい反響を巻き起こし、各界から好評を得たことを知りました。このことについて私は日本残留孤児養父母懇親会を代表し、熱烈なお祝いを申し上げます。同時に、この中で私たちの会の名前を出していただき、私たちの会の知名度を高めていただいたことに対し、ここで衷心より感謝申し上げます。

あなたの作品を通して、人々に過去の歴史に対する理解を深めさせ、わけても若い世代に対して大変重要な現実的な意義がありましたし、世界の平和を呼びかけ、中日の各世代の友好に、きわめて大きな推進作用をもたらすものであります。

ここまで書いてきて私は方正で2度、あなたとお会いした時の、忘れがたいシーンを思い起こします。あなたの仕事に対する厳しく、敬虔な精神と仕事に対する厳しい態度は私に深い印象を与えました。これはこれからの私たちの仕事に対する態度のモデルであると考えています。

私は「嗚呼 満蒙開拓団」が日本と中国で共に重要な歴史的、現実的意義を持つものであることはもちろんですが、さらに私は中国の関係する学者がこの映画を研究し、この作品をさらに多くの中国人に知らせてもらいたいと思うのです。そのために私たち養父母懇親会でも、この作品のDVDもしくはビデオを1本いただきたいのです。もしもあなたの同意をいただけるなら、私たちは慎重にこの作品を学習、研究し、著作権問題については十分考慮し、絶対に商業用途には使いません。

今年の1月と2月初め、日本の朝日新聞と中国黒龍江テレビが方正県とハルピンの日本の残留孤児の養父母取材しました。この時養父母たちの、心からの話を聞いて、私はあらためて感動しました。私は取材者に深々と頭を下げ、かれらが計り知れないほど徳のあることをやってくれたことに感謝しました。かれらが、間もなく「歴史」となってしまう歴史を掘り出してくれたからです。

ご参考までに養父母懇親会の関係資料を同封します。ご叱正ください。

ハルピンでの再会を期待しております。

早々

中国ハルピン市日本残留孤児養父母懇親会
秘書長 石 金 楷 (奥村正雄訳)

日本に帰還しなかった兵士たち

—映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て自作映画を考える—

松林 要樹

日本に帰らず、タイ・ビルマ国境に残り続けた6名の元日本兵を追った「花と兵隊」という記録映画を、私は約3年かけて作った。異国での戦後をどう生きたのかということを描いた。2009年8月より全国公開され、現在いろいろな場所で自主上映会を開いていただいている。今回、映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見せていただいた。戦後60年以上の時間が流れ、私が制作した映画「花と兵隊」同様、証言者は高齢化し、次々と鬼籍に入っている、時間との勝負なのである。

取材前、私は現地で未帰還兵というのは、現地の人にどんなに忌み嫌われ、貧しい生活をしているのだろうか、そう思っていたのだが、的外れだった。今回、私が取材できた方に限った話だが、戦後、現地の人々に打ち解けて尊敬されていかなければ、生き残れなかったのだ。

私は坂井勇という方に特にお世話になった。彼を例に挙げたい。彼はタイ・ビルマ国境のメーソトという町で3万坪もの土地を持ち、暮らしていた。そこには、ビルマから迫害された60名の難民に土地を与えていた。彼らも坂井の暮らしを支えていた。彼を支えている地域の人たちの顔に、かつての日本兵を恨んでいるという感じは全くなかった。侵略者であった日本兵に対する感情が、なぜ変化したのかと疑問を持った。

坂井勇は、大正6年ブラジル・サンパウロ郊外にて生まれた。彼の両親は、福井で事業に失敗し、ひと旗挙げようと移民した。ブラジルでは、彼の両親は大変苦勞した。彼が22歳の時に、両親はブラジルで事業に失敗し、日本に帰国した。太平洋開戦前に帰国し、徴兵検査を受けた。彼はポルトガル語ができるが、日本語はほとんどできない。国籍が日本のままだったため、彼は兵隊にとられ、“ブラジル生まれの日本兵”になった。ブラジルの農園で自動車の運転をしていたので、自動車部隊に送り込まれた。当時、自動車の運転は特殊技能であったからだ。マレー・シンガポール作戦を経験し、悪名高いインパール作戦に送り込まれた。作戦中、補給がなかったので、武器もなく、食いものがなかった。彼はビルマで地獄を見た。終戦をビルマのタトンで迎え、収容所を抜け出した。

終戦まで、土地を踏み荒らしていた日本兵だ。彼らが容易にその村に受け入れられたわけではない。武器を持たず収容所から逃げ出した兵卒は、太平洋戦争後、アジア各地で盛り上がる民族独立運動や、復興事業の中に組み込まれていったのだ。坂井も独立運動に組み込まれた。無国籍の状態で異郷の土地に生きるためには、その土地に貢献しなければなら

らなかった。彼は、車の修理の技術や運転の技術など提供した。終戦時、坂井の場合は判り易く帰る場所は、ブラジルでもなく、日本でもない。居場所がどこにもなかった。坂井が帰らないと決意したのは、敗戦の大きなトラウマだった。しかし、残り続けたのは、現地で迎えた家族がいたからだったと私は思う。

映画のタイトル「花と兵隊」という花の部分は現地で迎えた家族のことを指す。武器を捨て、土地の人々のために尽くしたことによって、彼は居場所を得たのだ。戦後、彼はメーソットの土地に田畑を作り、精米所を作った。戦時中の日本の非礼を詫びるように、地域の農業発展ため、家族のため、彼は活躍して行ったのだ。そして、地域に人々に尊敬されるようになった。

逃亡兵であったため坂井は無国籍であったが、戦後13年たち、坂井は国籍を再取得し、再び、日本人になった。ブラジルで生まれたが、「私の心は日本人だ」と訴えていた。

坂井がなくなった後も、正月に餅を供え、餅とエビの入った雑煮を作り続けていた。取材中、坂井に感激したのは、日本では1年足らずしか過ごしていない彼が、日本の文化を守り続けている姿だった。

現在、日本では少なからず、中国のことをネット上で声高に罵ったうえで勇ましく「愛国心」を訴える人々がいる。彼らの意見は、なにか空虚でもの悲しい。祖国にあこがれ続けた坂井勇が持ち続けた”日本人であること”の意味をこれからも私は、考え続けたいと思っている。

(まつばやし・ようじゅ：映画監督。1979年福岡県生まれ。2004年、日本映画学校卒業。05年、アフガニスタン、インドネシア、アチェなどの映像取材に従事。09年、記録映画『花と兵隊』を監督。同作品は第1回田原総一郎ノンフィクション賞 奨励賞を受賞)

方正とランプーン、二つの慰霊塔に思うこと

～「嗚呼 満蒙開拓団」と「花と兵隊」～

森 一彦

映画「嗚呼 満蒙開拓団」の冒頭シーンは、中国残留孤児裁判の判決の日から始まる。この映画を手がけた羽田澄子監督は、この物語が“過去の証言”ではなく、現在進行形の問題であることを告げている。満蒙開拓団の人々は、かつて1945年8月のソ連軍の侵攻とともに、関東軍に棄てられた。そして、息絶えた人々も、中国人によって育てられ生き抜いた人々も、戦後は日本から見棄てられつづけた。そして、ようやく祖国への帰国を果たした人々も、言葉も通じない日本の社会から棄てられつづけたのだ。この物語は、二次被害、三次被害の記録であるとも言える。この人たちと、日本社会との間に横たわりつづけた断絶とは、一体何だったのだろうか？中国残留孤児の調査が開始された当初、報道される方々の顔写真に、私たち日本人は少なからず衝撃を受けた。そこには“戦後も終わった”筈であった戦争の傷跡が鮮明に残り、それまで見えなかったものが確かに存在していたのだ。見えなかった者たちが、歴史の裏側から登場したのだ。その姿は、戦争という歴史の責任を一身に背負いつづけて生きてきた人々のようにも見えた。だが、であるからこそと言うべきか、多くの日本人の反応は冷たかった。

映画に登場する方正地区日本人公墓は、残留婦人の松田ちゑさんが畑の開墾をしている時に沢山の日本人の遺骨を見つけ、地元政府にお墓の建立を願い出たことがきっかけで造られたという。文化大革命の時代には、日本人公墓造りに尽力したという理由により松田さんは3年半も投獄され、死刑にもなりかけた。1963年に建立されたこの日本人公墓は、地元政府によって現在まで維持されつづけている。

「嗚呼 満蒙開拓団」を見終わった後も心に残りつづけたのは、中国の養父のひとり魯万富さんの言葉だ。「かわいそうで家に連れて帰って育てたよ」「かわいそうで」「かわいそうで」——侵略者の子供であろうと、どこの国の子供であろうと、関係はない。ただ、かわいそうだったから、という言葉に胸を衝かれる。この撮影の二ヶ月後に、魯万富さんは亡くなられた。戦争は人と人との間に断絶を作る。しかし、この魯万富さんの生き様に、私たちは救われる。戦争が生み出した断絶が、断絶を乗り越える可能性を生み出していることを、方正公墓の存在は教えてくれている。

そして、タイ チェンマイの南約70km ランプーン県の一隅にも、日本人が知らなかった日本人死没者の為の慰霊塔がある。「嗚呼 満蒙開拓団」に引き続いて昨年公開された映画「花と兵隊」は、ビルマ戦線から祖国に戻らなかった未帰還兵の現在を描いたドキュメンタリーだ。片や100本近い作品を撮っている大ベテランの羽田澄子監督、こちらは半世紀以上年下の松林要樹監督のデビュー作。アプローチは異なるが、どちらも記録映画の存在意義を十二分に感じさせてくれる。

「花と兵隊」に登場する何名かの未帰還兵のなかでも、最も強烈な印象を与えるのが藤田松

吉さんだ。戦後、日本に一時帰国した藤田さんは、実兄から「目的は何だ？金か？」と言われ母親の墓前で一晩泣き明かす。その後、帰国の為に貯めておいた資金を使って、日本兵の白骨約800柱を一人で拾い集め、自宅近くに慰霊塔を建立する。この映画に登場する未帰還兵たちも、日本社会と断絶しつづけた人々だった。野晒しとなっていた日本兵の遺骨を収集したのは、日本社会から棄てられつづけた藤田松吉さんだった。白骨も藤田さんも、祖国から見棄てられた者同士である。

未帰還兵の坂井勇さんと中野弥一郎さんの会話は、日本語ではなくビルマ語で交わされる。二人はパオ族の姉妹と結婚したが、この姉妹の存在感が際立っている。子供や孫や助けた難民たちに囲まれて生きる二人の生活は、とても幸せそうだ。断絶された側の彼らと、断絶した側の日本社会。果たして人間らしく生き、幸福だったのは、どちらだったのか。日本は今、12年連続で年間3万人以上が自殺する社会である。映画のラストシーン、撮影の途中90歳で亡くなった坂井勇さんのいないひっそりとした自宅で、ハンモックに横たわる老妻マ・ミヤイは、坂井さんと共に過ごした時間をいとおしむかのように、お腹の上に抱いた「サクラ」という名のひ孫を優しくあやしていた。

日本社会から断絶された人々が、日本人の屍の為に建てた二つの慰霊塔。慰霊塔は生者が死者の為に建てるものではなく、死者が生者の為に建てさせるものではないだろうか。死者の声に、私たちが耳を傾けるようにと。その存在と業を慰められているのは、きっと私たちに違いない。

参考：『ぼくと「未帰還兵」との2年8ヶ月——「花と兵隊」制作ノート』松林要樹著（同時代社）

（もり・かずひこ：1958年群馬県生まれ。93年から百貨店駐在員として北京に3年半在住。現在、広告会社勤務。趣味はカラオケ、ヨガ。最近、加藤真規子著「精神障害者のある人々の自立生活—当事者ソーシャルワーカーの可能性」（現代書館）にハマっている。方正友好交流の会ボランティアスタッフ）

深谷シネマで『嗚呼 満蒙開拓団』を観る

芹沢 昇雄

中国・方正に中国政府が建ててくれた『日本人公墓』が在ることも、隣に『養父母の墓』が在ることも知っていたが、世間には殆どには知られてこなかったであろう。「方正友好交流の会」の大類善啓さんたちの長い間のご尽力や、この羽田澄子監督のこの映画はその認知に大きく貢献したに違いない。

誰しも知って感心するのは侵略・加害側の公墓を被害者側、しかも、政府が建てたという事であろう。しかも、見た通り非常に立派なものであり、地元の人たちが丁寧に整備までして下さっていることである。

戦争というと、誰しも被害や悲劇は訴えるが加害を忘れがちである。その、被害者が加害者に立派な公墓を建ててくれた事に私は感動するのである。

開拓団体験者も中国人が如何なる生活に追われたか知っている筈である。現に「武装移民」として武器を持って侵略したのである。

「政府の指示であり知らなかった」とは言え開拓団も中国に対しては加害の立場であったことは間違いない。しかし、中国は日本の民には責任がないと寛大措置で望んでくれたのである。日本の強制連行・労働の現場に政府が建てた慰霊碑は一つもあるまい。在っても殆どが民間やボランティアである。

もう一つ、寛大措置の現場があり、それは「撫順戦犯管理所」である。

焼き尽くし、殺し尽くし、奪い尽くしの「三光作戦」処か強姦までし、撫順戦犯管理所に収容された約 1000 人の殆どが起訴免除とされ、起訴された 45 人にも死刑も無期も無かったが、これも「日本人公墓」同様に周恩来の指示であった。

周恩来は復讐や制裁では憎しみの連鎖は切れないと「前事忘不 後事之師」の寛大措置を執ったが、ワイツゼッカー独元大統領も「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」と全く同じ言葉を使っている。

我々日本人はこの加害者が被害者赦してくれたことを忘れてはならない。

(せりざわ・のぶお：68歳、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」事務局次長。撫順戦犯管理所で収容された日本帝国軍人たちが周恩来総理の寛大な措置で無罪で釈放される、という奇蹟のような出来事を後世に伝えようと活動をしている)

次の世代に伝えたい

—「嗚呼 満蒙開拓団」自主映画会に関わって—

渡部 通恵

この映画に出会うまでは満蒙開拓団とか満蒙義勇軍とかという言葉も意味も知りませんでした。知らないことを知ることから、すべては始まるということで、上映にかかわることから始めました。

周恩来首相が軍部（組織）を憎んで人を憎まず、と言われたことは当時の疲れて弱っていた日本人にとっては、救いの言葉だったろうと思います。

知らされていなかった、知らなかったとは言え逃避行になった時の現地住民の態度で自分たちが加害者として、彼らには認識されていたことを、まず一番に肝に銘じなければなりません。その部分が少々希薄だったように見ましたが、どうでしょうか。

日本人は、外敵に国土を蹂躪されたことがないので、やさしいから、物事をうやむやにして、次世代へ禍根を残しています。

加害者の屍を拾い集め弔う墳墓を作り、守り、伝えてこられたことは広く皆さんに知ってもらって、方正の方々をはじめ、中国の人々がいかに心を広く大きくもっておられたかを感じてほしいです。

個々人の小さな思いは、大きな組織・仕組みの前では何ほどのもんかということなんですが、そこを大切にしなかったから、現在のような社会になってしまったのではないのでしょうか。

声を挙げていき、また挙げつづけることがいかに苦勞を伴い心を疲れさせるか、多くの先人は示してきてくださいました。

先人の知恵を、あとに続く私たちは次の世代に伝えていく義務があります。そのツールのひとつとして、この映画は価値があるし、またそう使っていくことが私たちに託されたことなのでしょう。

先日、義勇軍で満州に渡った方のお話を聞く会を持ちました。あの時代にあの地に生きて、というこの映画の関連の会でした。多くの関係者と思われる方々が聞きにこられていましたが、皆さん高齢で、今までの思いをこのままあちらの世に持って行っては忍びないという感情が、会場にあふれておりました。映画会場もそうでした。始まる1時間以上も前にきて待っていてくださった多くの皆さんから、一様にその思いが伝わってきました。

貧しい村の口減らしのために、時の政府に踊らされた方々の悔しさ、情けなさは映画から伝わってきました。それを確認にいらしたんだと納得しました。心の整理のために。

朝鮮民主主義人民共和国に、核を持たせてしまった私たちの責任は、この映画の出発点にあります。そういう意味でも、いまだに私たちは加害者であり続けていることを、自覚しながら、どうやったら少しでも心を軽くすることができるのかを、模索し続けて、人類の未来を明るくすることを目的に、また、日々の活動をしていくことになるでしょう。

2月21日、”対立の世紀から共生の世紀へ”という平和シンポジウムをしました。島根県は、日本海にある竹島（独島）という岩の島を、わが国固有の領土だと主張するために、竹島の日（2月22日）を5年前に制定しました。それを機に韓国との民間交流を含めて関係が悪くなり、子どもたちは修学旅行がなくなったり、スポーツ交流もできなくなりました。この対立を煽る言葉を、平和を構築する言葉に置き換えることも目的として開催した会でした。パネリスト・参加者の皆さんと、竹島を対立の種から平和の種になるように、知恵を絞りあい、寄せ合って採択した平和宣言を添付します。

この平和宣言は朝鮮・韓国・日本・アメリカの政府へ届けます。

竹島に近いところに住むものの責任があります。瞬時に情報が世界へ伝わる時代と、平和を願う人々があります。朝鮮・韓国・日本から基調講演をしていただいて、三つの国の参加者の皆さんが手をとっていっしょに踊りました。壮観でした。

平和宣言

日本海＝東海を囲む北東アジアから世界の平和の構築をめざして、私たちは集いました。

竹島＝独島を、対立を煽る領土問題としてではなく「平和の礎」とし、「竹島の日」を平和の日と位置づけ、ひとりひとりが何をなすべきかを共有しました。

民族・宗教・領土問題の解決方法を戦争に求めた過去に向き合い、記憶し、語り継ぎ、歴史の教訓を平和の構築に向けた力にしていきます。

朝鮮半島と日本の非核化と、世界の核の削減の過程を通じて、人類の平和な未来を拓くように私たちは手を携え、力を合わせていきます。

構造的な暴力である貧困と差別をなくし、すべての人の尊厳が尊重される、「積極的平和」な社会を創造していきます。

2010年2月21日 平和アピール実行委員会

（わたなべ・みちえ：稼業の籐家具専門店の店長の傍ら、子どもは世界の宝という信念から、アフガニスタンの学校建設市民活動団体代表や、教育・社会・自然環境の改善、保全、継承と暴力のない平和な世界の構築をめざして、日々活動している。59才）

涙が止まらなかった

—映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て—

畠山 孝

私は今、1926年生れの85歳です。戸数17戸ある農漁村で育ち、畑を耕し、漁草や魚を食べて暮らし、夜は電灯もなく、ラジオも聞けずの田舎育ちをしてきました。その頃、中国と戦争をしており、村からも何人かの若者が軍人として出征し、戦死者も町全体で何人かが出たと聞いておりました。

私は大きな町の小学校のある分校で、先生一人生徒三十人ほどが学ぶ学校に入り、更に私一人が上級の昔の中等学校に進んで今の宮古市で学び、ラジオや映画を見ることができました。その頃、上海や南京が陥落し、夜、旗行列で出た記憶があります。

その頃、中国戦線から帰った軍人から、中国で暴れ、多くの人を殺した話を聞き、眉をひそめたことを知っています。私は子供心にも、前には日清戦争をし、今また中国と戦って、台湾や満洲を取るということは、卑劣なことで絶対に許されないことだ当時考えておりました。

戦争どころでない。中国は日本の本家のような国だ、仏教や漢字を日本に伝えて下さって、日本は栄えてきたではありませんかと・・・そうしているうちに「嗚呼 満蒙開拓団」の元となる青少年義勇軍の募集のポスターが校舎に貼られているのを見ました。友人の何人かは志願して内原訓練所に入団して帰ったのですが、正式に入団した話は聞きませんでした。私は、その入団者がどんな仕事をしたかはよくわかりませんが、豆や芋を満洲の大地に植えて生活し、やがて満洲を占領して日本人村をつくる目的であろうと思ったのでした。

昨日、兄が暫くぶりで来たので、兵隊で満洲に2年ほど居たので、開拓団の様子を聞きましたら、多くの日本人が農地を求めて厳しい自然の中で活動していた話を聞きました。そんな中で、中国人は親切で、やさしい方が多かったとの話も聞きました。

やがて日米戦争が始まり、はじめは勝っていたが次々と敗れ、やがて特攻隊という人間弾を使い敗れたのでした。

さて映画に戻りますが、私は終わりまで涙しました。日本軍の犠牲になった人々が終戦時、日本に帰るため、ハルピンを目指して山野を、子供の手を引いてさまよい、行って見たら、日本軍は全部帰って不在、人々はそのまま寒気と食べ物もなく、ソ連軍に追い殺され5千人もの人々がそこで死亡され、中国人が多数協力してその遺骨を拾い集めて、立派な日本人墓碑を建立して下さった。しかも軍と民衆を区別して周恩来首相の判断で実現されたと紹介され、私は涙が止まりませんでした。

中国人は皆、日本を親の敵^{かたき}以上に考えられて当然の時、このように手厚い好意をいただいた日本人として、何とお礼を申し上げてよいか、私はこのことを多くの人々に伝え、人

道の最高のしぐさを広く日本人に伝える責任を感じております。有難うございました。

尚、周恩来首相は、日本の田中首相との会見で、立派な戦勝国でありながら、日本から賠償金を取らないことも声明され、破れた日本を救う処置をとられ。重ね重ね感謝申し上げます。やがて中国は、世界のリーダーとして人類の先頭に立たれることを祈念して筆を止めます。

(はたけやま・たかし：1926 生まれ。小学校教員を 30 年、県政府モニター、民生委員、シルバー人材センター広報編集部長などを歴任。桂林、香港、上海をはじめ各国を視察。今回は、宮古市での自主映画会で、映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見る)

追 想

—映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て—

松浦 周之助

「この子は日本人の子供だ」と偶々出会った中国人から呼びかけられた。1946年、北満でも朝から暑い朝、私は中国人の農家に使われ、牛や馬7頭を引き連れて、約5キロ離れた放牧場まで片目の馬に乗りながら、主人の中国人と一緒に毎日のように行く途中でした。

その前年3月現役兵として、ソ満国境ハンカ湖近くの「楊崗」の独立中隊に入隊し、ちょうど一期の検閲（初年兵のテスト）が終わり、幹部候補生の試験結果の発表を転属した密山の部隊で待っていた時でした。8月9日ソ連軍を避けて山中を逃避する時でした。

途中、当時の「勃利・弥栄」という満蒙開拓団発祥の地と云われる街を通り過ぎましたが、野犬が彷徨しており、人の姿には全く会えませんでした。

途中で出会う避難する開拓団の人は皆、殆ど老人女子と子供ばかりで私たち、兵隊を見ると同行すべく暫くはついてきましたが、どうしても遅れ、結局離ればなれとなるばかりでした。

演習の際、偶々広島県から来た開拓団の方の土作りの家を訪れたことがありますが、それは見かねるような粗末なもので、満蒙開拓という美名に隠された、棄民政策の犠牲と言ってよいようなものに見えました。

今回「満蒙開拓団」の映画を見る機会があり、当時を偲び、今なお中国、特に東北地区一帯からの未帰還の方々のことを思えば、ただ戦争はすべきではないと言うのみでは、済まされず、幸い生を受けて日本に帰ることができた者として、当時のことを思い出し、広く喧伝する一助になればと思い、思いつくままに筆をとりました、まだまだ言い尽くせませんが、こんなことは、国の施策であっても二度とあってはならないと思います。

（まつうら・しゅうのすけ：松江市在住。昭和18年旧制中学を卒業。就職のため渡満後、入隊。密山で敗戦、ソ連軍の捕虜になるなど辛酸をなめたが、21年10月、広島県大竹港に上陸復員後、当時疎開していた郷里の松江市の肉親のもとに帰る）

関東軍の無策に怒る

—「嗚呼 満蒙開拓団」を観て—

吉川 健

私は元満州電電社員（通信手）で新京におりましたが、昭和20年6月熱河省承德電報局に転勤しました。当時17歳でした。

8月9日ソ連の侵攻により承德在の関東軍西南防衛軍司令部はさっさと錦県に後退、私たちは取り残されました。8月19日ソ連モンゴル連合軍が隣の駅まで来たという情勢によりトラックで錦県に脱出しようとしたのですが、途中建昌という山の中で捕らえられてしまいました。

それからの苦難の道のは省略しますが、私たちの抑留列車（貨車）がハルピンの駅構内に何日も停車していた時、遠くの道路を麻袋や箆を体に巻きつけた大勢の人がぞろぞろと歩いて行く光景を見ました。その人たちが日本人だということは分かったのですが、日本人がなぜあんな恰好をしているのか、どこから来たのか、私たち自身どこへ連れて行かれるのか疑心暗鬼の時でしたので、深く考えることもなかったのです。後になっていろいろ資料を読むにつれ、あの人たちが奥地から逃れてきた開拓団の人たちだったということが分かりました。

満蒙開拓団の悲劇については、方正開拓団をはじめ多くの資料を読んでおりますが、方正県の日本人公墓の事は、映画『嗚呼 満蒙開拓団』を見て初めて知りました。北満の荒野に罪もない幾万の人たちが朽ち果て、そして野ざらしになったことを思うとき、私は涙を禁じえませんでした。

悲劇の原因の大部分が関東軍の無策に起因するものであることに深い憤りを感じるのは私だけではないでしょう。それらの資料の中で私が一番心を打たれたのは、詳しいことは忘れましたが、「天皇の世紀」満州編で読んだ熊本開拓団の最期でした。押し寄せる暴徒に抗しきれず鐘を合図に猛火の中に婦人子供全員飛び込んだという最後です。また日中国交回復後に始まった残留孤児の帰国問題についても、私のように元満州にいた者は特にかわいそうだという気持ちが深いと思います。

終戦当時17歳だった私もすでに82歳、先輩同僚の多くが既に鬼籍に入りました。開拓団悲劇を知る人も少なくなり、歴史上の出来事としてだんだんと風化して行くのでしよう。

（きっかわ・たけし 82歳。島根県松江在住。2月14日の松江の自主上映会で映画「嗚呼 満蒙開拓団」を観る。民団でありながら軍隊とともに、シベリア経由でモンゴル人民共和国に送られ、2年間の強制労働に服し、1947年辛うじて日本に帰国した）

真実かどうか冷静に見つめたい

—「嗚呼満蒙開拓団」を観て想うこと—

高嶋 敏展

子供の頃、テレビで見た中国残留孤児の肉親探しのニュースは不思議だった。なぜ、もっと早く探しに来なかったのか。なぜ、子供を捨てて親だけ日本に帰って行ったのか。

「嗚呼満蒙開拓団」で描かれていた事が事実であれば、謎のいくつかが解けた事になる。城山三郎の小説で好きだった広田弘毅のイメージも少し変わった。敗戦が濃厚になった時点でも大陸に入植を続けさせ、既成事実の為にわざと引き上げを送らせる。今、イスラエルがヨルダン川西岸やガザ地区で行っている既成事実、占領地へ入植を続けているのはまったく同じ手法だと感じた。いつの世も「お上」のなさる事に庶民は翻弄されている。

丁度、近所に満州に農業技師として19歳で渡った老人が健在なので、話を聞いてみた。たまたま、農学校を卒業したので満州の農学校の講師として職を得た。全国各地から入植して来た開拓民に畜産技術を教えていたそうだ。

「農家の次男三男には夢がない。大陸で一旗揚げてやろうと意気込んでいた」と映画と同じ言葉に当時の空気を感じた。現地徴兵されてもうちょっとでシベリア送りだったが、脱走して生き延びたという。

その老人が語るには、開拓地での農民は現地人に非常に恨まれていた。しかし、故郷を捨てた農民に他にどんな方法があったのかと。農民が土地を奪われる、その辛さを誰よりも知るのと同じ農民だった。知って、知らぬふり、何も語らぬ事しか当時はできなかったという。

方正との間に友好交流が続いていると知らせた。「中国には罪と人を分ける考え方がある。故郷を離れ、移り住んで来た日本の農民の辛さを、中国の農民達も解っていたのではないかと興味深げに話した。

蛇足ではあるが、南京大虐殺についても、当時の満州で噂を聞いたことがあり、実際、起こりえる状況だったと思うと話してくれた。

「嗚呼満蒙開拓団」は時代の雰囲気をよく表していると思うが、描かれている事が事実であるのか、虚実であるのか、あるいは特定のある人には真実であるのか私にはわからない。今、私たちを取り巻く社会はあまりに多くの情報があふれていて、真贋の見極めがあやふやになっているからだ。私はこの映画を賛美するのではなく、冷静に見つめてみようと思う。その事が歴史から学ぶ一歩であると信じていたい。

情報の受け売りではなく、様々な角度から「いつ、誰が、なぜ」を考えながらものを見つめる努力をしようと思う。

現代人はあまりに情報に「受け身」ではないか。ワイドショーやモーニングショーで流された情報の中に間違いや一方的なバッシングは含まれていないだろうか。多数の論理や正義を振りかざしてはいないか。

インターネットの世界では情報は現れ、溢れ、いつの間にか跡形もなく消えている。鵜呑みにするにはあまりにも曖昧な情報源だと危機感を感じる。

世界を平和に出来る方法は歴史をきちんと学ぶ、知る事が最も簡単なように思える。欲と利害で行われた戦争のむなしさ、惨めさを考えれば殺し合わない事がいかに賢明な判断かわかると思うがいかがだろう。

簡単な結論が、最も解りやすく深い。人が人と殺し合う事は悲惨で、情けなく、悲しい事だと思う。また、人を殺す道具で人の幸せや平和は作れないだろう。

(たかしま・としのぶ：1972年生まれ。島根県出身。写真家、アートプランナー。旧満洲へ渡った父の従兄弟が19歳で満洲に農業技師として移住した者があり、映画「嗚呼 満蒙開拓団」に関心を持ち、松江での自主上映会に参加)

映画『嗚呼 満蒙開拓団』と講演で私が学んだこと

加納 佳子

朝鮮半島、中国大陸、そしてアジアの国々に侵略して植民地化するための国策により、甘い言葉で大陸に狩り出され、かけがえのない人生を踏みにじられ翻弄された人々、そして戦況の悪化で敗戦が時間の問題となった時にもなお、執拗に狩り出された人々の当時の様子を、大類様のお話と満蒙開拓団の記録映画によって知ることができました。

この有様を知り、言いようのない憤りを強く感じています。さらに許されないのは、戦況の悪化により撤退を余儀なくされた時に、開拓団派遣を机上で立案(?)し、施策発令の中心となった人物や、大陸の栄華を貪った人々はいち早く情報を察知して、不法に蓄えた富と一緒に我先に帰国をし、一部の人たちではあると思いますが、戦後64年、今は何事もなかったかのごとく涼しい顔で口を拭って形や姿を変えて、再び国民の血税を貪っていることに強い怒りを感じています。

満蒙開拓団の真実の一部が収められた記録映画の鑑賞の前に、講演でお話になられました悲惨なさまを知る機会を得たものとしては、大陸に置き去りにされた開拓団の人々の『声なき声』は、時を経ても、より多くの人々に知らせていく役目を今の私たちがいただいたと思っています。

そして現在では、戦前とは形を変えた「狩り出され見捨てられて置き去りされる」状況に、枚挙にいとまはありません。その例のひとつに、低所得高齢者問題があります。

介護を必要とする低所得高齢者が、介護職員が十分に措置されていない老人施設に収容（狩り出され）され、その施設の高齢者の介護をする人たちの勤務条件や、低賃金の劣悪条件や環境の中、火災や災害などの緊急時に入所者を助け出せない体制、つまり見捨てられ置き去りにされる条件のままで運営している施設が多く、火災や災害が発生したとき自力で逃げることのできない高齢者の方々が、置き去りにされ見捨てられていとも簡単に命を奪われています。

また、低賃金や過酷な労働条件で働いている職員の一部の中には、不満のはげ口として身動きのできない高齢者の方を、繰り返し虐待するなど被害が出ています。時代と現場は大きく違いますが、経済的な弱者が常に危険の最前線に置き去りにされている現状は、先の大戦時の国の政策根幹とは何ら変わらないのではないのでしょうか。使いたくない言葉ではありますが、まさしく歴史は繰り返されている、と思わざるを得ません。

次代を担う世代にも事実に基づいた歴史認識を正しく伝え、人の命を簡単に奪い去る連鎖をどこかで断ち切らねばなりません。社会的に弱い立場の人々が、真の幸せを実感できるような政治を行っていけるように、一人ひとりが歴史の背景や真実を学び、まずは今行われている政治に関心をもって、社会的に一步踏み出すことが求められていると思います。

(かのう・よしこ：1944年生まれ。島根県雲南市在住。幼児教育に38年間携わる。夫の父（義父）は硫黄島で戦死。戦争遺児として成長してきた過程を見聞きする中で、戦争の過ち再び繰り返してはならないという思いを強くもち、松江での自主上映会に参加)

私の六方拝

—「嗚呼 満蒙開拓団」自主上映会に参加して思う—

高尾 源峰

1. 老人になる程、修業しなければならぬと教えられた。私の実践は写経を中心に行っている。まず朝、早く起き、2時半を起床時刻に定めている。寒中でも冷水摩擦はかかさぬ。清めた後、六方拝をし、座禅（20分）、読経（10分）ラジオ深夜便の心の時代をきく。そして写経——今日まで200巻（1巻約8000字）大般若経を書いた。【自らも書き、まわりの人々にも写経をすすめている。法華経8巻、開経、結経、阿弥陀経、涅槃経、父母恩重経、短い経の手本をかいて、力にかなった人にわけている】

1日に朝書くのは、約1000字程度で、ゆっくりとした写経である。

2. 六方拝について 六方拝はインドの人々の行である。お経のかたちで中国を経て我が国に伝わった。文章にすると長くなるが、5分間ぐらいのものである。
 - (1) 親を拝む。無限のいのちに礼をいう。——東方を向いて——
 - (2) 仏法・仏道の師にお礼をいう。2,500年さかのぼってお礼をいう。——南方を向いて——
 - (3) 配偶者や子供、孫にお礼をいって拝む。——西方を向いて——
 - (4) 広く世間の人々にお礼をいう。——北方を向いて——
 - (5) 低賃金で働かされる人々にお礼をいう。インドの不可触民等^{ふかしょくみん}にまで礼をいう。
(下の方角に向く。東にもどる)
 - (6) 天上の諸仏、諸菩薩、諸天、善神^{しよてん ぜんじん}、天神、地祇^{てんしん}に、加護をお祈りする。
(天に向かって行う)
—わが子や孫を拝むことはおもしろいし、下層社会の人にも念^{おもい}をこめて、お礼をいうこともしたいものである。
3. さらに四方の方々にお礼をいう、六方拝のときのように、東、西、南、北に向きをかえてお礼をいう。
 - (1) 東方、仏縁のあった人10人ばかりに感謝のお礼をする。
(次が大切——)
 - (2) 南方——太平洋戦争で戦死した日本人等の冥福を折る。帰りたいことであろうに。ニューギニアに14万の日本軍が飢えて全滅した。フィリピンには45万の日本

の大軍が敵と戦い、病気で倒れ、苦むしたままである。マリアナ沖海戦、レイテ沖海戦等で日本の艦船が撃沈された。多数の将兵は水漬^{みず}く屍となっている。

内地では昭和20年3月10日の東京大空襲で10万人が亡くなっている。

5月の大阪、7月の名古屋、その間に各都市の空襲に大勢の人が亡くなっている。特に広島空爆で14万人が一瞬にして亡くなった。冥福を祈る。

- (3) 西方——日中戦争で大きな迷惑をかけた。日本軍の犠牲者も多い。中国の非戦闘員の被害は想像を超えたものがある。

いのちを失ったもの、ひどい目に合わされたもの、ものや食料をとられたもの、家を焼かれたもの等、気の毒な限りである。お詫びの気持を合掌し頭を下げることで表す。こういうことですむことではないが、私にはあらわしようがない。マレー半島の華僑の犠牲者も多かった。中国の人は“恨みに報いるに徳を以てす”と賠償を取らなかった。偉大な指導者、蒋介石総統や後の周恩来首相にお礼を言わずにおられない。

次いで海に沈んだ輸送船も多い。その犠牲者を拜む。沖縄地上戦では30万人の犠牲者があった。さらにさらに長崎原爆犠牲者7万人の冥福を祈る。永井隆博士の名も唱^{とな}え称^{たた}える。

- (4) 最後は北方——シベリヤ抑留でいのちをおとした人公称6万人だが、もっと多いことだろう。私の従兄弟も満鉄からシベリヤに引っぱられ亡くなった。

次に満蒙開拓義勇軍や家族の人々犠牲者はわからないが10万人もあるだろうか？ 皆悲惨である。

朝鮮半島の人々には、きびしい労働等に、ひどい目にあわせている。申し訳ないという強いお詫びの気持を捧げる。

以上長い文になったが、お詫びし切れない一面がある。毎朝^{おもい}念^{おもい}を込めて祈る。また、夜、寝床に入ってから足を伸ばし、手を伸ばし、そして“お父さん、おやすみなさい、お母さんおやすみなさい”とつぶやき、朝の六方拝をくり返し、念じつつぐっすり眠りにつく。

友達と語るときはこの”お父さんおやすみなさい”をいうと安眠できるように思える、と告げることにしている。

(たかお・げんぼう：1926年生まれ。僧籍二等教師、小中教員、社会教育主事、島根いのちの電話相談員、刑務所特志面接委員を経て現在に至る。松江写経の会代表。旧松江63連隊慰霊塔彼岸法要奉仕。日赤島根県支部所属みずうみ赤十字奉仕団顧問)

松江は女性パワーで溢れていた

—『嗚呼 満蒙開拓団』自主上映会に参加して—

大類 善啓

『嗚呼 満蒙開拓団』は、東京の岩波ホールで好評裡に上映を終えた後も、個性的なプログラム編成で活動する各地の映画館で次々に上映され、また今でも自主上映会で盛んに取り上げられている。その自主上映会のひとつが2月14日（日）松江で行われ、主催団体から演出の羽田澄子さんに講演の要請があった。が今一つ、羽田さんのお身体が本調子ではない。まして地方へ遠出するとなると難しいということで、代わりに出掛けることになった。

松江というと、一度行ったことはあるが、散策した記憶もない。小泉八雲が松江を愛し住んでいたというイメージがあるぐらいだ。高校時代の世界史の先生が大学を出た直後、東京にいるよりも田舎に出ようと、最初に松江で先生になったことを思い出した。在学の2年生以降その先生と親しく言葉を交わしたが、松江についてついぞ話したことは一度もない。ただ、まだ親しく話す以前の1年の時、急遽代講で初めて教室に現れた先生は、自己紹介として松江に赴任したことを我々に話した。それが今でも印象に残っている。ああこの先生は、夏目漱石の『坊ちゃん』をイメージして、松江を選んだのではないか、と今でも勝手に想像している。

松江か。のどかな城下町だ。そんなイメージだけが先行していた。

ベアテが映画を運んできた！

実は、13日の夜に、ある会合に出ようと思っていた。それを終えて行くとなると夜行になる。これはしんどいな、着いても早朝である。どこで一休みするかが問題だ。もう一つは、新幹線の最終便に乗り、京都の叔母の家に一泊し、翌朝岡山経由で松江に行くという方法だ。しかしだんだん期日が近づいてくると、これもかなりしんどいだろうなと思うようになった。羽田澄子さんの代役など務まらないことはわかっているが、大事な役を万全の体調で努めたい。そう思って前日に行く旨、主催団体である『ベアテの贈りものを届ける会』の加藤尚子さんに伝えた。

『ベアテの会』とは、映画『ベアテの贈りもの』を契機に発足したグループだ。世界的なピアニストを父にもつベアテ・シロタ・ゴードンさんは1946年、現在の日本国憲法の草案に携わり、男女同権条項を盛り込むことに全力を尽くした女性である。映画が公開された当時、ぜひ見に行かねばと思いながら、実は見逃してしまった映画だ。

映画は、日本国憲法の男女平等の条文がどういう経緯で生まれたのか、生みの母でもあ

るベアテ・シロタさん一家の苦難の歴史、そして憲法第24条を受け取った日本女性の思いを描いたものである。この映画を見た加藤さんたちは、「ベアテの思い」を更に多くの人たちに伝えていこうと会を発足されたとのことだった。

また加藤さんは、羽田澄子さんの前作『終りよければすべてよし』の自主上映会を主宰された方でもある。彼女は「羽田さんの作品なら安心して観られる」というほどの羽田ファンなのだ。その加藤さんに、前日の夕方5時半ごろ松江に着くようにする旨メールを入れたところ、翌朝、「5時半頃に着くというなら、5時から交流会が始まる。それにお出になっていただければ」という電話である。いろいろな人たちが集まるらしい。前日のイベントなのだろう。事前に松江の方々にお会いするのも悪くないと思って承諾した。

「竹島問題」は、対立ではなく対話で！

13日、松江のホテルにチェックインした後、渡部通恵さんが自分の車を運転して迎えに来てくださった。車中、渡部さんは「松江という町はかつての藩の影響もあり、みなさん自分の意見を言わない人が多いんですよ」とのことだった。「何かやろうという女性はみんな松江の外から来た人がほとんどで、私も岡山出身ですよ」という。

あとでわかったことだが、渡部さんは、アフガニスタンに小学校を作る活動や、慰安婦問題、朝鮮・韓国・日本から世界へ平和を、というシンポジウムの開催など、実に様々な活動を積極的に展開されている女性である。

車の中から、「竹島を返せ」という看板が見える。「これじゃ対立を煽るだけです。対立より対話ですよ」と話す渡部さんだ。全くそうだと同感し話すうちに会場へ着く。見回せばほとんどが女性だ。

5時きっかり交流会は始まった。司会を務める添田さんという女性の進行ぶりがまた、プロ級だ。プロ級というより、もしかしたら本当のプロなのかもしれない。

その日は、佐古和枝さんという少壮の考古学者で女性史研究家の講演があったようで、彼女がまず挨拶され、その次に私も一言挨拶することになった。

私が座るように指定されたテーブルは、加藤さんや佐古さん、右隣の女性は貴谷麻以さんという松江市議会議員、彼女も松江ではなく京都出身だという。あとで同じテーブルの女性たちと名刺を交換したが、民主党の角ともこさんや白石恵子さんなど民主党の島根県議会議員という、みなさん錚々たる女性メンバーである。もしかしたら、松江の女性パワーのリーダーは全員、ここに集合しているんじゃないか。そう思うほどの雰囲気だ。

驚くほど勉強熱心な松江の人々

14日のその朝、加藤さんと渡部さんがホテルに迎えに来てくださった。講演前の時間を少しでも松江を見る時間をと、配慮してくださったのだ。今朝の午前10時から始まる第1回目の上映では、180人入るホールがいっぱい。別に60人を入れる部屋を設けて

上映会が始まったらしく、加藤さんも渡部さんも苦労した甲斐があったようで、良かったと声も弾んでいる。

確かに松江の方々是非常に熱心で、事前に「映画を観る前に聴いておきたいお話」という題で、浜田孝志さんという高校の先生を講師に呼んで勉強会も開催していたのだ。

浜田さんは、1986年から10年間、大東高校で歴史教師として勤務。同校にあった体験者の手記を授業の資料に用いていたが、近所に体験者がいることを聞き、調査を始められた。そして12人から話を聞き4年余りかけて調査し、『満州に連れ出された女学生～島根県立大東高等女学校皇国農村学徒報告隊の記録～』（かもがわ出版）を出版された方である。

そればかりではない。この自主上映会後は、松江市在住の歴史研究家の安川毅さんを迎えて、「～この地に この時代を生きて～」と題して「鑑賞後講座」を2月の28日に開催された。本当に熱心な方々だと頭が下がる。

その熱心さは、後述するアンケート集の作成にも表れている。

さて、渡部さんの車に乗って市内をひと巡りだ。松江城を囲むお堀は今、水郷の柳川を真似て小船でゆっくりと見て回れるようになっている。その川下り風景を左に、小泉八雲が住んでいた屋敷を右に眺めながら、着いた先が神霊神社だった。とても古い神社だという。確かにしんとした空気が漂い、ちゃらちゃらした感じから最も遠い雰囲気だ。車を降りて階段を登り、神社に向かう。

昔、丹波の元伊勢神社を訪れたことがある。毎年総理が参詣する伊勢神宮のルーツはここだ！ というだけあって、小さいながらも、床しさと、確かに神は降臨したと思うような厳かな気配と雰囲気を感じたが、同じような印象を神霊神社から受けて、元伊勢神社を思い出した。



神霊神社で。右から大類、加藤、渡部

会場はいっぱいだった

12時半から1時間が、講演である。演題は「方正日本人公墓の意味するものとは」とした。進行役は田中朝子さんだ。これもあとで知ったことだが、田中さんは、島根県という立地状況を十分に踏まえて近隣の平和を願い、「ロシア理解講座」を担っておられる方である。

講演を聞かれる方々は、午前中に映画を見られた方や、この講演の後すぐ映画を見られ

る方である。それ故、映画で描かれ紹介されていることは極力触れずに話そうと思った。そこで、方正友好交流の会の前史、またその後の経過状況や反響、日本人公墓の維持・管理実現に向かった経緯、今後の課題などを話した。ここでは、その中の一つだけ、あるエピソードを改めて紹介しておこう。

日中国交回復にこぎつけた、いわば井戸を掘った一人である岡崎嘉平太さんの話である。国交回復時に、中国政府が日本から賠償金を放棄する決断をした際、東北地方（旧満洲）の官民から、「残留孤児たちを養育した費用だけは賠償とは別に補償すべきだ」という強い声が、周恩来まで押し寄せた。しかし、周恩来はその強い陳情を抑えたという話である。当時、この話を周恩来から聞かされた岡崎嘉平太さんは、「ずっとこの話だけは今まで誰にも話さなかったことだが」と言って、石井貫一さんと牧野八郎さん（共に当会の前身「方正地区支援交流の会」の会長と事務局長だった方）に語られた秘話である。周恩来は、賠償はもちろん、東北（旧満州）からの強い要求を、たぶん涙を吞んで敢えて抑え、いかに憎悪と怨みの連鎖を断ち切ろうとしたかということである。

その時々の方々の声を聞くのが為政者の務めである。しかし、その要求が理に適っているように、それ以上に、長い目で見た場合の高度な政治判断の方が、ヒューマンな精神を呼び覚まし、恒久平和に繋がる道であると考えた場合、断固としてそれを貫徹することがいかに重要であることか。このエピソードはそれを語っている。

講演のあと、時間がもうなかったが、司会の田中さんから、何か質問はないかと会場を見回せば、若い青年が立ち上がった。私が南野千恵子・元法務大臣の公墓参拝など、当時の自民党政権の有力政治家に会うたびに、公墓の存在や維持・管理について話したことを踏まえてであろう、「新たな民主党政権に何か働きかけないのか」という質問だった。

これには、小沢一郎氏が訪中団を組織した時、参加した姫井由美子議員が北京で中国政府幹部に会った際、公墓建立感謝のメッセージを記したチラシを配ったことに触れた。

小沢一郎氏には会えなかったが、姫井議員を通して、中国政府に感謝のメッセージを発すべきだと、関係者を含めて我々が進言したことを話した。

ともあれ、松江での自主上映会は成功裡に終わったようである。それを証明するかのように、終わったあと、「ベルテの会」の現在の代表である吉野康子さんから、当日配布されたアンケートなどをまとめた15頁ほどの冊子が送られてきた。

その中のいくつかを、全文ではないが要約してご紹介しておこうと思い、1頁ほど書き出し始めたのだが、なかなか興味深いメッセージも多く、称賛の声ばかりでなく、冷めた眼もあり、いっそ全文を掲載した方が松江の自主上映会をより深く紹介できると思い、いっさい手を加えずに紹介することにした。なお、名前と住所を明記した方にはその掲載の有無を確認した。ぜひ、松江の人々の思いを、くみとっていただきたいと思う。

（おおい・よしひろ：方正友好交流の会事務局長）



アンケート集

2010年 2月14日(日)

映画「嗚呼 満蒙開拓団」羽田澄子監督演出作品
講演会 演題「方正日本人公墓が意味するものとは」
講師 大類 善啓氏(方正友好交流の会 事務局長)

主催 ベアテの贈りものを届ける会

【映画】 耳にしたことはあってもこれほど悲惨なことがあったとは知らなかった。自分達も生きていけるか分からない状態にあると、自分の命より大事なはずの我が子に手をかけてしまう親たち。そして軍の関係者のみ優先に帰国させたこと。同じ命なのに、軽重をつけることに心から怒りを感じます。再び戦争をおこさないため、昔あったことをよく知ることは大切だと思った。今の日本も格差という名で命に軽重をつけていると思う。その心が戦争につながると思う。〈40代女性〉

【映画】 映画において、周恩来首相の偉大さ(考え方)を改めて感じました。〈未記入〉

【映画】 故両親から戦後の引き揚げの悲惨な状況を事ある毎に聞いて育ちました。私の勉強不足もあって今日の映画を観ることで又、戦争の事実を知る事ができました。私たちの世代は戦争の実体験はないけど親から聞いて育った世代として語り継ぐことの大切さと、戦争の事実を知ることの大切さを思い知らされました。とても重いテーマですが、忘れてはいけないことと、胸に深く刻むことができました。この映画を観て羽田さんの意志を受けつぐ人たちが、生まれると思います。〈60代女性〉

【映画】 戦後は遠くになりけり…と云いますが、戦争の忌まわしい記憶は遠くとも決して忘れてはならないと再認識させていただきました。シベリア抑留にはいろいろと読書していましたが、今日は勉強になりました。ありがとうございます。〈40代男性〉

【映画】 昭和27年に生まれ、戦争のことは何もわかりませんでした。本当にひどい国策だと思いました。平和を守らなければと思います。〈50代女性〉

【映画】 映画において、周恩来首相の偉大さ(考え方)を改めて感じました。〈未記入〉

【映画】 開拓団の方々のご苦勞感謝致します。〈未記入〉

【映画】 この映画の存在を知るまで、満蒙開拓団という言葉すら知りませんでした。しかし、今回の上映で少しは知ることができ、今後の興味にもつながりました。周恩来の軍国主義と日本国民を分けて考える。という考え方は素晴らしいと思いました。〈20代男性〉

【映画】 昭和10年生まれの私には、この開拓団の名前は昔から今まで耳にして来ました。今日、実際のことを聞かせて頂き画面を観て、大変だったことを知りました。有難うございました。〈75才女性〉

【映画】 映画の中で、初めてそういう公墓のあることを知り、感動致しました。又、中国という国の懐の深さを感じました。〈59才女性〉

【映画】 秦阜村が開拓に出かけた地区だったことは実家に戻ったときに本が1冊ありましたので知ってはいたのです。おんぼらもいい処ですが…。知ったからには忘れてはならぬという内容を秘めています。

【講演】 羽田監督でなかったので終始戸惑いの1時間。長く感じました。

映画の前のお話は得るところはありました。急なことだったのかもしれませんがね。それにしても人前でスピーチは難しいことと聞き手の立場で思ったこと。〈女性50代〉

【映画】 私は、中国・内モンゴル自治区からの留学生です。満蒙をいうの「蒙」は、私のふるさとです。

私のふるさとにも日本からの残留の方がおりまして、先生でした。〈26才男性〉

【映画】 自由と平和とかみしめる。〈未記入〉

【映画】 ありがとうございます。私69才になりますが、中国残留孤児の事が理解できませんでした。どうしてもっと早く学校でこの歴史を詳しく教えてくれなかったのでしょうか。今からでも遅くありません。ぜひ、学校の社会科で教えるようにして下さい。中国韓国は、戦争の歴史を教えているのに日本は隠しています。若い人たちにぜひこの映画も見せて下さい。そして国会議員達全員に見せてください。ぜひぜひ国家公務員にも議員にも見せて下さい。〈60代女性〉

【映画】 主人は15年3月に亡くなりました。73才でした。友達(同級生)が満蒙開拓団に行かれ亡くなられたと聞きました。どういう所で亡くなられたか主人に代わり見せて頂きました。悲しいことだと思います。主人はお盆には必ずお墓参りをしていました。〈女性〉

【映画】 松江市より来ました。戦争の悲惨さを身近に感じられるいいドキュメントでした。

中国の方が、日本人のお墓をたててくださったことを知り、驚くと共に、なぐさめられました。またこのような映画を見たいです。〈40代女性〉

【映画】 敗戦後の逃避行中の親が子を殺さねばならなかった事の悲惨。残留孤児問題が国交回復を契機に始まったと思いますが、そのころもっとこれらの事実が掘り起されるべきだったと思います。しかし、今回の掘り起こしのすごさに感動。

【講演】 初めて知ることばかりで、特に松田ちえさんと、周恩来との偉大さに感動しました。〈女性80代〉

【映画】 映画もよかったです。何より、会場に居る人たちの反応に感動しました。共通の体験が少なからずある人たちがこんなにもいるものか、と。私も戦死した祖父や34歳で未亡人になった祖母のことを思い、せつなくなりました。

【講演】 活動のこと、初めて知りました。活動の広がりを願って、私も今日知ったことを話していきたいと思っています。〈未記入〉

【映画】 良い映画をありがとうございました。

【講演】 地道な活動に感動しました。〈未記入〉

【映画】 事実に基づき、よくあそこまで調べられ、いろいろな方にお会いし、お話を聞かれたこと大変だったと思います。 みな高齢になられ早く記録を残しておかなくては、語る人もなくなっていられる最後の記録になるのではないかと思います。 感謝感謝です。〈65才女性〉

【映画】 知らなかった歴史があり 平和の大切さをあらためて感じた。〈30代男性〉

【映画】 是非、今後もこのような活動を続けて下さい。素晴らしい企画です。〈男性60代〉

【映画】 この上映機会で、生の声を聴けたことがよかったです。〈50代女性〉

【映画】 若者に日本の棄民の歴史をこうして可視化して下さったことに感謝します。

【講演】 はじめて、日本人公墓を祀られ、それを守る・伝える活動をされている団体の存在を知ることができました。ありがとうございました。〈50代女性〉

【映画】 日本国の棄民政策のむごたらしさ、改めて怒りがこみ上げてきます。

アジアにきちんと戦後補償、棄民された犠牲者にも補償しない日本は、だから外国、特にアジアの国々リーダーになれない原因でしょう。〈未記入〉

【映画】 今の日本、中国にとって大変大切な映画でした。若い人に見てもらいたいと思いました。

会場は殆んど高齢者のようでした。私は終戦4才になったばかりでしたが、無事に日本に帰ってこれて毎日感謝しています。〈60代女性〉

【映画】 戦後小学校へ入学した者にとっての戦争は、近くの空航場があるため、B29などの飛ぶ音、姿、そして防空壕。畑が少しあって食べるのは、粗食でもありました。黒くぬられた教科書も姉からのおさがり。この映画を観てやはり知らない事が多いと感じます。ウソの無い歴史を伝えていく事の大切さを思います。そして当たり前のような今の平和を。日本人として、日本の歴史を生活そのものを認識する時をもっと大切にと感じました。

【講演】 中・日 相互の真実を知る。知らせることの大切さを思いました。〈70代女性〉

【映画】 私の年齢は戦争時代をよく知っています。この映画を見せていただき感動しました。〈79才女性〉

【映画】 私達の遠くない過去にあった歴史的事実を私は知らなかった。語ることのできる証人の生きているうちに記録した映画を上映していただきありがとうございました。〈未記入〉

【映画】まさに棄民です。「満州も沖縄も薬害エイズもみな同じ、誰も責任をとらない」という言葉が深く残りました。〈男性50代〉

【映画】方正県の日本人公墓に近いところに日本人(個人)の寄付で沙河子学校が建てられて、その学校をその人の呼びかけで慰問訪問したことがあります。(2006年) その折に日本人公墓を訪れました。中国人の心意気に感動すると同時にその恩返しをしようと、もとの開拓団の土地に学校を寄付している日本人もいるという事も(個人的な善行も)是非 皆さんに知って欲しいですね。

1937年長春生まれ 1949年大連から帰国

【講演】方正友好交流の会の存在は知っておりましたが、大類さんのお話を聞いて、主旨が良く判りました。今後とも関心を持っていきたいと思っております。〈米子市・男性〉

【映画】近所に戦後、満蒙開拓団から引揚て来られた方がいます。昭和13年生まれの方ですが、妹や弟を母が捨てて帰った事、自分は子供乍に歩いたので連れて帰った事、等々お話を聞いていました。今回この映画をみてよくわかりました。

【講演】事務局長様のお話を聞きよけいによくわかりました。〈60代女性〉

【映画】戦争にまつわる話はとても辛いですね。平和な時に伝えなければ・・・と思います。

【講演】様々に活動される団体があり、誰かが伝えなければ・・・と思いました。私もその一人として今後も生きていきます。〈40代男性〉

【映画】日本女子大学のとて、夏休みに、この開拓団に同級生がお手伝いに行きました。

開拓団の映画の様に半死半生で帰って来ました。私は行かなかったので、友達の事を知りたいと思って来ました。〈86才女性〉

【映画】日本人が忘れてはいけない事実を掘り起こし記録された御努力・御苦心に敬意を表します。

多くの人に見てもらいたい映画です。

【講演】迫力ある話で面白かった。〈60代男性〉

【映画】残留孤児の話は聞くが、開拓団のことは知らなかった。考えさせられた。〈60代女性〉

【映画】私の両親も開拓団で当時4才・2才・1才の兄3人が自決の犠牲者です。母の手記で高校生の時に初めて事実を知り大変ショックを受けました。この映画で方正のことも初めて知りました。まだまだ私の知らないことばかりあるようです。この様な事実は本当に後世に伝えていかなければならないと強く感じました。

【講演】映画を観賞した後だったので、さらによくわかった面もあり良かったです。〈60代女性〉

【映画】 戦中派の一人として、戦前の歴史を正しく理解したいと思っておりました。素晴らしい映画でした。一人でも多くの人に観てもらいたと思います。有難うございました。〈女性70代〉

【映画】 本日は有難うございました。65年振りのハルピンの街を見て感動いたしました。軍入後の三年間を思い出してしばし感泣いたしました。〈未記入〉

【映画】 満蒙開拓団のことは日本近代史を学習して知ってはいたが、映画を見て身につまされる思いで涙した。中国人の土地を奪い、命まで簡単に奪っていった日本侵略を指導した連中の行為は万死に価する。それを数人の死刑だけで、お茶をにごし、岸信介のような A 級戦犯を首相に選ぶような日本国民にも猛反省を促がしたい。岸は満蒙開拓団にも関わった人物だ。さらに日本は満蒙以上に朝鮮ではもっと長期間、もっとひどいことをした。朝鮮の完全植民地化100周年を今年迎え、改めてそのことを思った。苦勞された方々、今なお苦しんでおられる方々には、日本政府の責任において手をさしのべるべきである。

【講演】 方正日本人公墓の意味するものがよくわかった。ナショナリズムの昂揚が羞恥心につながらない。国を愛することにはならないことを徹底する必要がある。〈70代男性〉

【映画】 身近な思いがけない方が、何人か満州からの引き揚げなどの体験をおもちだったこともあり、以前から関心はもっていましたが、方正県のこと、日本人公墓のことなどについては今日の映画を観るまで知りませんでした。良い映画をありがとうございました。それにしても、何故お墓は日本国政府の手で建てられなかったのでしょうか？ また、日本には、朝鮮や中国の方々のお墓を日本政府の手で建てないのでしょうか？ 素朴な気持でそう思います。日本人のひとりとして、悲しく思いました。

羽田監督様、映画のナレーションもとても良かったです。御体おいとくださいまして、いつかご講演の機会がありますよう！ご活躍をお祈り申し上げます。

【講演】 配布資料の新聞記事を読んで、是非お話を聞きたいと思いました。期待通り詳しいお話を聞けて、時間が短く感じられました。もっとお聞きしたかったです。〈60代女性〉

【映画】 開拓団と残留孤児の関係がはじめてはっきりした。

【講演】 公墓の存在、はじめて知っておどろいた。日中友好のためにも、もっと広く知ってほしいと思う。

〈未記入〉

【映画】 私たちの世代は戦争の記録を聞ける最後の世代だと言われています。この貴重な記録を忘れずにいたいと思います。

【講演】 真の日中友好が、この方正日本人公墓から、達成されることを願います。〈10代男性〉

【映画】 書物等で読んでいたことが、実際 体験者の話を聞くとさらに詳しくわかりました。〈40代女性〉

【映画】 満州へは義勇軍に参加して行き、多くの方が大変なご苦勞をなされたことを知っていますが、方正の日本人公墓のことはまったく知りませんでした。この墓を残された方々の勇気・暖かい人柄に心から感謝したいと思います。

【講演】 たいへん立派な活動をなさっていることを知り喜んでます。是非これかれも続けていただきたいと思います。〈84才男性〉

【映画】 戦争の犠牲がこんな型で今も尚あるということをはじめて知りました。本当に今の平和ボケの時代に皆が今一度しっかり知っておきたいことだと思いました。〈60代女性〉

【映画】 過去が過去になり切っていない。

しかも「満ゴロ」の亡霊が息を吹き返しているのではないか。〈74才男性〉

【映画】 こんなに悲しいことが二度とあってはいけないと思います。後世に伝えるための映画をつくって頂き、真に有難うございました。〈10代女性〉

【映画】 戦後65年やっとこういう映画に出会えたということに残念な気がしてなりません。戦争体験が、子から孫へ、若者達へ、正しく継承されていくことを日本の国にとって極めて大事なことと思いますが、世界史履修問題にも見られる如く、若者にキチンと近・現代史を教えない日本の姿は、大きな問題をはらんんでいます。この映画が今の状況をうがつ力を持っていることに希望を感じています。

【講演】 アジアの成長を日本の経済復元につなげようという戦略は重要ですが、その前に、アジア蔑視、中国蔑視の日本人の意識改革こそ必要です。近現代史の歴史教育と共に、日本人の意識改革と、この日本人公墓の存在は大きな力を発揮すると思います。今後の活躍を祈ります。〈50代男性〉

【映画】 今、私は45才になりましたが、母と母方の祖父は、大陸生まれだったそうです。

が、満(偽)州の話は家の中ではタブーでした。学校教育で日本の中国侵略の歴史を学び、私なりに物心ついた頃から、中国と日本の歴史、政治のことに関心をもって、社会活動もやりました。今は、母にこの映画を見てもらいたい、中国に連れて行ってあげたいと思っています。〈未記入〉

【映画】 戦後60余年、語らずにあの世に行かれた方々が多数おいででしょう。今やっと語りだされる方もおられるでしょう。ていねいに経験された思いを聞き、映像に残されたことに感謝します。そして今生きている私達がそれを語りつぎ平和を守ることだと強く思いました。〈60代女性〉

【映画】 国民 皆んなもっと、こんなことがあったことを考えてほしい。特に政府は、今何を考えているのですか。〈70代女性〉

【映画】 この映画を作って下さって有難うございます。私達が知らねばならない事が、どんなに沢山あるのだろうか。生かされている幸せを大切に一日一日を大事に生きていこうと感じさせていただきました。

【講演】 私たちの知らない事 知らねばならない事を沢山教えていただきました。有難うございました。〈60代女性〉

【映画】 現代の平和な時代までの長い道のりと多くの犠牲があったことつくづく思い知らされました。65才同年代の多くの犠牲も…。今の平和を大切にとのメッセージを受け取りました。知らないことの恥ずかしさも知りました。企画して下さったことにも感謝いたします。〈65才女性〉

【映画】 良い映画を見せていただきました。国の策略を超える力を持つのは一人の国民の思いと力ですね。周恩来の言葉はすごいです。〈50代女性〉

【映画】 真実がわかりました。これからの方向づけになりました。

【講演】 大変に熱のあるお話し方、感動いたしました。時代の裏面を知る事が大切です。

講演後の映画、よけいに濃くなると思います。今年一年の好発進となりました。〈76才女性〉

【映画】 何故、中国へ行くことになったのか、中国人が日本人を何故助けたのか少しわかりました。

【講演】 方正の墓碑が何故あるのか少し理解できました。大類さんの活動が高齢になった当時の体験者の証言を残す上で大切だと考えました。〈40代男性〉

【映画】 講演後の映画ただただにより深く理解できました。国策よるおろかな戦争が、両国の人民が不幸に陥ったこと、改めて知りました。もう、絶対に戦争は許さないと決意しています。

【講演】 私自身、小1の時 大連からの引揚げですが、方正の日本人公墓については初めて知りました。2度目の中国旅行の時は、当時住んでいた家(3か月後に取り壊し予定でした)も見つけることができました。日本人として中国の人達の犠牲の上に暮らしていたことを大変済まなく、つらい思いをして帰って来ました。

〈70代女性〉

【映画】 この人達の上に今日の日本の平和があるとまた改めて感じ涙なしでは見られませんでした。

〈77才女性〉

【映画】 羽田監督は、年配の方にもかかわらず良い映画を作成され感動しました。私も戦争についてはとても関心があり子どもたちに語りついでいきたいと思っています。ありがとうございました。〈50代女性〉

【映画】 題名を見てドラマと思って来ました。証言が主で現実にあった事におどろき平和な世の中が続くよう思いました。〈60代女性〉

【映画】 いざというとき、国が国民を守ってくれなかったということを改めて実感した。

そんな時のための国であるはずなのに・・・ ただし、映画はいささか只長で退屈した。〈60代男性〉

【映画】 戦争はむごい犠牲をたくさんうむのですね。日本軍は民を守らず。その後も国は責任をとらず。とても恥ずかしい国だと思いました。苦労をされた方をていねいに掘り起こし語りからかなり当時の事情の関連が分かってよかったと思います。民、農民を大切にしない今につながっているとも思いました。

【講演】 方正日本人公墓のいきさつが理解できて良かったと思います。周恩来のすごさに比べ日本には本当の政治家、指導者が欲しいものです。〈60才代女性〉

【映画】 日本人の政策で満蒙開拓団として行かされた方々の戦後のご苦労のこと、悲惨な待遇のこと、本当に大変だったこと。想像できない苦しみだったこと。もっと日本政府が暖かい手を今からでも差しのべてあげて欲しいと思いました。知り合いで戦時中、中国北支派遣の部隊長で中国の現地の人々を匪賊から守ってあげ、その地区の長より感謝状をもらい、戦後もその部隊の人々は中国の人々に守られて帰国できたということも知り 人間としての温かい心を持って接していくことを大切にして欲しいと思いました。

【講演】 国を超えて友愛の心をもっともっと大切にして育てていきたいものと思いました。〈70代女性〉

【映画】 ナレーターの声のツヤに魅せられました。73才の者として、内地での敗戦前後を経験しています。引揚げの苦しい話は、周囲の実体験者から聞きました。また、記録で読みました。国策として棄民扱いにしたこと。今の日常でも、市民に目が向いていないことを、国・県・市の施策に感じます。その感じを声にしなないと。どんどん程度はひどくなり、ついには過去の愚策の繰り返しになるのではないか。その怖れから、単独でも少々ながら行動することにしています。

【講演】 愈々周恩来にもう10年長生きして欲しかったと思う。‘98年中国に3ヶ月居た時、北京で大学生とコンタクトした。彼女も周恩来を尊敬していた。私は大連を出発点として、東水地方、黒河まで独り、バスと汽車で旅をしました。時々植民地時代の厳しい跡を感じました。方正日本人公墓の誕生の話に感激した。被害者は恨みを忘れ難いものであるのに。私の母(T先生)は「大陸に居た人は優雅な暮らしをしていた」と複雑な反応を示した。その通りに、職場の同僚に当時の贅沢な話を繰り返す人もいたようだ。〈70代女性〉

【映画】 私の知人、尊敬する人が開拓団より、どうにか引揚げた人です。その人も80才、今頃漸々、当時の事を語られますので、私も詳しく知りたいと思い本日参りました。良く判りました。聞きしに勝る有様でした。〈未記入〉

【映画】 方正日本人墓地なるものの存在を本日この映画をみて初めて知りました。 残留孤児の方をはじめ、満蒙開拓団(なって移民)となって出られた方にその後の生活について国の援護はどうなっているか一般的に知られていないと思います。 戦後65年余もなって国の援護不足は想像できますが、本日の上映に努力された団体の方の努力が強固のもとなって発展することを祈ります。

【講演】 初めて聞くことばかりで大変参考になり ささやかながら「方正日本人公墓」の周知活動をしたく思いました。 本日は昼食をぬいて聞いた講演の価値がありました。 会の益々の発展を祈ります。 <70代男性>

【映画】 あらかじめ知っていたし、幼い時、近所の兄ちゃんが出たこともあって、このように取りあげられて、とてもよかった。 私たち、日本人は戦争をしたと云っても他の国(侵略)に被害を与えてきた。

にも拘らず、大きな心で応じてくれたことが具体的でよかった。

【講演】 いつの間にか、私たちは

・自分の利益のつながらないこと。 あるいは、単なるモノ識りが「よし」とする。 こういうことに慣れきってしまったのでないか。

・こうした中で、当事者たちが、生きる事がやっとの状況で社会にうったえる「術」をもたない。 もったとしても、余裕がなかった。

・調査、立法の機関も自己の地位・名声につながらない事には耳を傾けず、手を出さなかったことを改めて実感した。 活字よりも、時には、映像を通して訴える事の重要性も重ねて実感。 現実・内容で知ることが出来た心にしみる講演・映画。 <70代女性>

【映画】 開拓団が、国策・日本軍国主義の犠牲者というとならえ方は、きれい事すぎるような気がする。 単に国家権力による支配に当時の日本人が一方向的に服従したというよりも、より積極的に一般民衆が国策を推進し、あおった面があるように思う。 一般国民といっても、単に被害者というだけでなく、積極的・消極的加害者でもあったということをおぼえてはいけないのでは。 戦後生まれの私がこう思うのも、今の社会でも多くの人たちに、官尊民卑、お上(政府)のやることには逆らえない。 地方共同体の中で平穩に暮らすには、周囲の顔色をうかがい、人から後ろ指を指されないで、生きていかなければならないという意識が刷り込まれていると感じるからです。

【講演】 残留孤児に限らず、海外から日本に来た異文化を背負ったマイノリティに対して日本政府は冷たいですよ。 しかし、それは政府だけではなく、地方共同体の中で暮らすのも大変に厳しいです。 それは、日本社会が、同質性を求めて、異質なものを排除するようなメンタリティを持っているから。 大連ハルピンでの特機的に暮らせた人達と開拓民の関係は今でもあるような気がします。 今の日本だけでなく、例えば北朝鮮で暮らす人たちにも、ピョンヤンに住むエリートと地方の貧農の人たちとか。 中国でも地方の少数民族など。 もっと目を向けるべきでは。 <50代男性>

【映画】 私の父は、戦争中 村長より「蒙満州に行ってくれ」と言われました。 断ると「股間を蹴って死ね」との事。 行きませんでした。 近所の方は行かれ、家族は離れ離れになり今は家族の形もありません。 改めて映画を今日見ることにより、満州に行った人の苦しみ、戦争のおろかさ、戦争を犯した人の責任を考えます。 私のたった一人のおじの骨はフィリピンの島で収集されないまま。 何とかして欲しい。 映画にして欲しい。 <62才女性>

【映画】 雲南市の実家の本家の伯父さん(三男)一家が、夢と希望に胸をおどらせて満蒙開拓団に入団し渡られ、その後今日迄行方も生死も解らないまま生家では立派な墓地を建て供養なさっております。 幼児だった私は、写真でしかその人となりを知る事はできませんが、とても優しい人だったと聞き、私の胸にも生きていらっしゃいます。 伯父さん一家を偲び周恩来総理の広く大きく優しさと思いやりに満ちたヒューマニズム。偉大なる人格に胸打たれ感動致しまして涙が止まりませんでした。 この映画は、年齢、性別を問わず、特に戦争を知らない若い年代の人達に呼びかけ観て欲しいと思いますので、若い人々の団体グループに働きかけ上映し語りかけて戴きたいと思います。 ありがとうございます。中国の養父母の優しさに胸を打たれました。

【講演】 大類善啓氏の講演を聞き、方正日本人公墓や稲作を教え広めた藤原氏の記念碑にお参りに行きたくなりました。 中国の人々にお礼が言いたいこと切に思いました。 中国と仲良くし、世界平和を広げられたれいいですね…。 私たちはどうすればいいのでしょうか? <70代女性>

【映画】 祖父母が長野県飯田市出身。 祖父が五男、満州にいい土地があるからと満州黒龍江省に移住。 父にはきちんと教育を受けさせたいという祖父の思いで中学一年から飯田の親戚の家に預けられ…祖父は部落の長をしており部落の人の責任を一人として殺されたとか。 祖母、おばさん、乳呑み児をかかえ、命からがら逃げ、日本に逃げ帰っています。 長野には帰れず、良い土地があるとかで、茨城に開拓入植そして…私がその地に生まれ…松江に住んで13年。 父は、あれは侵略だった!とはっきりいいます。 九州に住むおばさん(秋田で義勇軍を希望して、義勇軍になったおじさんと、逃避行の際、知り合い結婚して九州大分に在住。 おじさんは亡くなっています。)からは、まだ語りたくない。 つらすぎると細部までは聞くことが出来ていません。 本当の残酷さ、つらさはわかりませんが、でも、話はよく聞いていました。 私に何が出来るか考えてきましたが、方正公墓の話は、とても、これから生きていく意味で支えになります。 ありがとうございます。 お一人お一人の映画で語る言葉に涙が流れました。

【講演】 方正公墓がこれからの世界中の生きていく人の考え方になること大切さを思いました。

<56才女性>

【映画】 日本の軍国主義の犠牲であって満蒙開拓団の人は何も悪くない。 どの国もそうですね。 アメリカ国家の犠牲かもしれません。 アメリカ人は、北朝鮮国家の責任かもしれません。 北朝鮮の人たちはそう思いました。

【講演】 講演会は組織とか歴史の話が多くて良く伝わらない。 <男性>

【映画】 小生が生後間もない頃に日本軍が数十万人といわれる無差別南近代虐殺が行われ昭和20年(1945年)の終戦迄、中国国内で悪業非道な振る舞いを行ったと聞いています。終戦直前・直後、小学生であった自分が子供心にも鮮明に覚えているのは当時の国内では、拙宅の感度の悪いラジオで聞いた大半が日米の戦況ばかりで内容はいつも「大本営発表我軍は〇〇に於いて敵軍に多大な損失(又は壊滅的な損失)を与え、我軍の損失は軽微なり」これが大日本帝国陸・海軍の報道機関である大本営の常套手段で日本国民を欺く偽りの威信鼓舞でありました。それにも関わらず原爆が2発広島、長崎に落とされ終戦になった。その頃国内では中国(当時支那)のことは殆ど報じられなかったので大半の国民は終戦直前・直後のことは知らなかったと思います。この映画を見せて頂いて、日本の偽りの国策で中国へ渡られ大変ご苦労をされ、又犠牲になられた方々の事を思うにつけ、又日本軍の中国国民に与えた数々の所業は筆舌に尽くし難く万感胸に迫り来るものがあり感涙咽びたくなります。昭和48年(1973年)私の尊敬する偉大な政治家、周恩来中国首相の「小異を残して大同につく」という名言を吐いてイデオロギーのまったく違う田中角栄我国首相と調印を交わし、中国国交回復がなされた事は未だに記憶に新しい。日本人公墓の事はこの映画で初めて知りました。やはり、これも周恩来首相と中国国民の憎悪と恩讐を超えたヒューマン精神の表れだと思います。日本の首相(トップ)は近々必ず訪中し、長年の墓守に敬意を表し、墓前に我が国民の総意を呈し深甚なる弔意を尽くすべきだと思います。〈70代男性〉

【映画】 私は17歳の時終戦を旧満州国熱河省承徳の電報電話局の社員として迎えました。そしてソ蒙軍に抑留され、シベリアを経由して外蒙に送られ、1947年10月まで強制労働に従事し、かろうじて祖国に帰ることができました。列車(貨車)がハルピン駅に何日も停車している時、身に麻袋やムシロを身に巻きつけた人たちがゾロゾロと歩いてくのを見ました。今から考えるとあの人たちは開拓団の人だったのです。開拓団の悲劇については、これまで多くの書物で知っておりますが、方正県の日本人公墓の事は、本日の映画で初めて知りました。北満の荒野に罪もない幾万の人たちが朽ち果て、そして野ざらしになったことを思うと私は涙を禁じませんでした。開拓団の悲劇で一番胸を打ったのは「天皇の世紀」満州編にある「熊本の開拓団の最後」です。〈男性80代〉 吉川健 82才

【映画】 感動！！感動！！本日はこの映画を観賞して一生の喜びでした。もっと若い方々にも観賞してもらいたいと思います。〈女性60代〉 松江市比津が丘 1-11-13 河本澄江 65才

【映画】 私は、昭和20年3月現役兵として北満密山近くに入隊し、ボタン江近くの海林で敗戦の日を迎えた者です。開拓団の苦労を沢山この目で見ています。今日は当時の事を思い出し感激しました。方正公墓のことを初めて知りました。とても嬉しく思いました。

〈84才男性〉

【映画】もしかして私も行ったかも知れませんが本当に考えさせられました。今やっている研究に頑張りたいと思います。ありがとうございました。 <87才男性> 松江市東津田町763 三島昌 87才

【映画】満州については、北満に戦争に行った父、満鉄に行った叔父、満蒙開拓団で行った人などから聞いていたがとても驚いた。いつの時代でも一般庶民が被害者だ。語りつぐことが大切でしょう。

<61才男性>鳥取県西伯郡南部町阿賀359-10 篠田均 090-2808-6943 61才

【映画】悲惨な生活が伝わった。親子の情 養父母の思いが大切にされていた。周恩来首相にお礼を毎朝申し上げ礼拝の行は続けています。

【講演】毎朝2時起き冷水まさつして、座禅・読経しています。その前に西に向いて暗い夜空の西方中国の人々におわびと、賠償をとらなかった蒋介石、周恩来にお礼申し上げたい。

<84才男性> 高尾源峰

【映画】知らなかった事がたくさん描かれてあってびっくりしました。今日、この後、満州で育った親類と会う約束をしています。映画の話しながら当時の話を聞いてこようと思います。ありがとうございました。

<37才男性>

【映画】私が住む大東町からも渡満させられた女子学生の記録「満州に連れ出された女学生～島根県立大東高等女学校皇国農村学徒報国隊の記録～」が出版されていることを映画のチラシをみて初めて知り、更に知りたいと思ってこの映画会に参加させて頂きました。旧満州の情報としては戦後のメディアを通しての関東軍や満鉄等の中国国土の侵略、そして中国の人々に人間の尊厳を徹底的に踏みにじった屈辱たる侵略をしたことは歴史の事実としては知っていました。そしてその線路上に残留孤児の方々おられるという浅い認識でした。満蒙開拓団として大陸の地の開墾に駆り出され、艱難辛苦を舐めさせられ、そして紙切れのごとく見捨てられた人々の悲惨な事実は歳月とともに 風化されようとしているタイムリミットぎりぎりのこの時でした。この映画は、少しでも多くの日本人が忘れてはならない事実なのです。そしてこの過ちを再び犯さないように次世代に伝えなければならない貴重な記録なのです。

【講演】「日本人公墓」という言葉とその意味を初めて耳にしました。そして知りました。

そして「方正」ほうまさという中国の地名を……

あまりにも知らなさ過ぎました。大類先生のお話を聞いてから映画を観させていただき国策当事者の無責任という言葉ではすまされないその行状、その行為は今も形を変えて繰り返されている現実から目をそらせてはいけなと思います。

<60代女性> 加納佳子

【映画】 私は9才の時、内蒙古から引き揚げて帰国しました。昭和20年8月11日ソ連参戦により脱出しようと命を受け着の身着のまま覚悟の引き揚げでした。本日この映画を観、様々な思いに胸が詰まりました。現在、戦争の事実を伝える・九条の会 etc の活動に私の体験を通して努めております。私の年代の方でも知られる方が多い事に驚きます。周恩来の日本に対する混情政策 中国人の広い心を伝えていくことも中国との友好関係を築く上で是非必要に思います。

【講演】 時間があっという間に過ぎた。私から知るべきことが沢山あると知りました。若い方の姿が少なく残念でした。 <73才女性>

【映画】 昨日、2月13日の新聞のイベント欄で知りました。私の生家の隣の男の子が長男なのに開拓団に行ったのを私は女学校の寄宿舎に入ったので知りませんでした。終戦後、満州で凍死したと知りました。

NHK ラジオ深夜便でどなたか生き残られた方のお話を聞きましたが、映像で観て尚々理解できました。私の席の周囲の方々、とにかく一心で雑音は全くありませんでした。

【講演】 実は私は東京(阿佐谷在住の床嶋博子(旧 横山)の母で、羽田先生にお目に掛かれると田舎の自分の手作りの干大根その他を手みやげ持参しましたが残念でした。娘が安来高校生の時「うす墨の桜」が御縁の始まりでその際も色々ありがとうございました。 <80代女性>安来市 1212 番地 横山房子



「愛国主義はエゴイズムだ」

トルストイや北澤博史さんのことなど、思いつくまま

大類 善啓

ろくな番組はないと思っているテレビだが、その中でNHKの教育テレビはなかなかいい番組をやる。つい最近も、ロシアの文豪トルストイの日露戦争当時の発言を特集した番組があり、実に見応えがあり最後まで見てしまった。

「汝、悔い改めよ」

トルストイは、敬虔な仏教徒の国日本と、キリスト教の国である祖国ロシアがなぜ殺し合いをするのかと問う。両国に「汝、悔い改めよ。直ちに戦争を止めなさい」とメッセージを発していたのだ。ドストエフスキーに惹かれた者からすると、トルストイは白樺派の人たちが共感していたこともあってか、なんだか「甘い」ような感じがして『戦争と平和』も途中で放り投げていた。

1960年代の半ば、埴谷雄高云うところの「マルクス主義的アナキズム」と、吉本隆明の政治思想の狭間に何かしら自分のいる場所があるかのように思っていた者にとって、番組の中でも紹介されていたが、トルストイを批判するレーニンの方に、当時は親近感を寄せていた。

トルストイは、殺し合いをやって誰が喜ぶのか、殺し合いをしてどれだけの人々が悲しむだろう、と非戦を進言する手紙を日本やロシアをはじめ世界に発信する。日本の「平民新聞」を主宰する幸徳秋水などもトルストイに共鳴する。しかし、両国とも愛国主義の風潮に押されて戦争をする。

秋水は云う、「自分を愛して他人を憎む、同郷人を愛して他郷人を憎む。それが本当の愛か。自国のために他国を侵すのが＜愛国心＞ならば、それは野獣的天性、迷信、狂熱、虚誇、好戦の心」だ。(早野透氏執筆、朝日新聞「ニッポン人・脈・記、神と国家の間⑧」)「愛国心の跋扈は許さじ」(本誌65頁参照されよ)

日露戦争から第一次大戦へ。レーニンは「帝国主義戦争を内乱に転化せよ」と訴え、トロツキーと共にロシア革命を成功に導いた。そのロシア革命もスターリンによって歪められ、「革命は裏切られた」(トロツキー)。今後は、ソ連解体もあって、ますますレーニンよりもトルストイの思想の方に普遍性が出てくるのではないだろうか。番組は、そのトルストイが、「愛国主義はエゴイズムだ」と語ったことを紹介していた。

「愛国主義はエゴイズムである」。まさにそうだ。そう喝破したトルストイの言葉を遅まきながら聞き、トルストイにいたく共感を覚えるのだ。

春節を祝う会と北澤博史さんのこと

方正の会でここ2年ほど司会もやってくれている旧友の森一彦は、寄稿した文章にあるように、「見えなかった者たち」という視点を提供している。(31頁)

普通だとなかなか「見えなかった人々」が大勢いらっしやるのだ。改めてそう思ったのは、奥村正雄さんに誘われ、千葉での帰国者の春節を祝う会に出て多くの「残留婦人や残留孤児」だった人たち、そしてその方々を支援する人たちが集まっているのを見たからだ。実は、「見えなかった人々」ではなく、「見ようとしないう人」がまた多いのかもしれない。

1953年、18歳の時、中国から引揚げてきた北澤博史さんは帰国後、ある有名ホテルに勤務するホテルマンだった。私の記憶の間違いがなければ、北澤さんはその勤めている間、周囲の人たちに、中国から引揚げてきたことを決して話さなかったという。北澤さんも「見えなかった人」のひとりだったのではないかな。そんな思いがする。

その北澤さんが亡くなられた。2月、高良真木さんからお電話をいただき、訃報を知った。北澤さんがどういうきっかけで、方正の会と繋がったのかは正確には思い出せない。しかし総会にも顔を出していただいたし、2度ほどお会いしたいと言って事務所に来られたことがある。



巻末の本の紹介頁に何度か、ご著書『二つの祖国—ある中国残留孤児の証言』を紹介したことがある。北澤さんは、1935年（昭和10年）に、長野県上伊那郡赤穂村で生まれ、1940年5月両親に連れられて、満州信濃村に入植された。日 中国語勉強会の仲間と、右端北澤さん本の敗戦は容赦なく北澤さんの運命を翻弄し、孤児になってしまった。

『二つの祖国』の中で沢木正一という名前で表現されている主人公は、言葉に尽くせないほど惨めで非道、怒りの感情を味わう。が、そんな感情を抑制するかのよう、北澤さんは淡々と描いている。

追悼の文章を書いていた高良真木さんが言うように、たくさんのスケッチ画も凄惨がない。誤解を恐れずにいえば、どこことなくユーモアがにじみ出てくるような雰囲気だ。

北澤さんは自分が体験したことを、後の世代の人たちにどうしても伝えておかなければいけないという強い思いがあった。仕事を終えた後、自宅で少しずつ文章を書いていた。廣子夫人は何を書いているのかは知らなかったが、その姿を記憶されている。そうして定年退職して6年後、『二つの祖国』を自費出版された。お金はかかったが、夫人は家族を養ってくれた北澤さんの思いを実現するために温かく見守った。

今手元に『二つの祖国』が何部かある。どうぞ会のために自由に使ってほしい、売れてもお金は、会の方で使ってほしいと言われていた。

160頁ほどの小さい本である。お読みになりたい方は、ご一報いただければお送りする。北澤さんには08年5月発行の「星火方正」6号に寄稿していただいた。その文章「身も心も丸裸」を、北澤さんを偲んで掲載する。北澤博史さん、安らかに。再見。

(おおい・よしひろ：方正友好交流の会 事務局長)

愛国心の跋扈は許さじ

神と国家の間 ⑧

jinmyaku@asahi.com **人・脈・記**



⑤クリスティーヌ・レヴィさん ⑥幸徳秋水

2008年、パリで、日本の本2冊の仏訳が出版された。幸徳秋水の「廿世紀之怪物 帝國主義」と中江兆民「三酔人経綸問答」である。訳者は、日本研究者クリスティーヌ・レヴィ(55)。東京・恵比寿の日仏会館に、彼女を訪ねた。

秋水の「帝國主義」の表紙、中国の虎の絵みたくで変ですねえ。「そうねえ。でも私、不満に思っていないの。ほら、毛沢東が『帝國主義は張子の虎』と発言したじゃないですか」

クリスティーヌは1981年、日本に留学、戦後の労働運動を研究した。「戦前にさかのぼったら、秋水や堺利彦の『平民新聞』、遠く自由民権の中江兆民を発見したの」。諸橋大漢和辞典をひきつつ、明治の日本語を訳したのだった。

「愛国心」ならば、それは「野獸的天性、迷信、狂熱、虚誇、好戦の心」である。秋水は嘸う。「国民の膏血を絞って軍備を拡張、国家のためなりと。愛国心発揚は頼もしきかな」クリスティーヌは秋水の慧眼を感じた。この13年後、欧州の労働者の「インターナシヨナ



ル」は「愛国心」をおおられ分断され、第1次大戦で互いに殺しあうことになったから。

なぜクリスティーヌが「愛国心」を問題とするか、彼女の家族史を聞いてわかった。「レヴィという名はユダヤ系の名前なんです」

祖父はアルザス生まれ、中国・北京で宝石商をした。1937年、12歳だった父アンドレとその兄ジャックは、祖父とともにフランスに帰国。だが、第2次大戦が始まって、ヒトラーのドイツがフランスを占領、アンドレとジャックはレジスタンスに加わった。そんなある日、兄のジャックは大学受験にでかけたまま行方不明になる。

「ジャック伯父さんの消息がわかったのは、まだそんな前ではないんです」とクリスティーヌ。ジャックは偽の身分証明書と受験用の本物を持っていて、列車の中でゲシュタポに捕まった。送られた先はアウシュビッツ収容所。「インテリ系の仕事の者は」と問われて手を挙げたら、翌日にはガス室へ。「学生、弁護士、医者をまず殺



エミール・ゾラ

⑦「悪魔島へ送られるドレフュス」の絵
⑧大佛次郎ノンフィクション全集から



悪魔島へ送られるドレフュス

した。ナチスは反ユダヤインテリだったんです」戦後、アンドレは中国研究者になりベトナム、日本、香港に滞在、いまはポルドーに住む。母アンナはノルウェー人でサンクリットの研究者。クリスティーヌも父に従って転々、そしてパリで歴史と日本語を学ぶ。彼女が「愛国心の跋扈を許さべからず」と書いた秋水をよみがえらせたかったのは、レヴィ家の歴史があったからだろう。

来年は、大逆事件で幸徳秋水が処刑されてから100年。クリスティーヌは「大逆事件とドレフュス事件」をめぐる日仏シンポジウムを開きたい。

1894年、フランス陸軍のユダヤ人の砲兵大尉ドレフュスがドイツのスパイの疑いで逮捕され、南米ギアナの悪魔島に流刑になる。真犯人は別の少佐とわかる。だが、「陸軍の名誉」がそれを隠蔽する。作家エミール・ゾラが「余は弾劾する」を書いてドレフュスの再審に立ち上がった。「反ユダヤ」の大衆は「ゾラを倒せ」と騒ぐ。1906年、ようやくドレフュスは無罪になる。

「フランスは内戦に近い状況でした。大逆事件は、軍部と裁判が結んで弾圧してタブーにしてしまった」とクリスティーヌ。シンポジウムで語りたいことは、国家とは、正義とは、正義を貫く勇氣とは……。

語り続け、伝えつづけ

——北澤博史さんを悼む——

高良 真木

『二つの祖国—ある中国残留孤児の証言』の著者・北澤博史さんが2月24日、小田原の病院で亡くなった。昨年の春頃から調子が良くないと伺っていたが、入退院をくりかえし、とうとう逝かれてしまった。

1940年、5歳の北澤博史少年は、両親と姉二人、第三人といっしょに満洲信濃村開拓地に入植した。

1945年4月、母病死、7月には父が召集された。42歳の老兵は戦うことさえなく、シベリアに抑留された。8月の日本敗戦、14歳の長姉を頭に、孤児となった6人のこどもたちを襲った苛酷な運命—地元民衆の襲撃、引揚げ船が来るという松花江岸の方正への逃避行、飢えと寒さに冒されて下の弟を失い、たまりかねて捨ててきた開拓地へ、極寒の大晦日、生き残った開拓民と戻り、身を寄せたもとの使用人の手から、姉弟バラバラに売られてゆき、8年の歳月を経て、ようやく日本に帰りつく。(二人の姉が中国人の夫と子供たち、またその子たちと帰国するまでには更に数十年の歳月が費やされた)

『二つの祖国』に通底するのは、開拓民、とりわけ子供たちの受難の理不尽さである。満洲に行けば広大な土地が手に入ると言われて行った先の“開拓地”は、実は中国農民が耕作した畑地であり、二束三文で買いあげた土地から農民たちは追い払われていたのだ。開拓団のこどもたちはその事実を知る由もなかったばかりか、学校では満州国の国旗を描かされ、日満漢蒙韓五族協和の国と教えられていた。なぜ開拓民—日本人だけが難民となって追い立てられるのか？ こどもたちは日本国からも日本軍からも見捨てられたばかりか、身に覚えのないその罪業をも背負わされ、“日本鬼子”とのしられて、生きなければならなかった。

国に捨てられ、言葉を奪われた状況の中でも、孤児たちは「子供ながら見るべきものは見ていた。それは何が正しくて、何が正しくないのか、変貌していく大人たちの態度から、浪費や怠け、嘘つきや追従など、真似てはいけないことを見て学び、保身につなげ、孤児たちは必死に生きのびたのだった。

『二つの祖国』に添えられた109枚の挿絵には、不思議に凄惨さが無い。道端に石ころのように重なりあって捨てられている子供たち、「拾われて、売られて、また捨てられて・・・生きていれば、きっと、いつか、どこかで逢える・・・」。山中の集団自決、というより銃殺だった・・・「死んで魂だけ連れて帰るからな・・・」「祖国に帰ったら、必ず伝えておくからな・・・」画面から立ちあがってくるのは、生きとし生けるものへの、切ないまでのいとおしさである。

戦争のことなど知らない、忘れてしまいたい、そう思っている人が多いことを北澤さんは知っている。それでもなお、半世紀前におこった惨事を語りつづけ、伝えつづけていかなければならない、と言う。生きて帰れなかった孤児たちの魂の声を、あなたは語り、伝え続けた。

北澤博史さん、いま語り終えたあなたの安らかな魂に、心からありがとう、申し上げて、永のお別れと致します。

(こうら・まき：画家、1930年生れ。1953年コペンハーゲンでの第2回世界婦人大会に出席後、ソ連、中国を訪問。1966年以後、画業の傍ら、日中友好運動に携わる。現在、日中友好神奈川県婦人連絡会会長、神奈川県日中友好協会副会長)

身も心もまる裸

北澤博史

自分の国を守ることであるのなら国民の犠牲はつきものである。戦前の大人達は、国の行いの良し悪しは別として、みんなそうやって行動していたようだ。

私が五歳で満州へ連れて行かれた昭和十五年ごろは、戦争のため日本の経済は貧しかったという。戦争に勝って国をよくしよう、そのために、日本は満州を侵略し経済を立て直しをしようと思いついたらしい。

「満州は日本の生命線」とまで言いきった満鉄の総裁、国策として満州の大地に行くのであるからと、軍を信頼し、満州に憧れた日本国民の声。

昭和十年、康德二年に辛亥革命を起こした孫文は、腐敗しきっていた清王朝の溥儀を紫禁城から追放してしまった。溥儀さんはそのとき天津に逃れた。その時以来、一般市民の生活をしていただけと聞く。そこへ日本軍が溥儀さんを訪ねて、満州国を造りませんかという、願ってもない提案に溥儀さんは同意した。そして紫禁城に戻り、復辟をはたすためでもあったのだが、日本は侵略者でないことを外に宣伝しながら、満州国を建立し、その全土を植民地にする思惑があった。

日本は、満州国の皇帝に溥儀さんを即位させた。溥儀は、皇帝とは名ばかり、傀儡政権のもとで、日本の国策に利用されているだけだった。そればかりか中国は、国民党軍、奉天軍、蒙古軍、共産党軍などと内戦状態にあり、国民の士気は乱れていた。あるとき日本の某大学で医学を学んでいた魯迅さんは、中国の映画を見て気づいたという。医者になって一人の病人を治すより、作家になって十億の民の精神の治療の方が大切と考え、国に戻って文筆活動を始めた話は有名だ。

日本軍部の手による奉天軍の張作霖爆殺事件以来、日本軍は信頼を失い、西安においては、蒋介石の軍門に降った張作霖の子息、張学良が蒋介石を軟禁、反乱を起こした。それを知った共産党の周恩来が西安に飛んだ。西安事件である。周恩来は張学良を説得し、お互いに内戦を止めて、国家統一のため、日本軍と戦うことになる。抗日戦である。

日本は、治安の悪い中国東北部・満州へ食糧増産、祖国防衛とあって、武装開拓移民を送り込んで行った。農地は現地農民のものを奪い、地主を小作人として雇い入れた開拓地もあった。私が物心のついたころ、中国人は米を食べない民族だと思っていた。そんなある日、父に向かって、「お父さん、中国人って人間？」と聞くと、「そうだよ、立派な国の民族だよ」と言った。どこの国の民族なんだろうかと、わからないことが多かった。

昭和十九年、私は小学校四年生だった。上には高等科一年生と小学校五年生の二人の姉に、下には一年生と、五歳と二歳の第三人の六人姉弟だった。母はこの年の秋になって、体調が悪くなり、四キロほど離れている学校近くの診療所に入院することになった。

母のいない家は、急に暗くて侘びしげな村の一軒家だと周囲の人から見られるようになり、同情の言葉も聞かされるようになっていくのが辛かった。

そのころの学校の授業時といえば軍歌ばかりで、団員の出征を見送るたびに、学童に涙の絶える日はなかった。

昭和二十年の四月、野原には青草の芽が一面目立つようになり、ナズナ、ミツバなどの摘み草の季節がやってきた。母は一目、澄みきった春の景色を眺めたかっと思ったようだが、願いもむなしく三十四歳でこの世を去ってしまった。さぞかし無念だったと思う。野良仕事の経験もなかったが、満州に行けば王道の道がひらけると思ったのだ。

戦況の悪化とともに兵役年齢が十五歳以上、四十五歳となった。父にも赤紙が来るのではないか。六人の子供を見つめ、不安な日々を過ごしているうち、七月に赤紙の召集令状がきた。軍では厳しい掟を守らなければならない。

開拓移民には、主婦、老人、子供たちでは役に立たない戦場の予感がしてきたのである。ソ満国境周辺に配置されている開拓民に対して、満州はお前たちが守れと言われ、留守家族の主婦には、国防婦人会なるものを結成し、竹槍の訓練が強要されるようになった。

八月になった。ソ連軍が攻めてくるから村から避難することになった、と親戚のおばさんが言ってきた。戦争に敗けたとは言わなかった。

戦争が終わって、わたくしたちが内地に帰る日がやってきた。戦地に行った父も帰ってくるかも知れない。姉弟は期待して待っていた。

翌朝、村を出るため道路に出て学校の方を見ると、すごい勢いで火の手が上がっているのが見えた。電話も通じない。人のざわめき声が聞こえて来た。団全員は集合場所へ急いだ。

襲撃、略奪、自殺者が出る。開拓団の本部や学校の男子職員はソ連に連行されたい。難民となって一週間も経たないうちに、大人達の態度が豹変していくのを見た。頼りにしていたおばさんも行方不明になってしまった。戦争に負けたということは国籍のない民族になったことになる。

日本に帰るため、ある団はハルピンをめざし、われわれの団は関東軍の駐屯地のある松花江をめざして歩き始めた。途中、山へ避難し、自決した団員も二百名を超える。

神国と教えられた日本人の姿は無惨にも地獄に落ちたのだ。五族協和、日、満、蒙、朝、漢とはいったいどこから出た話だったのか、五十六種族も民族を持っている中国である。

五族でさえ抗日の案内役をつとめた、最悪の敵に変貌した。何がそうさせたのか。武力によって奪った農地だからである。方正県にある松花江に引き揚げ船が来るかもしれない。軍が守ってくれるかも知れない。難民の願いは軍部にとどくどころか、裏切られていたのに気づくべきだったが、どうにもならない。飢餓と伝染病におかされて死んで行くだけ。生き恥をさらすな、お国のために死んで行くのは国民の美德だと思わされていたが、収容所の難民は、生きて祖国に帰りたいという望みを捨てきれず、満州全土から集まってきた。

十月になった。蟬のように黒く痩せ細った弟が死んだときは、一メートルほど地面を掘って籠を掛けて埋葬できたが、その後は、予め予想した死者のためにと、相当広くて深い埋葬用の穴が二カ所用意された。みんな夏服のままだった。厳しい寒さの中、死体は積み重なり、おまけに身ぐるみはがされ、雪吹雪にさらされたままとなった。収容者八千名、死者五千名と中和鎮の文集に記されている。

それから十数年後、中国人民政府によって罪のない開拓移民家族の慰霊碑が建立された。これは日本残留婦人の願いでもあった。加害者の墓を被害者の国に守らせている。私はこの事実を日本国民に知ってもらうためにこの手記を書いた。

《ハルピン便り》

アメリカ留学生と養母と

石 金楷

(1) 養母チームが訪日の予定

春節のあとに行われた2010年第1回例会で、残留孤児の養母・李叔蘭がまた日本へ旅行したいという希望をのべました。連絡会では、まだ未確定ですが、この養母の晩年の希望を叶えてあげるため、5月末もしくは6月初めに「養母訪日チーム」（自費）を編成して、日本へ訪問する予定です。メンバーは養父母、孤児、残留婦人の子供、連絡会の責任者という構成です。日程は1週間、東京で2日、千葉県で1日、友好交流を行いたい。その外、東京周辺の観光を考えています。再会の日を待っています。

(2) 王主任が山浦千草さんを接待

2月10日から11日まで、私は方正県に調査に来ている日本人女性・山浦千草さん（アメリカの大学院博士課程に留学中）を連れて方正県政府外事弁公室を訪ねた。王偉新主任と李宝元副主任の暖かい接待を受け、日本から肉親を訪ねてきている人とも交流を行った。中日友好園林を見学した時は、ちょうど降ったばかりの大雪の中で、友好園林全体が一面の銀世界、とても厳粛な気持ちにさせられた。写真を撮ったので送ります。3月2日、山浦千草さんが、丹東市から戻ってこられ、3月3日から2ヶ月間、方正県で調査研究をしたいということです。



銀世界の中の方正日本人公墓

(3) 吉岡稔先生と…

2月23日、ハルピン医科大学第2病院に入院中の干維漢先生を見舞いました。克山病（黒竜江省克山県の風土病）の権威（ハルピン医科大学の終身名誉校長）で、1991年から、日本の著名な糖尿病の専門家・吉岡稔先生（千葉県在住）とともに、連続10余年東北地区の検査や、残留孤児、養父母の健康診断を行ってこられました。88歳の干先生は5年前に脳出血で倒れられ、国内の著名な専門家らの治療を受けましたが、自分で体を動かすことも言葉を発することもできず、飲食も鼻から入れる、という状態です。53歳の長男が日本から帰国、昼は日本語を教え、夜は父親を介護するという毎日を過ごしていますが、養父母や日本の友人、吉岡稔先生、秋葉二郎さんに感謝を伝えてくれるよう頼まれました。

(奥村正雄訳)

(せき・きんかい：ハルピン養父母連絡会事務局長)

収集されていない元満洲開拓団員の遺骨

宮下 春男

満洲開拓団員のソ連軍侵攻戦争による犠牲者

「満洲国」に国策として送り込まれた農業開拓団は、計画では昭和 20（1945）年時点で総数約 1200 団、約 32 万人の規模であるが、実際に送り出されたのは約 27 万人程度と言われている。「満洲開拓史」（昭和 41 年刊、同史刊行会）によれば、昭和 25（1950）年 10 月に外務省が各県と開拓民自興会県支部を通じて調査した、20 年 8 月 9 日ソ連軍侵攻から 21 年 12 月 25 日までに葫蘆島（ころとう）経由遣送終了までの在籍者は 241,160 名であったが、約 10%の調査未了の開拓団があったという。

その後に判明した資料や昭和 28（1953）年の集団帰国者等調査から、昭和 31（1956）年時点では満洲開拓団在籍者 27 万人、開戦時応召者 47 千名、開戦時在団者 223 千名としている。また開拓民の死亡者は 78,500 人で戦闘又は自決によるもの 11,520 人、病死等 66,980 人で、敗戦時の在満邦人は約 155 万人（関東州在住 25 万人を含む）のうち開拓民関係は 27 万人（17%）、敗戦による邦人死亡者は全満で 17 万 6 千人に上がるが、開拓民の死亡者は約 8 万人であり、在満邦人の 17%に過ぎない開拓民がその犠牲において約 45%を占めていることは、敗戦後において開拓団関係者が如何に悲惨な条件の下に置かれていたかを物語るものであると記述している（同書 p 437）。

筆者が「満洲開拓史」等の記述から整理した遭難記録を付表に掲げるが 8 月 9 日から始まり 10 月下旬に至るまで、開拓団現地で或いは避難途上の各地で襲撃を受けて我国の歴史の前例にない苦しみの中で団員・家族が死亡させられた。その数字は 12 千人を超えている。

避難時の開拓団の遭難状況をいち早く纏めて公刊されたのは本年 1 月に亡くなられた角田房子さんの「墓標なき八万の死者－満蒙開拓団の壊滅」（昭和 42 年 11 月刊、昭和 51 年 3 月中公文庫）ではなかろうか。旧東安省密山県入植の第五次黒台信濃村開拓団（長野県送出）の事跡をベースに 10 数団に上る開拓団避難の行程を描き、特に旧東安省宝清県入植の 7 個の開拓団に係る「佐渡団跡事件」、吉林省松原市扶余県の五家站来民村開拓団の集団自決や旧黒河省孫克県の大青森開拓団（青森、五戸、尾上団の総合名称）が北緯 48 度、東経 128 度という興安嶺山中に残置し結果として遺棄された 90 数人（106 人）のことども、さらに方正収容所や山本滋照師に加え戦後の状況にも触れられている。

また、単一の開拓団については中村雪子さんの労作である「麻山事件」（1983 年 3 月、草思社）であろう。旧東安省鶏寧県から避難行を続けていた第 4 次哈達河開拓団は前後をソ連軍に包囲され、斬込隊約 37 名を残して団長以下 465 名が麻山の谷で自決したのである（その後自決現場から少年、少女 7 名が助け出されている）。遭難の詳細は中村さんの労作を見ていただくとして、この旧哈達河開拓団が昭和 57（1982）年 8 月に訪中団を組織し団跡地までは行ったが、麻山は訪問不可であった（この時は中村さんが同行され、それによると豪雨による道路不通が理由とか）。58（1983）年の第 2 次訪中団がようやく麻山を訪ねることが出来たが時間は 30 分に限定、写真撮影不可という条件であった。現地は灌木が生茂り、普通の野山と変わらない状況だったが、草を掻き分け土を手で掘ると白骨が出てくる、なんと哀れなことかと皆が声を出して泣いた。59（1984）年 10 月の第 3 次訪中時に

は中国側で 3 箇所の遺骨を収集してくれており、それを受け取り棺に納め鶏西市火葬場で灰にして骨箱 2 つに納め、哈達河共同墓地用と方正分とに分けたと訪中された元団員の納富善蔵氏書いている（平和の礎、第 5 巻（財）平和祈念特別基金刊）。

中国唯一の日本人公墓

ハルピン市方正県には「方正地区日本人公墓」と並んで「麻山地区日本人公墓」が建立されていることは衆知のことであり、毎年日本から多くの参拝団が訪れている。また本誌「星火方正」誌はこの公墓維持のために活動し発行されていると承知している。この方正地区日本人公墓は 1964（S39）年 10 月に建立されたが、建立の経緯は松田ちえという残留婦人の熱意と行動があり、それを受けた中国政府が、日本側からの働きかけでなく、自主的に建立したものであり、この一帯は中日友好園林として柵で囲われ維持管理されている。

「麻山地区日本人公墓」建立の由来については『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』（平成 15(2003)年 4 月発行、(株)東洋医学舎)に奥村正雄氏が公墓建立の経緯を詳細に書かれており、王鳳山編著の文献引用として「1984（S59）年 9 月 18 日に至って日本側が省(黒竜江省)外事弁公室領事部と語り鶏西市麻山西側に在った 530 体の日本開拓民の遺骨を方正地区日本人公墓に移葬し、別に「麻山地区日本人公墓」を建て、同じ規格で石碑も建てられた。1984（S59）年 10 月 19 日、日本国哈達河友好訪中団一行 31 名は、団長石山博一、顧問金丸千尋引率の下に方正県の『中国の日本人公墓』に来て「麻山地区日本人公墓」の遺骨に対し慰霊祭式典を厳修した」とある。麻山地区の遺骨収集については金丸氏の尽力で実現したものとあるから、或いは王氏のいう“日本側”とは金丸氏側だったのだろうか。なお、金丸氏については前掲「風雪に耐えた・・・」に詳述されている。

「方正地区日本人公墓」は、昭和 20（1945）年 8 月 9 日以降に各地から避難して方正県に辿り着き収容所に収容されてから、この地で病死した約 5 千名の遺骨を弔ったものであり、一方、「麻山地区日本人公墓」は避難する途上の鶏西市麻山の谷で遭難自決した哈達河開拓団の犠牲者約 5 百名の遺骨を収集してこの地に弔ったものである。そしてこれが中国に存在する唯一といわれる二つの日本人公墓なのである。ある意味では満洲開拓団員とその家族（以下団員）の亡くなった約 8 万人及びその中で避難中に亡くなった約 13 千人を代表した公墓が同じ場所に建立されているとも言え、中国政府の配慮を感じる。或いは慰霊の象徴としてと書くべきであろうか。この中には一般邦人も含まれている筈だが、殆どが開拓団員なので、開拓団として話をすすめる。象徴とはいえ筆者の心には 8 万人の中の 5 千人、13 千人の中の 5 百人という数字が渦巻いていて、トゲが刺さったように胸が痛むのである。そのトゲとはソ連軍侵攻を知り、退避するか或いは永住の地と決めた場所で死別するか、または避難すると決めて始めた避難途上で犠牲となった 13 千人の人々、付表に示すように多くの場所で、後に“佐渡団跡事件”、“宝清事件”、“韓家事件”等と名づけられたように多くの犠牲者をだした開拓団も少なくはない。これら犠牲者の遺骨はどうなっているのだろうかという思いが、胸がトゲに刺されたように感じるのである。

日中国交正常化後の遺骨帰還と慰霊参拝

昭和 47（1972）年 9 月の日中国交正常化により、この日以後に訪中した元開拓団員のなかで遺骨収集に係る最も早く訪中されたのは次に述べる旧三江省樺川県に入植の第 13 次日

高見開拓団団長武藤竜三氏であろう。それ以後には多くの訪中団が旧満洲の地を訪れていることがうかがえる。吉林省舒蘭県（現市）に入植していた集合 1 次水曲柳開拓団（長野県送出）は昭和 61（1986）年 8 月に墓参団が訪中し団跡を訪れたら、かつての墓地は畑になっていたという（平和の礎、IX）。旧竜江省富裕県に入植していた第 8 次亜州白山郷開拓団（石川県送出）が平成 7（1995）年に訪中した時、現地に「日中友誼記念碑」を建立したことが報告されている。が遺骨を収集したか或いは遺骨収集目的で訪中したとの報告は日高見開拓団を除いては見当たらない。犠牲者を出された元開拓団はどのようにされているのだろうか。不勉強ながら気になる場所である。蛇足だが、戦後に開拓団関係者として最も早く訪中されたのは昭和 39（1964）年秋に日本の仏教会代表団の一員として、中国人捕虜の遺骨 62 柱を中国に届けた山本慈昭師だったのではなかろうか。

戦後、政府ベースで主として戦没軍人を目的に太平洋諸島、ミャンマ(旧ビルマ)、インド、タイ、モンゴル、ソ連等へは遺骨収集団が派遣されて遺骨収集を行ったことが報告されている。「引揚と援護の歩み 30 年」(昭和 52 年 10 月、厚生省)によれば、「旧満洲地区での死亡者約 25 万名については、中国紅十字会等によって収集保管されていた日本人遺骨 899 柱が昭和 48(1973)年 6 月に政府民間合同の遺骨送還訪中団によって日本に持ち帰られた。中国側は、これをもって遺骨の問題は終わったとしているが、政府としては残余の遺骨の問題を解決するため、中国の国民感情等の背景も十分考慮し、慎重に対処する必要があると考えているところである」(p 315)。と書かれている。

この 899 柱の遺骨が返還された背景は、合田一道氏の著書「死の逃避行－満州開拓団 27 万人」によれば、旧三江省樺川県に第 13 次入植の日高見開拓団団長の武藤竜三氏が同団・秋の宮部落員 41 名が自決した遺骨を収集したいと昭和 23 年以降、「日本政府、中国政府、日本赤十字社、中国紅十字会などに嘆願書を出し続けた。このことが中国紅十字会会長李徳全女史の目に留まり、遺骨を収集したい旨の返事が届いた。そして昭和 41 年 11 月、日中友好協会（正統）本部の訪中団に武藤氏が遺族代表として同行することが決まり、ついに夢が実現すると喜んだのも束の間、中国の文化大革命の嵐にぶつかり延期になってしまった。こうして時は無為に過ぎていったが、昭和 47 年秋、田中角栄総理の訪中でようやく国交の道は開かれ、翌年 6 月、念願の中国の土を踏むことが出来たのである。残念ながら現地の元開拓地まで行くことは許されなかったが、妻子をはじめ開拓団家族の遺骨、そして軍人、一般邦人も合わせて 899 柱の遺骨が訪中団の手に渡され、武藤さんはうち 41 人の遺骨の入った白木の箱をしっかりと抱くことができたのだった。この時のことを武藤さんは感慨をこめて次のように語った。『自決した 41 人は現地の人達が手厚く埋葬してくれていたのです。私達開拓団は心から現地の人達と打ち解けて生活していました。それでああした集団自決に追い込まれた後、現地人が哀れんで冥福を祈ってくれたのです。李徳全女史のはからいで遺骨は発掘され引き取ることが出来ましたが、あちらの人達は、埋葬していた場所は永久に保存し、供養を続け、それを変わらぬ友情の証にしたいので、武藤には心配しないように伝えてくださいと言ってきたのです。30 年も経ってなお変わらぬ情けに、返すお礼の言葉もありません』(同書 383 頁~386 頁)。日高見開拓団の遺骨と同時に旧滨江省木蘭県入植の長野東開拓団 260 人の遺骨が返還され、長野県佐久郡臼田町に声なき帰還をし、遺族全員で分骨したという。これも当時義勇隊開拓団員で現在中国人民解放軍にいる浅川栄さんが、敗戦の混乱期にここを通りがかり開拓団が死滅しているのを目撃、後に

中国政府に申し出て埋葬したものである。このほか遺体に氏名が残っていた吉林省敦化県の群馬開拓団員の4名の遺骨も同時に返還されたという（同書386頁）。

余分なことだが、旧滨江省木蘭県は主として長野県からの入植者が多いが長野東開拓団名は見当たらない。一方「長野県満州開拓史、各団編」によれば「昭和48年6月に中国から27年ぶりに故国に遺骨が帰ってきた。河野開拓団（旧新京特別市）73柱も含まれており」（262頁）とあり、先の文と一致しないが、このことは本題ではない。厚生省の担当課長のコラムにも「遺骨899柱は日中国交正常化前に日本の民間団体や個人が中国紅十字会に書信を送り調査、発掘を依頼していたものである。（中略）日本人遺骨は派遣団が帰国する日に北京空港の貴賓室で引き渡された。遺骨は27箱に分けられて白布に覆われ、墨で発見場所と柱数が書かれていた。引渡し式終了後に簡素な慰霊法要をしたいという希望が、再三の交渉の結果中国側から認められたので、帰国便の日航機に頼んで線香や生花を運んでもらった。慰霊法要は帰国直前、簡素に行われたが、式場の貴賓室一杯になつかしい線香の煙が漂い、899柱の遺骨にとっては実に30年ぶりの日本の香りであった」（援護五十年史。p354）。と合田氏の著書を裏付けている。なお、返還された遺骨899柱は厚生省が主催して昭和48年6月28日厚生省の講堂で「中国死没者追悼式」が行われたという。

友好訪中団という慰霊巡拝団

「援護五十年史」（平成9年3月、厚労省）によれば、『国交正常化以降、外交ルートを通じ中国政府に対して遺骨収集の実施について申し入れたが、中国側は「過去の苦い歴史を思い出させる遺骨収集は行わないほうが良い」との基本姿勢を示した。しかしながら関係遺族等の強い要望があることから昭和54(1979)年12月に訪中した大平正芳総理から華国鋒主席に慰霊行事の実現を要請した。華主席からの原則同意の回答を得て、慰霊巡拝の実施が可能となった。その後の事務的折衝で慰霊巡拝団の名称を「東北地区死没者遺族友好訪中団」、訪問先を瀋陽(旧奉天)、長春(旧新京)及び哈爾濱(はるびん)とし、また慰霊巡拝団は中国の国民感情等を配慮し、屋外における慰霊行事等は一切行わないことを前提に実施することとなった。これにより野呂恭一厚生大臣が団長となり、政府職員7人、遺族代表51人が参加して昭和55(1980)年4月30日から5月9日までの間、中国東北部の3都市にある旧日本人墓地や収容所跡等を巡拝し、中国側との申合せのとおり、現地追悼式はいずれもホテルの会議室で行い、屋外での追悼行事は一切行わなかった。また、合同追悼式は4月30日に北京の日本大使館内で行った。なお、翌昭和56(1981)年からは、関係遺族により巡拝団の名称を「中国東北地区友好訪中団」として毎年各地の慰霊巡拝を行っている』（p371）と記述している。慰霊巡拝の実施に際して担当した厚生省援護局の課長はコラムで次のように述べている「実施に当たっての中国側の条件は、日本政府主催の行事としては今回限りであること、訪問先、慰霊行事の制限（内容は上述のため略）。東北地区3都市における遺跡の訪問先については、日本側から22箇所の資料を中国側に渡して現況調査を依頼していたが、中国側は驚くべき努力によってこれらの全てを発見し、私もこの22箇所を巡回して確認した。「東北地区死没者遺族友好訪中団」と命名された慰霊巡拝団は、昭和55年4月30日訪中したが、中国側のこの行事の成功を願う熱意が随所に感じられ、訪中遺族の感激するところとなった」（同p372）。3都市の区域内とはいえ22箇所の遺跡とは何処だったのだろうか、詳細な説明がない。また「援護五十年史」は平成9年に発行されているが遺骨収集については「30年史」を超える記述はない。県レベルで組織された訪中団では遺骨

収集まではできないのではなかろうか。また、上述の元哈達河開拓団員の訪中団はこのような経緯から組織されたのだろうか。

開拓団と関東軍

満洲開拓団は実質には関東軍の土着の輜重兵の役割と地域の治安対策を負わされていた。昭和 13（1938）年 12 月に関東軍が「国境方面における国防的建設に関する事項」を策定したが、その国防目的に沿うために満洲国政府によって、開拓団の配置を「開拓第一線地帯」、「開拓第二線地帯」及び「開拓第三線地帯」に区分けし、開拓団員をそれぞれ 40%、50%及び 10%の比率で入植させ、小銃などで武装させるなど、意図的に配置・入植させられていたのである。

開拓第一線地帯の開拓団の役割は、国境第一線の軍隊に対する兵站基地、労力、軍馬、兵力の給源、宿泊拠点であり、その地域は間島、牡丹江、東安、三江、黒河、興安北及び興安南の各省（旧地名）を指していた。特に昭和 16 年からは 3 年間の訓練期間を終えた義勇隊開拓団（義開）はこれら国境地帯に多く配置されていた。義開も含めた開拓団員は入植早々から厳しい条件の中で食糧、野菜供出や馬料の提供を行っていた。昭和 20 年に入ると青壮年団員を「根こそぎ動員」召集し、団には老人と婦女子のみにしたのである。

その関東軍は昭和 20（1945）年 1 月には陸軍総参謀本部と協議の上、ソ連が侵攻した場合には新京－大連、新京－図們を結ぶ三角帯の南満の地（全満の五分の一以下の面積）を確保し、総司令部や軍を通化市及び三角帯の中に移して抵抗する作戦を定めていた。そのため 3 月からは国境近くにある各軍司令部を軒並み後退させていたが、これらの動向は「企図秘匿」と称して一切極秘だった。こうして辺境の開拓団員と家族は何も知らされず、見捨てられ、置去りにされていた。8 月 9 日ソ連軍が侵攻を開始するとさらに陸軍総参謀本部からは 10 日に、朝鮮半島を守れ（満洲の地を棄てる）との命令が出されていた。関東軍も戦争が始まっている最中の 10 日には各地前線の部隊に後退を命令していた。

遺骨は避難途上に散乱したままなのでは？

「満洲国史」（昭和 45 年 6 月、同編纂刊行会）によれば、満洲国開拓総局が昭和 20 年 4 月以降に考慮していた開拓団に対する非常措置には次の各事項が含まれていたという。（1）北満辺境の開拓団を浜綏線（ハルピン～綏芬河）以南に移す。（2）応召留守家族を（開拓）団本部に集結させる。（3）8 月末までに僻地の地にある開拓団を併合集結させる。（4）団長を始め幹部の招集免除を関東軍に要請する。というものだが、これが成案になって各地へ連絡されたのは 7 月末で、末端の開拓団にまでは連絡されなかった（各論編 p 841）。結局何の措置もしなかったのである。そのため実際に犠牲者が最も多いのは、永住の地と決心し故郷での土地や財産を処分して、これら第一線地帯と称された北満の国境方面に入植させられた開拓団員とその家族及び辺境の一般邦人だったのである。

昭和 20 年 8 月 9 日、思いもよらないソ連軍侵攻に直面した多くの開拓団は退避する都市をめざして“南下”したが、表に見るように避難途上の多くの地で犠牲となった。個別の団名を挙げては失礼と思うのだが、大青森開拓団の興安嶺山中で残置し結果として遺棄された 106 名の方々の遺骨はどうなったのだろうか。他の地区を含め避難途上でなくなった方々の遺骨収集はその後、進展したのだろうか。遺骨収集団が旧満洲各地を巡ったとは聞

いていないと思っていたが、少なくとも政府ベースでは行われていないことが、これまで述べたことから判明したように思う。元開拓団員が個々に行い得たかどうか。大部分が野ざらしで白骨となり、土に帰っていったのだろうか。しかも満洲開拓団にはもっと大きな問題、中国残留孤児・残留婦人の解決すべき問題が現在に至っている。

本年（2010年）3月15日付け朝日新聞朝刊の声欄に「親捨て、子捨てた満洲避難行」と題した新潟県の80歳の元軍人の方の声が載っており引用させてもらう、「敗戦でソ連軍捕虜となった。ハルビンから無蓋貨車で牡丹江へ送られる途中、横道河子で下ろされ後は徒歩で向かった。峠の途中まで来ると、草履に浴衣の薄着、髪ぼうぼうの盲目の老婆が座っていた。声をかけると「ここで死なせて」と繰り返す。「死ぬ覚悟なら大勢にみとられて逝きなさい、車に乗せていくから」と説得するが聞かない。郷里の祖母の姿を重ね、尚説得するも、ソ連兵のダワイダワイ（早く行け）の銃口には勝てず、膝の上に携行食を置いて別れた。しばらくして5歳くらいの坊やが「お母さん、お母さん」と泣き叫んでいるのに出会った。輜重車に乗せ金平糖を与えて泣きやませ、2キロほど行くと「お母さん」と叫ぶ。見ると若い婦人が無一物で呆然と歩いている。携行食を与えて婦人に坊やを引渡した。戦争はむごい。一日で親捨て、子捨てを目撃しようとは」。この事件は著者がソ連軍の捕虜であるからにはどんなに早くとも8月19日以降の事柄である。ソ連軍が占領した後でまだこのような避難が続けられていたのだ。同時に通過時に遭遇し、過ぎ去って65年にもなろうとする時の記憶が鮮明に浮かぶほどの悲惨な状況だったことに思いを致し胸が痛む。

満洲開拓団に関して、本文では遺骨問題にのみ触れたが、“中国残留孤児・残留婦人、養父母”等のことは現在も継続されている大きな問題なのである。これらの問題が解決されなければ満洲開拓団に関して戦争が終わったとは言えない。角田房子さんは昭和42年に本のあとがきで『「戦争が終わった」という言葉が通年化して久しい今ごろ、私が満蒙開拓団の記録を書こうとするのは「戦争は終わっていない」という私の考え方を一つの方法で実証してみたいと思ったから』と書いておられる。戦後65年になる今も戦争は終わっていない。昭和の戦争で直接戦争に巻き込まれ、大きな犠牲を払ったのは沖縄県民と満洲開拓団員ではなかろうか。沖縄は現在も日本全体の75%を越える米軍基地を抱え、沖縄県民が呻吟している。世界情勢から見て我国の米軍基地、特に沖縄の基地は早く撤去・縮小されなければならないと思う。農民である満洲開拓団は、関東軍と日満両政府に利用された挙句、今に至るも亡き人の遺骨も十分に収集・処理されず、遺棄された残留孤児、残留婦人問題はまだ充分には解決されていない。これら全ては解決されなければならない昭和の歴史課題なのであると筆者は考えている。

付表. 満洲開拓団避難時等の遭難状況一覧

（みやした・はるお：1936年富山県生まれ。1943年満蒙開拓団員の家族として渡満、1953年帰国。1994年通商産業省を退職、宝飾業界を経て、現在無職。昨年（09年8月）「近現代史の検証と北東アジアの未来を展望する旅」に参加。方正公墓を参拝した）

付表 満洲開拓団関係避難時等の遭難状況一覧

資料：満洲開拓史 p430～432の表、説明文、その他資料を集約

1

月日	遭難場所	事由原因	遭難者(人)	被害団名	入植地	送出県	備考
8.9	光開拓団黄泥河子部落	ソ連軍攻撃	約10戸	団13光開拓団	東安省虎林県	長野石川富山	
8.9	牡丹江省東寧河沿満鹿溝弾薬庫等	小銃、手榴弾等による自決	自決約30	東寧農工河沿満鹿溝	牡丹江東寧県河沿満鹿溝	7都県	
8.10	東安省東安駅	火薬爆破<東安駅爆発事件、1000名>	爆死850	団6黒咀子(国礎)	東安省虎林県	石川・富山	<東安駅集積弾薬爆破事件>
8.10	東安省虎林県山中	ソ軍侵攻	自決31	団12東寧農工	牡丹江省東寧県	混成	
8.10	牡丹江省綏陽県八道橋付近	ソ軍攻撃	戦死不明約33	綏芬河訓山崎中隊	牡丹江省綏陽県	混成	
8.11	東安省饒河県永楽屯	ソ軍戦車攻撃<四合屯事件>	死亡約100	義3清溪	東安省饒河県	静岡	
8.11	牡丹江省第777部隊郭稜陣地内	ソ軍侵攻<東寧郭稜陣地事件>	自決50~70	東寧訓練所	牡丹江省東寧県	混成	
8.12	東安省鷄寧付近	土匪襲撃60、ソ軍攻撃168	自決228	団8黒台信濃村	東安省密山県	長野	
8.12	東安省密山県自団部落	満軍反乱、群馬部落49、霞城部落96	自決145	団5永安屯	東安省密山県	25県	避難遅れで襲撃さる
8.12	東安省鷄寧県哈達河	土匪襲撃	自決60	団13千曲郷	東安省密山県	山形	
8.12	東安省宝清県双柳河開拓団	満警反乱	戦死40	団10陽栄庄内	東安省宝清県	山形	
8.13	東安省鷄寧県麻山	ソ軍戦車攻撃<麻山事件>	自決465	団4哈達河	東安省鷄寧県	混成	
8.13	東安省鷄寧県麻山	ソ軍戦車攻撃、柘木部落約120<同上>	自決120	団5永安屯	東安省密山県	25県	
8.13	東安省鷄寧県麻山	ソ軍戦車攻撃<同上>	戦死約90	団13哈達河 南郷村	東安省密山県	宮城	
8.13	東安省宝清街付近	満軍反乱 <宝清事件>	戦死約150	義2義5完達嶺	東安省虎林県	梨岩広	
8.13	東安省宝清街付近	満軍反乱 <宝清事件>	戦死120	団7清和	東安省虎林県	新潟	
8.13	三江省興隆鎮付近	満軍襲撃	戦死不明約60	団12錦星櫛引	三江省富錦県	山形	武装解除応じず
8.13	三江省依蘭県松花江	船沈没	溺死40	団14平安郷	三江省湯原県	京都	
8.14	三江省佳木斯松花江	投身(第1隊12、第3隊16)	自殺28	団9板子房置賜郷	三江省樺川県	山形	救助14名
8.14	三江省福隆駅付近	ソ軍侵攻	戦死不明約193	義5朝日(柿沼中隊)	三江省羅北県	栃木	義2朝日へ補充入植
8.14	東安省宝清街付近	満軍反乱	戦死不明約17	義3五十鈴	東安省虎林県	埼玉三重	
8.14	竜江省洮南西方12km	ソ軍戦車攻撃	戦死52	団12防長郷	竜江省洮南県	山口	
8.15	牡丹江省寧安県団現地	満軍反乱	自決戦死31	義4東海浪	牡丹江省寧安県	長野	8.15~18
8.15	三江省樺川県団現地	土匪襲撃(洋犁片約160、中和屯38)	殺害約198	団8公心集読書村	三江省樺川県	長野	
8.15	三江省樺川県団現地	土匪襲撃	戦死自決77	団8中川村	三江省樺川県	埼玉	
8.16	三江省樺川県中川村付近	満軍反乱	自決160	団7七虎力	三江省樺川県	混成	8.16~17
8.16	三江省樺川県団現地	土匪襲撃(宮城部落81)	自決100	団2千振村	三江省樺川県	混成	
8.16	三江省樺川県団現地	土匪襲撃(土佐郷81、東伊予43)	殺害85	団8柞木台	三江省樺川県	愛媛高知徳島	
8.16	長春市郊外	土匪襲撃	自決83	団13石碑嶺河野村	長春特別市	長野	
8.17	竜江省洮南県双明子	ソ軍威圧、土匪襲撃	戦死自決620	団13興安東京荏原	興安省西科前旗	東京	
8.17	浜江省蘭西県団現地	土匪襲撃	自決299	団13高橋郷	浜江省蘭西県	兵庫	
8.17	吉林省扶余県団現地	土匪襲撃	自決272	団12来民村	吉林省扶余県	熊本	
8.17	吉林省德恵県団現地	土匪襲撃	服毒自決約20	団13高田(3号部落)	吉林省德恵県	広島	
8.17	浜江省阿城県団現地	土匪襲撃撲殺2略奪	爆死自決143	団9四道河豊村	浜江省阿城県	山梨	
8.17	東安省勃利県勃利訓	ソ軍侵攻	戦死自決30	団10大主上房	東安省宝清県	岡山	
8.17	浜江省蕪河県団現地	ソ軍攻撃(殺害22、井戸へ投身約20)	殺害自決約42	団7周家營	浜江省蕪河県	埼玉	
8.17	浜江省蘭西県呼蘭河	暴徒襲撃	投身299	団13高橋村	浜江省蘭西県	兵庫	
8.17	三江省富錦山中	土匪襲撃	自決24	団12王福崗庄内	東安省宝清県	山形	
8.17	三江省佳木斯松花江	投身	投身12	団9板子房置賜郷	三江省樺川県	山形	
8.17	吉林省懷徳県団現地	土匪襲撃、悲観	自決11	合1山路郷	吉林省懷徳県		

2:							
月 日	遭難場所	事由原因	遭難者(人)	被害団名	入植地	送出県	備考
8.18	三江省樺川県団現地	土匪襲撃(秋の宮部落41)	自決45	団13日高見	三江省樺川県	混成	
8.18	三江省樺川県団現地	土匪襲撃	自決381	団9板子房置賜郷	三江省樺川県	山形	宝山開拓団含む
8.18	三江省通河県団現地	ソ軍侵攻、土匪襲撃	自決254	団8小古洞蔘科	三江省通河県	長野	
8.18	三江省樺川県団現地	土匪襲撃服毒	自殺41	団13日高見秋宮部落	三江省樺川県	15県混成	
8.18	浜江省賈島団現地	満軍反乱(全孝村120,今野部落133)	戦死自決253	団8大泉子福富	浜江省賈島	富山・福井	全孝村120,今野部落133
8.18	東安省勃利県万竜開拓団	満軍反乱	自決92	団9索倫河下水内	東安省宝清県	長野	
8.18	吉林省德恵県団現地	土匪襲撃	自決31	団13松花江高田	吉林省德恵県	広島	
8.18	ハルピン郊外忠霊塔下	ソ軍拉致	銃殺32	団12天理村	浜江省阿城県	混成	
8.19	牡丹江省寧安県団現地	満軍反乱、戦死77、自決247	戦死自決324	団9哈達湾	牡丹江省寧安県	秋田	
8.19	三江省樺川県大平鎮	土匪襲撃	戦死32	団8泰阜村	三江省樺川県	長野	
8.19	東安省虎林中猛虎山陣地	ソ軍攻撃窒息死	窒息死約14	団13光	東安省虎林県	長富石	国境最前線団
8.19	錦州省盤山県団現地	ソ軍戦車攻撃(19~20)	自決51	団13興倫	錦州省盤山県	鹿児島	
8.19	吉林省舒蘭県団現地	土匪襲撃	殺害自決38	団13下金馬河世羅	吉林省舒蘭県	広島	
8.19	吉林省舒蘭県団現地	土匪襲撃	自決30	合1舒蘭十勝	吉林省舒蘭県	北海道	
8.19	吉林省舒蘭県団現地	土匪襲撃	自決54	団4開原城子河	吉林省舒蘭県	混成	
8.19	浜江省五常県団現地	武器提出拒否、襲撃(第1部落員)	自決43	団9冲河砺波	浜江省五常県	富山	
8.20	吉林省盤石県煙筒山	土匪襲撃	戦死36	団9駒馬	吉林省盤石県	群馬	
8.20	浜江省賈島団現地	土匪襲撃	戦死自決56	団12財神寄居	浜江省賈島	埼玉	
8.20	興安省阿榮旗団現地	土匪襲撃	戦死4	団10下興発球磨川	興安省阿榮旗	熊本	
8.20	北安省北安県農場現地	ソ連軍攻撃、	戦死6、溺死4	二竜山特設農場	北安省北安県	長野	
8.21	吉林省樺甸県団現地	土匪襲撃	自決36	団7八道河子	吉林省樺甸県	混成	
8.21	三江省通河県団現地	団全員服毒<小古洞蔘科団事件>	死亡約400	団8小古洞蔘科	三江省通河県	長野	
8.22	東安省虎林県虎頭要塞	ソ軍侵攻	戦死33	団13虎頭光	東安省虎林県	混成	
8.22	浜江省葦河県団	土匪襲撃(戦死13、不明7)	戦死不明20	義3、義5三道冲河	浜江省葦河県	混成	
8.22	チチハルへの避難途上	ソ連軍攻撃(ジンギスカン3、豊秋3、他3)	戦死9	義2成吉思汗、義2豊秋	興安省布特哈旗	混成	甘南道路をチチハルへ
8.23	三江省樺川県弥栄団山中	土匪襲撃	自決29	団12王福崗庄内	東安省宝清県	山形	
8.23	北安省綏稜県団現地	土匪襲撃	戦死18	団13堺郷	北安省綏稜県	大阪	
8.24	三江省依蘭県大平鎮	ソ軍侵攻(戦死44)	戦死自決73	団12王福崗庄内	東安省宝清県	山形	
8.24	北安省克東県団現地	土匪襲撃(長岡部落長以下12)	自決12	団13前橋郷	北安省克東県	群馬	
8.25	北安省德都県団現地	ソ軍侵攻、土匪襲撃(殆ど全滅)	自決216	団9鳳凰	北安省德都県	岐阜	
8.25	竜江省洮南街西方20km	ソ軍戦車隊攻撃	戦死自決469	団12興安仏立	興安省西科前旗	東京	
8.26	吉林省敦化県団付近	土匪襲撃	戦死者7	義1、義5日高	吉林省敦化県	混成	
8.27	東安省勃利県佐渡開拓団	ソ軍攻撃<佐渡開拓団跡事件>	戦死420	団9万金山高社郷	東安省宝清県	長野	全体戦死1464名
8.27	東安省勃利県佐渡開拓団	ソ軍攻撃<佐渡開拓団跡事件>	戦死294	団9尖山更科郷	東安省宝清県	長野	ソ連軍不時着機焼却の報復
8.27	東安省勃利県佐渡開拓団	ソ軍攻撃<同上>	戦死212	団10東索倫埴科郷	東安省宝清県	長野	
8.27	東安省勃利県佐渡開拓団	ソ軍攻撃<同上>	戦死100	団12東横林南信濃	東安省宝清県	長野	
8.27	東安省勃利県佐渡開拓団	ソ軍攻撃<同上>	戦死43	団12南哈嗎笠間	東安省宝清県	茨城	
8.27	東安省勃利県佐渡開拓団	ソ軍攻撃<同上>	戦死24	団13北哈嗎阿知郷	東安省宝清県	長野	
8.27	東安省勃利県佐渡開拓団	ソ軍攻撃<同上>	戦死371	団7清和	東安省虎林県	混成	
8.27	竜江省富裕県団現地	土匪襲撃、学校に入り放火自決	自決356	団8巫州	竜江省富裕県	石川	
8.27	竜江省富裕県団現地	満軍反乱	自決120	団8班代	竜江省富裕県	石川	
8.27	北安省嫩江県団現地	ソ軍侵攻	自決15	義2弥千代	北安省嫩江県	混成	
8.29	浜江省延寿県団現地	土匪襲撃	自決66	団10李家小県	浜江省延寿県	長野	趙砲屯部落全員

残留日本女性ドラマ 好調



多鶴（右）が老夫婦の次男夫婦と食事する
「小姨多鶴」の一場面＝大連天歌伝媒提供

中国対日観変える視聴者も

【瀋陽＝大木聖馬】第2次大戦後に中国に残留した日本人女性の半生を描いた連続テレビドラマ「小姨多鶴」（多鶴おばさん）が、中国国内で人気を呼んでいる。日本人は、侵略者として扱われることが多い中、戦争被害者として描かれた異色の作品で、ドラマを通じて対日観を変える視聴者も多い。

ドラマは、19歳の多鶴が終戦直後、黒竜江省の開拓団から日本に引き揚げる途中で家族とはぐれ、中国人の老夫婦に命を救われるところから始まる。多鶴は、老夫婦に請われ、日本兵に追われてがけから転落して子どもを産めなくなった老夫婦の次男の嫁に代わり、3人を出産。子どもたちは、「おばさん」として接する。日本人であることを隠すため口がきけないふりをし、日中は採石場で働き、仕事の合間には授乳で自宅に戻るといった苦勞の日々を送る——とい

う筋書きだ。日本人開拓団が自決に追い込まれたり、引き揚げ途中で中国人に襲われたりする場面も盛り込まれ、老夫婦の夫が「日本人もひどい目に遭っていたのか」とつぶやくなど、日本人に同情的な場面が多い。原作は、米国在住の人気女性作家、戯歌者さん(52)の同名の小説。日本での取材を元に2008年に出版され、中国小説学会の最優秀作品にも選ばれた。中国国内で話題作を多数手がける大連市の制作会社などがドラマ化し、09年10月末、浙江省

「ともに戦争で傷ついた」

で最初に放映され、高視聴率を記録。その後、40以上の放送局で放映されている。中国ではここ数年、日本を侵略国として描いた戦争ドラマが多数制作され、中国の愛国主義教育にも利用されてきた。これに対し、「小姨多鶴」は、一般の日本人を戦争被害者という立場から描くことで、視聴者に対日意識を見直す機会を与えている、との指摘もある。ネット上に書き込まれたドラマの感想には、「戦争は中日双方の国民に害をもたらしていた」などと共感を寄せる声も多い。

日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～ 第6回

大類 善啓

《前回までの粗筋》 新中国の誕生は、華僑たちの帰国熱を促し、韓も1953年第1回の帰国船に学生代表として中国に行き、天津で廖承志に面会した。その時廖は、韓に中国に帰国せず「日本に残り、華僑向けの新聞を出せ」と指示。日本に戻った韓は、『大地報』という新聞を創刊した。日中関係は徐々に発展、韓は通訳などでも大活躍。1970年には訪中し、新しい中国を見る。文化大革命の時期は、日本にいる華僑とはいえ様々な問題にぶつかった。その混乱のなか、中国にとって必要なのは日本の先進的な科学技術や工業技術ではないかと思い、『日本工業技術』という雑誌の刊行を思いつく。横やりも入ったがなんとか発行にこぎつけた。イデオロギーや思想ではなく、現実を見ていこうという動きがやっと芽生えてきた。

4.2 日本の左翼とは一線を画す

今回は少しばかり時間を戻し、日本の戦後状況を韓慶愈がどう思い、どのように関わってきたのか、今までやや書ききれていなかった部分を補っていききたい。

1949年、新中国が激しい国共内戦を経て成立した。中国共産党の勝利という現実、日本にも少なからず大きな影響を与えた。とりわけ左翼運動に対する影響は大きかった。しかし、世界の共産主義運動の中心はまだ、ソ連が主導的な役割を果たしていた。そのソ連の絶対的な指導者だったスターリンが1953年に死亡した。留日（在日）中国学生会の主席をしていた韓は、東京港区の狸穴にあったソ連代表部に弔問に出かけた。左翼の中では、スターリンがまだ神様のように思われていた時代である。韓にも、スターリンはやはり、絶対的な存在に映っていた。

日本共産党は、新中国の影響もあったのか、激しい戦術を展開していた。その一つが山村工作隊だ。毛沢東の中国共産党が農村を拠点としているのに倣い、武装闘争を志向したのだ。韓が在籍した東京工業大学の同級生の中にも、大学を中退して山村工作隊に入った人もいた。知り合いではない。韓はとりたてて共鳴するわけでもなく、「中退などしなくて卒業してからでも間に合うのに。惜しいことをしたな」と思った程度だった。

1954年10月、李徳全を団長とする初の訪日代表団「中国紅十字会代表団」の副団長として来日した廖承志は、華僑たち600名ほどが集まった東京での歓迎会の席上、「留日華僑の基本的態度」という挨拶を行った。その中で、華僑の基本的態度は、①外国の政治問題には絶対関らないこと。②お互いに団結して助け合うこと。③外国の風俗、習慣になじみ、その国の法律をよく守ること。④外国の長所をよく学び知識を豊富にすること、と語った。この時の挨拶は、出席した華僑たちに深い感銘を与え、多くの教訓を残した。

また神戸の歓迎僑民大会でも「華僑は現地の政治問題に介入しないことが大切です。このことに違った意見をもつ人があるかもしれませんが、こういう態度でやってはじめて、現地の住民と友好的にやっていけるのではないのでしょうか」と語っている。

こういう考えは、韓の頭にも十分入っていたから、日本の左翼運動に対しても、とりわけ深入りすることはなかった。廖承志が来日する1年前にも、内々に党（日本共産党）から離れるように言われていた。

1955年、日本共産党は党大会で、山村工作隊などの過激な戦術を取った路線を、極左冒険主義として総括し、より大衆に密着するように路線を転換した。

こういった日本共産党の動きには、無関心といってもいいほど問題意識もなく、韓に言わせればそれは、「雲の上の話」だった。

しかし、山村工作隊の活動と称して、5、6人のグループで、米軍の立川基地周辺や砂川地域を勉強の為に歩いた。基地周辺の朝鮮人の家に行くと、犬の肉をご馳走になり歓待されたこともあったという。当時の日本共産党中央は、在日朝鮮人や在日華僑を日本での「少数民族」として位置づけていたので、同じ「少数民族」である朝鮮人とも一緒に活動した。華僑と朝鮮人とは、お互いに教えたり教えられたりする関係だったのだ。

4.3 徐々に大陸派と台湾派に分かれた華僑たち

1949年の新中国成立前後は、読書会と称して同志たちが集まり、華僑の団結と組織を強化するような活動をした。読書会という名前をつけたが、改めてテキストを決めて勉強するわけではない。10人ほどの仲間が集まり、華僑の愛国団結の強化や国民党に対する戦い、台湾の解放を目指すような勉強会である。

華僑総会の理事選挙では、国民党に近い人、いわゆる台湾派ではなく、中国共産党に近い仲間を理事に出すように運動をした。現在は、中国大陆を支持する華僑と台湾を支持する華僑たちはそれぞれ別々に華僑総会を作っているが、当時はまだ華僑総会も二つに分かれてはいなかった。

商売人が多かった華僑は、理事の選挙といっても問題意識は希薄だ。何のための選挙なのか、その意味をつかめていなかった。そういう点では、「日本人よりは遅れていた」と韓は認識していた。選挙とは何なのか、そんな問題意識を植え付ける。組織意識も弱かった。そこで、まず組織意識をもってもらい、進歩的な人に理事になってもらうように活動をするのだった。

また、気心が通じている人に理事になってもらうべく、その人にみんなの前で演説をやらせたり、票を集めたりして工作する。今度の理事選挙は大事だからあの人を選ぼう。あの方は、みんなのことを考えているからといって選挙活動をするのだ。

台湾省や、東北などの北省とか、各省でまとめて候補者を出すようにもしていった。徐々に智慧がついてきて、選挙の前には、北省なら北省で適当な人数に絞り込んで送り込むというふうにしていった。当然、各省から理事が推薦されて選ばれていく。それ以外は、一般の会員から理事を選んでいく。大会には会員が1,000人、多い時は1,500人も集まってくる。そのために豊島公会堂や共立講堂、あるいは読売ホールや文京公会堂などを借りて大会を開催し、50人から60人ほどの理事を選挙するのだ。

4 4 歌と踊りで結束

華僑といっても、日本社会でどっぷりと生活していると中国人意識も希薄になり、日本に没入してしまう。そのため韓たちは、勉強会を通して、中国人として自覚や意識をもたせようとした。

当時はまだ訪中する人がとても珍しかった時代である。そんな時代に訪中した日本人を呼んで講演会を開催し話を聞く。新しい中国の変容ぶりを直に見た人から話を聞くのは、大きな収穫だった。

ともすれば日本語で会話するばかりで、中国語も忘れがちな華僑たちである。二世の華僑などは、はなから中国語も話せない。そういう中で、「国語（中国語）を学ぼう」と仲間呼びかける。こういう活動をする場合、民族意識をもつ手本として朝鮮青年同盟があった。朝鮮大学校を訪ねては、実際に民族教育をどのように行っているかを視察に行ったこともある。

横浜の華僑学校にも行き、中国の民族教育を実際に見て、民族意識をもつにはどうすればいいかを仲間と検討した。そうして生まれたのが、中国の歌を広める音楽活動だった。中国の歌を翻訳し中国語の歌を唄ったりした。「草原情歌」の日本語訳もそんな中から生まれた。ガリ版刷りで歌集を6集まで作った。最初は、中国人だけでやっていたが、後になって日本人で歌の好きな人が集まってきた。

華僑総会とか学生会の会議室に20近い人が集まり、「東京—北京」などの歌を唄う。中央合唱団ともつながりが出来て、団員が後楽寮に教えに来るようになった。指揮者も出てくるようになった。勇ましい歌あり、叙情の歌がありと多彩だった。中国の歌が好きな日本の若者も一緒に合唱をするようになり、それが「中国音楽研究会」に発展した。

文化大革命の時代は、「北京の金の山」「大海に行くには舵手に頼る」「東方紅」「労働者には力あり」「団結は力なり」「東の空は明るい」など、毛沢東を讃える歌などを集まって唄うのだ。

中国の踊りを習うことも、長く続いた一つだ。洗濯の踊りや秧歌（ヤングウと発音する）という歌で踊るのだ。秧歌とは、農民の田植えの歌である。韓に言わせると、日本の盆踊りみたいなものだという。たまたま手元にあった学研の新版「漢字源」を開いて、<秧>を引けば、ちゃんと出ていたのには驚いた。もと中国農村の田植え歌とあり、その後<今では歌と踊りで構成された、フォークダンスのような民族芸術となった>と説明されている。

抗日戦争や国民党との解放戦争の時は、いたるところで踊られたという。<秧>には、採り入れや苗を植え付けるという意味がある。解放軍が村に入ると、秧歌で歓迎され迎えられるのだ。というのも、解放軍の主体が農民だったということである。韓は、「今でも踊れる」というので見せてもらったが、いたって簡単な踊りだ。農村で苗を植え、刈り取りをする格好を踊りにしたものだ。「田舎の踊りだよ」と韓はいう。それでも華僑たちの集まりを早稲田大学の大隈講堂でやり、日本で初めて披露したそうである。1951年のことだ。「私が振付けたんだが、歴史的なものだと思う」と、やや得意そうにいうのだった。

この単純な踊りも、解放前と後ではリズムが違うらしい。解放前と違って、解放後はみ

んな喜んで自然発生的に踊り出すという。新中国では、秧歌隊として文化工作隊の一つとして、赤や青の派手な帯をしめて踊り歌い、各機関が国慶節などに街で練り歩くのだ。とりわけ秧歌は、旧正月に必ず踊るらしい。北京などの都市でも、秧歌で解放軍を迎えたという。農民が主体である解放軍を歓迎するには大変良かったようだ。

4 5 映画「白毛女」に感動

踊りも南の方へ行くと茶摘みの踊りがある。韓はそんな踊りも、華僑の青年たちに教えた。若かったこともあるだろう。みんなから「韓さん、踊ってよ」といわれると、見様見まねでやり華僑青年が踊る。そんな日が続いた。社交ダンスも盛んだった。華僑青年が住む後楽寮には、毎週土曜日にアコーディオンを引く楽団が来てダンスパーティだ。

当時はテレビもなく、みんな娯楽に餓えている。ダンスパーティがあると聞きつけて、近所から娘さんや勤め人が来る。パーティは常時、4、50人が集まった。多い時はもっと増える。当時のお金で70円とか100円の会費だ。そんなパーティが縁で、留学生で日本人と結ばれた者もいた。

大学でも社交ダンスが流行っていた。当時は、ちゃんと踊れる人がパーティになるとやって来て、ダンスを教えてくれるのだ。トロットとかタンゴとかワルツとかを踊る。今と違って韓も若い。「体も軽かったから、大いにダンスを楽しんだ」。そんな時代だ。

秧歌、茶摘み踊り、洗濯踊り、チベットの女性だけがやる踊りなどを、映像を見せて踊る。歌舞団が踊ったのを見て、真似て国慶節の記念集会でのアトラクションなどで披露するのだ。合唱や華僑青年の踊りなどで、1時間から1時間半の時間がもてるぐらいのレパートリーができるほどだった。そういう活動を通して華僑の青年活動を広げていったのだ。

映画の鑑賞会も盛んにやった。映画を見ながらナレーターもやった。当時見た映画で今でも記憶に残っているのが、「ぶどうの実る頃」や「淮河の水利工事」「白毛女」などである。16ミリの映写機をかついで、中国から寄贈されたこれらの映画を仙台や神戸に出かけて上映したこともある。映画を見せながらナレーションを入れてやるのだ。青年会から活動費をもらったり、カンパしてもらったりして、お声がかかれば日中友好協会の集会をはじめ、どこへでも行くのだ。

新中国の情報が乏しい時代である。「白毛女」を見て、「感動しました」と握手を求めてきた日本人もいた。

4 6 変化する「中国人意識」

これらの新しい中国映画を見て、中国の新しさを実感するのだった。映画を観て韓は、「それまでの中国の人間と人間関係の有り様が違う」と思ったというが、具体的にそれはどういうことを意味するのだろうか。その点を詳しく聞いた。

韓は、留学生として日本にやって来た。

「旧満洲国時代の僕らは、＜中国人としての意識＞で何かやるということにはできないわけです。日本人の言いなりにならざるを得ない。戦争が終わるまではそうだった。日本の政府は、日本のために働くような人材にさせるために留学生として連れて来て教育した。日本政府は、我々を一応大事にしてくれる。しかし本意は違う。将来は日本のために働く青年幹部という方針ですよ。

戦争中、日本の若い人たちは兵隊になることが目標だという人が多かった。もっと具体的にいえば、海軍兵学校に行くとか陸軍士官学校を受けるとかが、中学生のみんなの望みだった。そんな日本人に自分も影響を受けるわけだ。しかし、＜俺は日本人ではない、中国人だ。中国を良くするためには、中国の兵隊にならないのはいかな＞と思うわけです。愛国的な風潮に煽られて、兵隊になる方法はないのかと思ったりするんだ。＜日本人が自分の国を愛して、戦争にはせ参じる＞のと同じような意識で自分たちも、＜兵隊になって国を建て直すんだ＞という気持ちになる。それは、日本の侵略者を中国から追い出すという考えですよ。言ってみればそれは、屈折しながらも日本で教育された影響だと思う、と韓は言う。

そうして、中国人としてどうしたらいいかを考える。時にはこんな考えが浮かんだりするのだ。「重慶へ行けるかな」。「重慶は抗戦の地でしょう。当時は延安の共産党なんて、頭にはなかったよ」

「共産党は怖い」というイメージを、韓は根強く持っていた。旧満洲での日本の宣伝の影響である。「赤い熊」という漫画を描いて、これが共産主義だ、これは怖いぞという宣伝だ。まだ中学にも行かない韓は、狼とか赤い熊が口を開けて、いかにも自分を呑み込むような漫画である。日本の関東軍はこうやって共産党の恐怖心を煽っていたのだ。

47 呉学文との出会い

後年、呉学文という存在を知る。日本の陸軍士官学校を卒業したエリート中のエリートだった呉学文は、卒業後帰国し満洲国軍に編入され、少尉に任官される。軍務に服するがそのまま満洲国軍に留まることを善しとせず、敢えて危険な道を選んで、抗日の闘いに邁進している国民党に行った。しかし徐々に国民党の限界に気づき、共産党に移ったのだった。

戦後もだいぶ経ってから、韓は呉学文の手記を読んだ。

「彼は日本軍の軍服を着て、北京からとぼとぼ歩いて河南省まで行き、日本の影響区域を潜り抜けて、国民党の陣地にたどり着くんですよ。彼の文章を読んで感動したね。＜自分の考えで自分の国を良くしよう＞という意識が湧いてくる。留学生だった当時、呉学文の行動を知っていたら、全く同感しただろうね」

呉学文は、李徳全を団長とする最初の中国訪日団に随員としてやって来た。2回目の貿易代表団の記者グループにも入っていた。訪日団の通訳をやっていた韓は呉学文と親しくなり、今でも先輩として交流をする仲である。

「日本の中学校で、中国から留学生たちが寄り集まった時、いやあ我々も中国人として戦争で日本軍と戦うということができればな、と思った。日本で教育を受ければ受けるほど、自分の祖国はどうだろうか考える。日本の侵略を受けていると思うと、一人の中国人としてどういうふうに愛国の行動を取るか。一つは呉学文さんのような考え方に到着するでしょうね。もう少し先進的というか左翼にいけば、＜延安＞ということになるでしょう。延安に惹かれていく。孫平化がそうでしょ。呉学文は国民党に行き、その後＜共産党でなきゃいけない＞となったわけです。ぼくが当時もうすこし大人で、それだけの行動力があつたなら、たぶん重慶の方だったろう。共産党は日本の宣伝の影響で怖かったもの」と語る韓だった。

48 作られた「共産党は怖い」というイメージ

その「怖い」というイメージも、解放戦争で予想もしなかった共産党が徐々に国民党に勝ってきたことと、さまざまな情報を得て旧い共産党観が崩れていき、共産党も怖くないと思うようになってきた。

その上、戦後は中国の共産党から留学生への救援金が送られてきた。韓は、これには驚いた。香港ドルや英国のポンドで送られてきたという。

日本軍が中国から略奪した繊維類が新潟にあるとわかり、学生会のトップとして、国民党の代表団に押しかけて要求したこともあった。生活がやっていけない終戦直後は、日本の外務省から留学生は月500円をもらったりしたこともあった。

以前書いたように日本の敗戦前は、韓は満洲国の大使館から奨学金をもらっていたので問題はなかったが、日本が負けてからは困った。1946年（昭和21年）の春ごろ、新円の切り替えが始まった。100円しか切り替えられないのだ。

正統政府である国民党に生活改善を要求したが、いい結果を得られなかった。しかし中国共産党は、貧しい留学生に学費を援助しようと中国から同学会に事実、お金を送ってきたのだ。

1952年頃、各自月6千円もらったという。韓たちは、それぞれの学生の家に行き、本当に困っているかどうかを調査した。時代は朝鮮戦争中である。中国は「国」として今のようにお金があったわけではない。そんな状況下でも貧しい留学生に新中国は、学費を援助した。多くの中国人学生たちは新中国に惹かれていった。

1953年、韓が学生代表として帰国者たちを率いて送るために一時帰国した時、このことを中国側に報告した。「自慢じゃないけど、留学生の所に足で歩いて行き、彼らの実情を見て、学生たちに金を渡してきたのだ」と堂々と報告した。こういう運動をして、大陸出身者や台湾出身者に関らず、何万ドルかの金を貧しい留学生の奨学金として渡してきたのだ。韓は、翻訳や通訳などのアルバイトがあったので貰わずにきた。

49 寛大な解放軍精神

1953年は、日赤などの協力で中国から日本人の引揚げ業務が再開された年だった。中国共産党に「洗脳された人々」として、一部は公安に警戒された。そんな中国帰りの日本人と韓たちは、盛んに交流した。しかし、中国から帰国した人々は、韓から見ると中国のいいことばかり言う人たちが多かったように思えた。それが、「蚊もいない蠅もいない清潔な中国」という言葉だ。中国にいろいろ恩恵を受けていたから、今にして思えば、そうそう悪いことを言えない状況かとも思った。しかしその時は本当に素晴らしい国になったのだと思った。華僑の帰国運動が更に高まった。

撫順収容所に収容されていた戦犯たちも起訴免除され、釈放され帰国してきた。中国共産党の実に寛大な処置の結果である。国民党は800万という兵隊がいたが、結果的に200万足らずの兵隊しかいなかった共産党に敗北した。中国共産党が勝利したそのキープポイントが、この寛大な精神だった。

国民党の兵隊が逃亡し、共産党に投降する。その時も共産党は、殺さずに寛大な処置をする。解放軍に参加しない兵士には、旅費を与えて自分の故郷に帰すのだ。相手を殺さずに帰す。このような共産党の寛大な政策を、戦犯にも応用したのだった。

まず罪業を自白させ、罪意識を悔い改めて帰す。最終的には、将軍も兵卒も中国の寛大な政策に感動し、帰国後日中友好運動に参加していったのだ。

「満洲国」の皇帝も殺されることなく、許されて一市民として生活するようにはできた。中国の歴史を見ればわかるが、倒された王朝は、皇帝の一族郎党、九親等まで殺されるのが通例である。このような寛大な精神をもつ共産党を見て、続々と国民党の偉い軍人までが共産党の方にきた。

韓は、このような今までの中国の歴史にない、国民党から毛沢東、周恩来率いる中国共産党へ入ってきた人たちを「大地報」でよく載せた。集団で共産党へ移ってきた人もいた。蒋介石の直々の親衛隊も共産党にきて勝利に繋がったのだ。

50 中国帰りの日本人たちとの出会い

中国共産党を信じると同じように、韓は日本共産党を信じていた。1958年、当時の全学連の指導者たちが、日本共産党と決別し、新たな前衛党にすべく共産主義者同盟（ブンド）を結成したが、韓はその事実を知らなかった。前述のように「関心はなかった」のだ

しかし、大地報という華僑向け新聞の責任者として、1958年の中国の「大躍進」の報道には全力を尽くした。

新華社やアジア通信、中国から中国語で流れてくる中央放送局のラジオ放送、香港の大公報、文匯報などがニュースソースだった。中国新聞社の香港支社から配信されてくる記録を優秀な女性が拾い、また同じ中国新聞社のラジオ放送から流れるニュース「記録新聞をより早く聞くために、性能のいいアンテナを張った。

訪中した日本人からも、いろんな報告会で新しい中国事情を聞く。そこではしばしば、古い中国との比較で現在の中国が語られるのが通例だった。韓は、古い中国と比較すれば進歩は著しいが、日本と比較してどうなのか。過去の歴史から見れば素晴らしいけど世界的なレベルから見なければいけないのに、と思ったりした。

「大躍進」の報道に接すると、素晴らしいと思いつつ、「15年経てばイギリスを追い越す」という言説には疑問に思った。そんなに簡単じゃないと思いつつも、そういうスローガンが出てくると、「すごいな」と思う一面もある。鉄の製造の精錬運動には、これからの中国の意識を変えていくんだなと思っていた。しかし、現実には2、3年後に失敗したことが判明した。

その結果、毛沢東は劉少奇に国家主席を譲った。危機感をもった毛は、劉少奇を打倒しようと行動を起こす。文化大革命が始まる契機になるのだった。

1960年の安保闘争の時、韓はどうだっただろう。

反安保闘争は、直接的には日本の問題だ。内政干渉はしないという方針である。しかし、アイゼンハワー大統領が訪日する際、「台湾へ行く」という情報が入った。台湾ということになると、華僑たちにとっては中国の問題である。直ちに、「アイゼンハワーの台湾行き反対」というスローガンを掲げて、何百人かを動員して、「アイクの台湾訪問反対」というプラカードを持ち、老華僑は旗をもってアメリカ大使館までデモ行進をした。そんな老華僑を撮った韓の写真が、華僑の写真コンクールで賞を取ったこともあった。(次号続く)

映画「嗚呼 満蒙開拓団」のロケ地 中国・日本人公墓への旅（2010）

- 日程
- | | | |
|----------|-----------------------------|-------|
| 6月23日（水） | 新潟空港ロビーに集合 | 10:00 |
| | 空港発（CZ616便） | 12:15 |
| | ハルピン空港着 | 13:40 |
| | 宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル | |
| 6月24日（木） | 貸し切りバスで方正へ（高速道・約2時間半） | |
| | 方正県政府表敬訪問、墓参と日中交流 | |
| | 宿泊＝鑫禧大酒店 | |
| 25日（金） | ゆかりの地（伊漢通開拓団跡地ほか）訪問 | |
| | 貸し切りバスでハルピンへ | |
| | 宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル | |
| 26日（土） | ハルピン市内見学（太陽島、731細菌部隊記念館）買い物 | |
| | 宿泊＝シャングリラ（香格里拉）ホテル | |
| 27日（日） | ハルピン空港発（CZ615便） | 9:50 |
| | 新潟空港着 | 13:00 |
| | 空港ロビーで解散 | |

* 時間は現地時間、中国は日本の1時間遅れ

- 定員 15名
- 会費 150,000円（シングルの宿泊ご希望の場合は差額10,500円プラス。集合、解散の新潟空港までの交通費はふくまれていません）
- 申込み 5月20日までに下記・奥村までお申し込みください。なおその折、パスポート（顔写真のページ）を下記のファックスへお送りください。
- ご送金ほか
- ① [会費の払い込み] 振込用紙をお送りしますので5月31日までに指定の口座へお振込みください。
 - ② 旅行にかかわる保険料は含まれていません。保険は空港でもできます。東京→新潟（新幹線、片道10,470円、高速バス片道5,250円）新潟駅→空港、バス350円、約30分間隔で運行。
 - ③ その他、お問い合わせはお気軽に下記へどうぞ。

方正友好交流の会

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6

（社）日中科学技術センター内

電話 03-3295-0411

■ 方正旅行の問い合わせ： 奥村正雄

電話 043-272-9995

FAX 043-272-0214

第3回近現代の歴史検証と北東アジアの未来を展望する旅

——ハイラル、ノモンハン、チチハル、方正を訪ねる旅——

日程	8月19日(木)	成田発(CA926)	15:15
		北京着	18:10
	8月20日(金)	北京発(CA1131)	7:30
		ハイラル着	終日:モンゴルとの国境の村ノモンハンへ
			ラマ 教寺院の街、旧日本軍の最前線基地カンジュール廟 旧日本軍の要塞跡、ノモンハン村の戦争遺跡陳列館 の見学
	8月21日(土)	カンジュール発	午前
			カンジュールよりハイラルに戻る
			ハイラル市内見学、旧関東軍北山要塞跡、ハイラル神社、 伊敏河断橋(ソ連軍爆撃跡)
		ハイラル発	夜行列車(1等)でチチハルへ
	8月22日(日)	チチハル着	早朝
			終日:チチハル市内及び郊外視察 開拓団本部跡、関東軍陸軍病院跡、516細菌部隊 跡、郊外の開拓団部落跡(甘南県、龍江県など)
	8月23日(月)	チチハル	終日:チチハル市内視察
			清真寺(イスラムのモスク)、旧日本時代の満鉄駅舎、満鉄病院、満鉄社 宅、宮前小学校、永安大街など
	8月24日(火)	チチハル発	チチハル札竜(ザーロン)自然保護区・丹頂鶴見 学、午後:大慶へ、油田博物館、鉄人記念館見学 その後ハルピンへ
	8月25日(水)	ハルピン発	終日:方正日本人公墓参拝、人民政府訪問、革命 烈士記念碑など(この日、自由行動可)
	8月26日(木)	ハルピン発	8:40(CA1640)
		北京着	10:30
		北京発	13:25
		成田着	18:00

定員 25名

費用 265,000円

申込み 7月20日まで。ご関心のある方は、詳細の日程、申込書などを送付します。
下記までにお問い合わせください。

主催: 社団法人日中科学技術文化センター、方正友好交流の会

担当: 大類善啓 TEL:03-3295-0411 FAX:03-3295-0400

Email: ohrui@jst.or.jp

——「方正友好交流の会」へのお誘い——

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府によって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。(黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります)

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、国際的な友愛精神、国際主義的な精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

(口数は最低一口、上限はありません)

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 (社) 日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail: ohruai@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス : <http://www.houmasa.com/>

書籍案内

方正友好交流の会が編集した本と会員及び関係著書をご紹介します。

- * 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』
方正友好交流の会 編著

日本人公墓建立までの経緯などを王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み、全力で稲作指導に邁進し「日中友好水稲王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り帰国後、日中友好運動や麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類善啓が執筆。また「方正友好交流の会」を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進した記録などが収録されている。定価 1500 円。(事務局に残部あり)

- * 『中国残留日本人という経験 「満洲」と日本を問い続けて』 蘭 信三 編

本書は、中国残留日本人の多彩な経験を通して、現代の日本を問い、「満洲」とは何だったのかを総括する。いわば中国残留日本人研究の総決算ともいえる 600 頁を超える大部の書だ。会員の南誠さんが『想像される「残留日本人」－国民をめぐる包摂と排除』を、同じく猪股祐介さんが『満洲農業移民から中国残留日本人へ』というタイトルで論文を書いている。

勉誠出版(株) 電話 03-5215-9021 定価 8000 円(税別)

- * 『風雪に耐えて咲く寒梅のように 二つの祖国の狭間に生きて』
可児力一郎 著

著者は、旧満州へ入植してから 17 年ほどの中国での残留生活を経て帰国するまでの記憶を綴ろうと、慣れない日本語と苦闘しながら、2003 年本書を書き上げた。著者宛てに直接申し込んでいただきたい。〒399-5303 長野県木曾郡木曾町田立 1 2 2 3 可児力一郎
(かに・りきいちろう) 定価 1700 円。電話 0573-75-4755 F A X 0573-75-4557

- * 『満州開拓民悲史一碑が、土塊が、語りかける』 高橋健男 著

満州開拓民に何が起こったのか? 中国残留孤児はなぜ生まれたのか? 国策に翻弄され、満州開拓の果てに斃れた受難の民への鎮魂を込めて、方正に集結した避難民、佐渡開拓民跡事件の殉難者たちを初めて総体的に検証する。方正を知るためには格好の書。希望者は書店あるいは直接発行元へ。批評社 03-3813-6344 定価 3000 円(税別)

《報告》 ありがとうございました

前号の会報 9 号発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受

付けた順に記載しました。2010年4月19日現在)

大崎やま子 窪田かつよ 貞平浩 篠崎務 丹藤佳紀 森田恭子 青木孝 皆川純磨
山田陽子 宮腰直子 阿久津国秀 岩増弘三 武吉次朗 鈴木敏夫 小畑正子 小池健治
斉藤正 小関光二 瀧亀久男 望月迪洋 山内良子 吉岡稔 山下くに 宮下春男 山田
弘子(越谷市) 中島紀子 篠田欽次 辻庸子 秋葉二郎 塩谷建 山下美子 甘利真美 田
中實 星浩一 樽沢仁 宮下元嗣 金子彰 石原政子 魚崎宏 丹保洋子 福久一枝 芹
沢昇雄 土川克広 杉田春恵 高木涼子 網代正孝 石田和久 木村美智子 馬場永子
小栗勝則 大島満吉 伊原忠 津久井洋 鶴沢弘 伊佐昭紀 井出孫六 大場武男 岸陽
子 伊藤州一 小島正憲 榎本晴夫 奥村勉 高嶋正文 名井佳子 野中西夫 財団法人
兵庫県海外同友会 師岡武男 白西紳一郎 金丸千尋 南哲夫 高橋増江 遠藤勇 高橋
健男 吉川雄作 潘穎楠 田中ケイ子 吉安蓉子 水城可 今村隆一 小木謙助 中丸巖
伊藤健一 崔鳳義 崔岩 齋藤實 古賀勇一 堀江はつ 長谷部照夫 及川康年 照山真
木子 栗原貞子 伊東行子 飯田喜三郎 酒井武史 青柳幸司 石井敏夫 関本嘉明 阿
部慶一 吉原和子 南川久 百崎進 鳥島せい子 可児力一郎 南雲英雄 佐藤千栄子
鈴木俊作 谷口誠 湊谷節子 駒ヶ嶺法子 田村璋 奥村誠 丸野公平 山田寿子 黒岩
満喜 名取敬和 川内カチエ 金子静子 望月信隆 常住三千代 上条八郎 新石侑久
吉川孝人 山田敬三 末広一郎 三上智恵子 村山綾子 竹井成範

<編集後記>

昨年、岩波ホールで上映が始まった『嗚呼 満蒙開拓団』は今でも全国で、主に自主上映会という形で上映され、多くの人たちの感動を呼んでいる。こういう映画を自主的に見ようとする動きがある限り、まだまだ日本も捨てたものではない、と思ってしまう。しかし、そんな考えは甘いのかもしれない。マスメディアがひとたびある論調を張り出すと、人々が一斉になびく風潮は、昔も今もそう変わりがないからだ。その証拠といえば、つい最近まで吹き荒れた検察の小沢潰しと、それに同調するかのような、マスメディアの激しい小沢批判を挙げることができるだろう。

先日もある友人がこんな話をした。台湾が戒厳令下にあった頃「台湾の政治犯を救う会」の有力メンバーであった彼が、かつて新聞記者に、日曜日の集会にぜひ取材をと電話をかけたら、記者が「日曜日だと誰も出席しないよ」と言って嫌がり、取材をしなかったという思い出だ。好きで新聞記者をやるのではなく、給料が高いから新聞社に入るようになってから、記者も本当にダメになったねえと彼は嘆くのだ。

が一方、東京地検を実証的に批判する記事を連載した『週刊朝日』が爆発的に売れたという事実もある。インターネットや投書、ゲリラ的に小冊子を発行するなど、大メディアでなくても出来ることはある。そういう思いでこの会報を発行し続けていきたいと思う。(大類)

《表紙写真撮影・師岡武男》

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第10号) 2010年5月10日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 日本分譲住宅会館 4F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス：<http://www.houmasa.com/>